

---

# 東方思幻想

マッサー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方思幻想

### 【コード】

N0388U

### 【作者名】

マッサー

### 【あらすじ】

その世界は幻想に生きる者達が住む。

ならば、現実に住む者が幻想の世界に行き、生きていく事が出来るのか？

これはそんな幻想の世界のほんのページである。

(2011年7月4日、【幻想に生きる者達】から題名変更しました。

求聞史紀（2011年12月19日最終追記）（前書き）

阿求

「これは私が書き記した本です。情報を見たく無いという方は、この話を飛ばしてください。（オリキャラや、オリ設定などなどの紹介なので、ネタバレが嫌な方は飛ばしましょう。この話は追記されていきます）

夜があげないですね・・・何かがこの幻想郷でおきています・・・  
・ 真実の情報は私の所へ来るのでしょうか？どうなんですか？はたてさん？」

はたて

「う・・・ま、任せなさいな!!」

阿求

「・・・・・・・・（無理そうですね）」

## 求聞史紀（2011年12月19日最終追記）

博麗の巫女の守護者

相澤信太（Sinn-ta Aizawa）

【刃物を具現化する程度の能力】

種族・人間 性別・男

職業・巫女の守護者

住んでいる所・博麗神社

両目・黒 髪・長くも短くもない黒

幼きころに幻想郷へとやってきた外来人。博麗の巫女のパートナーと言っても過言ではないと言われている。紅霧異変の時にはコンビで戦うことはあまりなかったようだ。次に期待しよう。

【性格】

冷静で物事に的確な意志をつく。博麗の巫女の暢気さは、彼が頑張っているからかもしれない。

【能力】

霊力の使用で青色の刃を生み出す事が可能。刃物の種類は様々で、本人が決める事が出来る。一番使いやすい大きさはナイフぐらいの大きさのようだ。

【日常】

買い出しや、神社の掃除などが多くいようだ。家事もそれなりに出来るらしい。里にもよく顔を出してどこかの手伝いをし

ている。

【目撃情報】

・ 寺子屋の授業を手伝って貰ったよ。中々上手だったな（寺子屋の先生）

どうやら人に教えるという事も出来るようだ。

・ 授業楽しかったよ！阿求ちゃんも来てみなよ！（花屋の娘）  
だから私はもう知っている事ばかりなんだけど・・

・ 店の手伝いをして貰ったけど、手際がよくてしっかりしてぜ！また手伝いに来て欲しいもんだ！（里の道具屋店主）  
様々な店の人に重宝されているようだ。

・ 記憶を失ってもあまり変わってはいないようです。（十六夜咲夜）  
それはよかったです。

【外の記憶】

彼は外の頃の記憶が失われている。それがここに来たからなのかはわからないが、どうやら問題なく生活しているようである。信太さんを知っている人たちが多く幻想入りしているようだ。偶然かどうか不明。何か最近、自分の事について考えることが多くなっただらしい。

魔導戦士（名付け霧雨魔理沙）

桜井俊一（Syunniti Sakurai）

【魔法を扱う（雷）程度の能力】

種族・人間 性別・男

職業・魔法使い

住んでいる所・魔法の森

両目・薄い灰色 髪・短めの整った赤い色

魔法の森で魔理沙と共に暮らしている変わった魔法使い。人間である。

魔理沙と同様あまり里に顔を出す事はなく、魔法の森にある店に顔を出す事が多いようだ。関西弁というしゃべりをするが、よくわからないらしい。

【能力】

彼の能力は魔法を使う事で、雷の魔法を扱うようだ。

魔法の森の店主が作ったマジックアイテム（名前はまだ不明）は、箒バージョンと、槍バージョンがあり、場合によって変えるようだ。相方の霧雨魔理沙と違って近距離のほうが得意らしい。（それは魔法使いとしてどうなんだろうか？）

【日常】

家で魔法の研究をしているか、魔法の森の店によくいたが、紅霧異変の後よく紅魔館に魔導書を借りに行ってるらしい。もう一度書くけど借りに、らしい。

【目撃情報】

・魔理沙とよく神社にくるわね。（博麗霊夢）

やはり相方らしいのでよく一緒に行動するようだ。

・でも一人で神社に来ることもあるぞ。(相澤信太)  
必ず行動を一緒というわけでもないようだ。

会いに行くなら魔法の森か博麗神社が一番だろうが、多少なりとも危険な場所なので注意しよう。運がよければ里で会えるかもしれない。

春雪異変で力不足を感じたのか、霧雨魔理沙と共に研究を多くするようになったようだ。・爆発をよくしてるらしい。

### 紅魔館の執事&門番

海崎賢太 (Kenn ta Umizaki)

#### 【波動を操る程度の能力】

種族・人間 性別・男

職業・執事と門番

両目・茶色 髪・ボサボサ短髪の黒

紅魔館へと落ちてきた外来人。短期間で紅魔館の吸血鬼姉妹の仲を良くさせた人物。中々熱血のような性格のようだ。

#### 【能力】

波動という、人には持っているという(よくわからないが)特殊な力。彼はそれが大幅にあるようだ。

戦い方は主に拳や蹴り。まれにだが別の戦い方があるようだが・・・

？

### 【日常】

執事としての仕事の時はほとんど中にいることが多いようだ。買い物出しには時々でるらしい。

門番の時は一日中見張ってるようだ。たいへんそうだ。

### 【目撃情報】

・門の前で二人が修行みたいなのをしていた（匿名）

二人は似たような能力なので、修行にはぴったりなのかもしれない。

・最初は新しい人がいてびっくりしたけど、話してみれば親近感がわいた。（豆腐屋）

最近紅魔館も穏やかになったようだ。

門番の時には一日中門にいたので、会いに行くならその時がいいだろう。

異変を解決したことでさらに親近感が湧いた人もいるとかいないとか。

一時期行方不明になっていた幻想郷の住民リスト

ここではまだ詳しく書けないが、行方知れずになった住民を書こうと思う。出来れば会っているいる聞きたいのだが。

星熊勇儀

茨華仙（本名、茨木華扇）



ルーミア

水橋パールスイ

メディスン・メランコリー

・・本当にこれだけしか今は書けないのだ。情報が全くない。天狗に頼んでこようかしら。

それと全く関係ない話だが、やけに古くからの妖怪と知り合いな人間（？）が来たようだ。名前をアラスという。ただ彼に関しては私というよりは随分昔に出会ったことがあるようなのだ。もしかしたら古い書物に彼の事が記録されているはずなのでそちらを読んでから新たに書こうと思う。

求聞史紀(2011年12月19日最終追記)(後書き)

阿求

「さてアラスの事について調べるとしましようか……  
ん？なんでしようかこれは

【禁じられし書】……？何か……頭にひっかかるような。なん  
でしようか……」

## 記憶を無くした少年と小さな巫女との出会い（前書き）

この小説は

- ・ 東方Projectの二次小説です
- ・ オリ設定があるかもしれませんが。
- ・ 都合のいい設定があるかもしれませんが。
- ・ 様々なゲームや漫画から設定を使うかもしれませんが。
- ・ スペルカードルール？なにそれおいしいの？という風になっ  
ていくと思います。
- ・ この小説は作者の小説、【東方幻帝界（以下省略）】のオリキ  
ャ+新オリキャラを出します。この小説とは全くの別物と思っ  
て下さい。
- ・ 以上の事がOKな人はそのままお進み下さい。

## 記憶を無くした少年と小さな巫女との出会い

少年Side

「あ・・れ・・?」

僕はどうして倒れてるんだっけ・・?

「う・・ううう・・」

頭が割れるように痛い。それに頭から何か水のようなものが流れる。

「く・・うう・・」

それに身体が暑い・・・身体中が動きにくい中、僕は何とか周りの様子を見る。

ポオオオオオオオ

火が、大量に燃えていた。でも僕は何故か恐怖を感じなかった。何故だろうか・・・

「ぐっ・・」

とりあえず僕は立ち上がった。頭では何もしたくないと思っている筈なのに、体は勝手に立ち上がっていた。

「……………」

フラフラな足取りでどこかに歩いていく。ここから逃げる為に歩いている訳では無いようだ。

「……………」

何で僕はこんな所にいるんだろう？

確か僕は【みんな】と一緒に探検ごっこを……してた？あれ……かくれんぼだっけ……？鬼ごっこかな……

それで……その後は……

「……………!」

考えが混乱している中、僕はいつの間にか歩いているのを止めて立ち止まっていた。

「き、きききき、貴様！それ以上近づくな!!」

誰だろう……この人。

二十歳ぐらいの男の人だ。腕から血を流して僕に近寄るなっ言っている。

どうして？

「来るな！くるなくなるな！くるなあああああああ！」

男の人は拳銃を構えている。その手は震えていて狙いが定まるのかわからない。

「っ!!!!」

バン!

僕が近づいて来ているのに耐えられなくなったのか、男の人は弾を発射させた。

僕はその時気付いた。男の人は僕に恐怖を感じていた事。そして僕が

血まみれのナイフを持っていた事に

ザシュ

ポト

男の人の首が落ちた。文字通り、僕が切って捨てた。

「.....」

僕は何も言わず、いや喋れずに立っていた。

いくら考えても結果は変わらない。

僕はこの男の人を殺したんだ。

不思議と何も思わなかった。むしろ何も感じなかったというべきかもしれない。

なんでこんなことをしたのか、なんでこんなことになっていたのか。全然覚えていないのだ。

「【みんな】は大丈夫・・・かな・・・？」

あれ・・・【みんな】って・・・だれ・・・？

ガラガラガラ・・・

もういいや・・・火で崩れ落ちてきた物を見て、僕は考えるのをやめて目を閉じた。

もう目が霞んでたから、閉じても閉じなくても同じだったから・・・目を閉じた。

『1111で・・・』

？・・・誰だろう？

『死なせない・・・』

どこかで・・・本当にどこかで聞いた女性の声・・・のような気がする。

『君は……ここで死んでは……いけない……』

でももう僕は声を出す事も出来ない。歩く事なんて尚更出来ない。

『大丈夫……君は自分の進む道を決めて……』

一体何を言ってるの？という疑問も光りが、大きく輝いたと同時に消えた。

【拳銃を持った青年！？少年を道連れにして自殺か！】

【XXXX年X月X日XX時XX分、拳銃を持った青年、火山透がコンビニから現金を奪った後逃走。その後付近にあった古びた屋敷に逃げ込み、火を放った事を見て警察は自殺をはかったのではないかと思われています。】

【そのさい、その屋敷に遊んでいた五歳の子供数名が怪我を負い、一名が死亡と確認されました】

【不思議な事ではありますが、青年と子供の焼死体が発見されなかったのが、謎を残しています】



「……………うっはっ！」

僕は目を覚まして辺りの様子を見た。さっきまでいた所とは明らかに場所が違っていたからだ。

「どっ…っ…っ…？」

でもそんな悠長な事を考えてる場合じゃなかった。

キシヤアアアアアアアア！！！！！！

「！！」

とても近くから、人とは思えない声が聞こえていたのだ。そして何かを切るような音も。

僕は咄嗟にその方向へ走り出していた。

巫女装束の少女Side

キシヤアアアアアアアア！！！！！！

ズバツ！！

「あぐつ！！！」

私は妖怪の爪を直撃で喰らってしまった。

「ぐう・・・うつ・・・」

たかだか下級妖怪の攻撃だ。すぐに反撃をしたかったが、身体がいうことを効かない。

「（なんで・・・動いてよ！！）」

それも、心の奥ではわかりきっていた事だ。いくら私が巫女としての力を持っていても、私はまだ五歳の子供なのだ。傷が浅いと思っただが、思ったより深かったのだ。

グルルルル・・・

妖怪が近づいてくる。勝利を確信しているのか、ゆっくりと近づいている。

「（ふざけないで・・・私は、こんな所で・・・！）」

お母様を早くに亡くした私でも、愛情は伝わっていた。短い年月だったけど、私にもわかったのよ。

お母様は、巫女として多くの人を救いたかったのよ



「……え？」

妖怪が粉みじんになって消滅した。後に残ったのは私と少年のみ、  
となった。

互いに喋る事なく、沈黙の時間が流れる。

「……あなた、一体誰？」

私は咄嗟にこの人に名前を尋ねていた。

「……信太・相澤信太。君は？」

「私は霊夢。博麗霊夢よ」

これが、彼との出会い、だった。

記憶を無くした少年と小さな巫女との出会い（後書き）

どうも、お久しぶり？です。

そんな訳で始まりました。新小説。文字数にこだわるのは諦めました。これからは書きたい量だけにします。

信太

「それより作者・・・いきなり俺はどうなってるんだ？」

うむ。やはり信太は博麗神社に行かなくてはならないから・・・ね？

霊夢

「（作者よくやった！）」

信太を助けたのは・・・どうせアイツでしょ？口調が違和感感じたけど・・・

うむ違うよ。

霊夢

「ん？」

オ・リ・キ・ヤ・ラ！

信太

「ふむ・・・まあ、まだ始まったばかりだからな。これからよろしく  
お願いします」

思うこと（前書き）

マッサー

「一応言いますが、今の信太と霊夢は五歳ですよ」

霊夢（五歳）

「口調が変になるのも、幼年期故に致し方ない」

信太（五歳）

「・・・そうかな？」

## 思ひごと

霊夢 Side

「貴方、人里の子かしら？助けてくれてありがとうございます」

私よりちょっと背の高い男の子で歳も同じくらいの、信太、て言っ  
たわね。

「迷子になったの？なら送るわよ。ここは危険だし」

でも人里の住民にしては服装が変ね。いったい何処の子かしら・・・

「・・・そんな危険な場所に、君は大丈夫なの？」

う・・・さっき危険な目にあつてたからなんて言えばいいかしら・・・  
カッコつけた事なんて言えないし・・・

「わ、私は博麗の巫女だから妖怪退治してたのよ。ちょっと危な  
かったけどね」

う、嘘は言っていないわよ？事実だし・・・

「幻想郷を・・・ま、守っていく事も大事な事なんだから、貴方も人  
里から迷子にならないようにしなさい、仕事増やされても困るのよ」

とりあえずだいたいあつてる（自分で思い込んでいる）事を言つて、  
人里に早く帰つて貰うようにしなげや・・・

「・・・幻想郷？・・・博麗の・・・巫女？・・・話が全然わからない」

あら？幻想郷や私の事がわからない・・・てまさか！

「ちよつと待つて貴方、も、もしかして・・・」

昔、お母さんに聞いた事がある。ここ、幻想郷の事を全く知らない人間の事を・・・

「が、外来人！？」

外からやって来た人間、外来人というのだ。

「（まさか、本当に外から来る人なんていたんだ・・・て、暢気に驚いている場合じゃない！）」

見れば信太は首を捻って不思議そうに私を見ている。それもそうだろう。私の言葉の意味が理解出来ないのだから、不安になるのは当たり前前だ。

「（きつと外に帰りたがっているから・・・私が帰してあげれば・・・）」

外から偶然流れ着いてしまった人等は博麗の巫女が責任を持って外の世界に戻す事をする・・・てお母さんに・・・お母様に教えて貰った。

だったら今すぐにも彼を本来の場所に帰してあげようと、神社に案内しようとした・・・



でも、私は出来なかった。

「（もし、もし、外に送り返すのに失敗してしまったら・・・？）」

私は確かに博麗の巫女を名乗っている。でも、今は肩書だけが強く出ているだけで、実力はまだまだ未熟だ。

「（そんな私が彼を外に・・・返せる・・・？）」

一気に私は不安の圧力に押し潰されそうになった。一度覚えてしまった不安は簡単には消えない。このまま自信が無くなってなにもかもが嫌になる・・・と思った。

でもここで、私は非常に驚く事になる。

「霊夢？大丈夫？」

「ふえ？」

信太の顔が目の前に信太の顔が来ていたのだ。接近していた事にまるで気付かなかったわ・・・

「なんか嫌に顔が青ざめていったんだけど・・・本当に大丈夫？今は赤いけど」

「う、ううん、なんでもないのよ！」

ちょっと自分の顔が赤いけど、き、きつと気のせいよ！

「それで、僕はどうしたら・・・」

「・・・今日は人里に案内するわ。明日になったら、外の世界に帰してあげる」

彼はまだ疑問そうな顔をしていたが、これ以上話していたら私自身が不安に押し潰されそうになりそうだから、私は切り上げて先に歩き出した。

私の力が、彼を自分のいた外に帰れるように、願いながら・・・

信太Side

博麗の巫女の霊夢から、人里に連れられた僕は、ある人の家に泊めて貰う事になった。

「はじめまして。上白沢慧音だ。ここの寺小屋で教師をやっている」

「相澤信太です・・・よろしくお願いします」

慧音さんは霊夢のお母さんの事を知っていた様子から、霊夢の知り合いなのかもしれない。

そして僕は慧音さんから幻想郷の事を聞いた。  
慧音さんからは明日帰るんなら聞かなくてもいいのでは？と言われ  
たが、僕はどうしても聞きたかった。  
霊夢と会話をしていた時もそうだったけど、別れる際の霊夢の顔が、  
とても悲しそうで淋しそうな顔だったから・・・どうしても聞きた  
かった。

「わかった。なら、説明していこう」

「お願いします」

僕はこの世界の話聞き始めた。

「さて、今日はもう遅い。布団に入って休んでくれ」

「あ、はい。どうもありがとうございました」

話を一通り聞いた僕は慧音さんに言われた通りに布団の敷かれた部  
屋に行つて寝始めた。

慧音さんに教えて貰ったこの世界はとてもじゃないが信じられる事  
じゃない。

人と妖が存在している、幻想になった者達が住む世界・・・幻想郷。そして博麗の巫女も。代々巫女はこの幻想郷に必要とされている結界を管理しているらしい。そして巫女は神社で生活している。当然人との繋がりは無い。参謀客は来ているようだが、そんなの繋がりとはいえない。

霊夢は、というより博麗の巫女はこれから先もずっと一人で過ごすんだと僕は思った。慧音さんの説明で霊夢の態度の意味がわかった。

霊夢は自分から僕を避けたんだ。繋がりを持たないように。

そんなの、人として間違っている・・・でも僕は霊夢に何をしようか？

それに僕には帰りを待っている人がいるのかもしれない。記憶が無くなったからはっきりとは覚えて無いけど、誰かいた気がする・・・

眠くなってきた・・・

考えが纏まらない中、僕は眠りについた。

信太という少年が部屋に入ったのを確認した後、私は隠れながら話を聞いていた人物に声を掛けた。

「盗み聞きとは感心しないな、妹紅」

「やっぱり気付かれてたのね。・・ごめんなさい。真面目な話だったから、出るのに迷ってたのよ」

そう言っつて謝罪しながら私の友人である少女、妹紅が現れた。

「さっきの子が外からやって来た子なのかしら？」

「ああ、どうやらそのようだ。外来人のようだ」

どういった方法で幻想郷に流れ着いたかわからないが、恐らく何か起きてこちらに来てしまったと私は考えていた。

「珍しい・・というより滅多に無い筈よね」

「ああ、何故急に人が流れ着くかはわからないが、まあ、多分大丈夫だろう」

幻想郷の賢者が今の所動きを見せていない。大丈夫なのだろう。

「外から来た・・・か」

「・・・！妹紅、お前・・・」

妹紅の言葉に私は言葉を投げかけていた。それに反応した妹紅は手

を軽く横に振って否定をした。

「大丈夫よ、慧音。あのころから随分経ってるんだから、引きずってないわ。少し・・・思い出しただけよ」

「・・・そうか・・・じゃあ、私も今日は寝るとするよ・・・おやすみ」

「ええ、おやすみ・・・」

私は自室へと足を進めた。妹紅はきつとあの人の事を思い出したのだろう。もうかなり長い年月が経過した。外から来た、という言葉に私も一瞬思ってしまったのだ。

貴方は今、何処にいられるのですか・・・先生

思うこと(後書き)

マッサー

「文字数は一話3000文字ぐらいを目指したいです」

霊夢&信太

「ガンバ！ガンバ！」

人里・そして決めた事（前書き）

早く出会いとかは終わらせて異変とかに進みたいです



## 人里・・・そして決めた事

信太Side

「ふわぁ・・・」

大きめな欠伸をあげる僕。朝になって慧音さんの作った朝ご飯を食べて、今里を見て回っている。その訳は、朝ご飯を食べている時に、

『まだ時間がありそうだな・・・うむ、信太。少し里を見て回ったらどうだ?』

『え、時間・・・あるんですか?』

『巫女が来ていない事から多分そうだろう・・・せっかくだから里の様子を見ていってくれ』

『はい・・・わかりました』

『それと、一人では里の外に行かない事。博麗神社に行きたいならば私に一声かけてから、だぞ』

といった感じで里を見て回る事にしたのだ。

「(でもなんか不思議な感じがする・・・)」

自分が住んでいた場所・・・はっきりと覚えてないけど、多分全然違う。けれど、何か落ち着く感じもする。

「(なにか良い事でもあればいいな・・・)」

ざっと見て思うのはやっぱり人じゃない人がいるという事だと思っ  
大きな鎌を持った人に話かけたら、

『あたい？あたいは死神だよ。人里にサバ・休憩しに来たんだよ』

他にもふよふよした物体(?)を連れている方や尻尾が何本もあつ  
てもふもふしてそうな方がいます。二人とも買い物をしています。  
人間じゃない方も料理するんでしょうか？

「げえ！？四季様！？きゃん」

さっきの死神さんが正座して誰かに説教されています。関わると嫌な  
予感しかないので無視します。

でもこれだけ人じゃない方、妖怪が里にいても里の住民達は何も反  
応を見せてないのは、無害ということなんだと思う。

「(良い所だな・・・)」

どこか僕はここが気に入りはじめた。里の人達は皆元気が良い。  
里の外は妖怪がいて危険な筈なのに。

ドッ

「！あ、ごめんなさい」

考えていたら人とぶつかってしまった。

「……気にしてない」

ぶつかった人はそう言って走り出してしまった。

やけに大荷物だった。しかも僕と歳が同じぐらいの少女だ。なんだろう……もしかして、お引越しかな？

「すみません、少しよろしいでしょうか？」

今度は後ろから声を掛けられた。振り向いてみたら紫色っぽい髪の毛また同じぐらいの女の子だった。

「えっと……なんでしょう」

もしかして迷子なのかな……僕は道はわからないけど……

「失礼を承知でお聞きします……貴方は外来人の方でしょうか？」

「！え、あ、はい、そうですけど……」

慧音さんに聞いたのかな……でも慧音さん、忙しいって言ってたけど……

「私は稗田阿求と申します。ここ幻想郷の歴史を記している者です」

そ、そんな人が僕に一体何の用事が・・・

「あの・・・よろしければ、私の家でお話しませんか？知っている限りで良いので外の事を記したいので・・・」

あ、そういうことか。断る理由も特に無いから・・・

「うん、わかりました。僕でよければ」

「ありがとうございます」

そして僕は阿求さんの家に行く事になった。

「そういえばお名前をお伺いしていませんでしたね。お名前は？」

「相澤信太です。よろしくお願いします」

家にたどり着く間自己紹介をして、簡単に会話をする。

「（あ、そうだ）」

家に着く前に僕は気になった事を聞く事にした。

「そういえば、どうして僕が外来人だっただけだったの？」

「そうでしたね・・・それは私の能力です」

能力・・・慧音さんの言った事かな。

【○○する程度の能力】

何かしら力のある者は必ずある能力。その能力は幅が広く、様々な能力があるという……

「私は『一度見た物を忘れない程度の能力』を持っておりまして、里の方達は皆わかるのです。貴方は里の方でないですし、服装も少し違うのでもしかしたら、と思ったのです」

凄いと。と思う。僕と同じくらいの女の子がこんな凄い能力を覚えているなんて。僕が能力を持ったらどうなるかな？

「あ、着きましたよ」

話している内にどうやらたどり着いたようだ。

阿求さんの家……というよりお屋敷？に入って色々質問をされた。正直記憶が無いから微妙な答えになってしまったけど、阿求さんは大丈夫だと言ってくれた。

それは別に良かったんだけど……

「（阿求さんの質問……多かった……）」

かなりの数を質問されていたので少し疲れてしまった。

「申し訳ありません……少し興奮してしまいました」

「いえ、大丈夫です。僕の答えで何か記せるなら充分です」

今はゆっくり部屋にある古い記録を見ている。古い書物はかなりぼろぼろで、手にとろうとすれば危険そうである。

「でもそんなに外来人って珍しいの？」

外来人って言葉があるんだから、もっとそんな人達がいると思うんだけど・・・

「はい、前に外来人を確認できたのは今からかなり昔の事なのです  
昔・・・どれくらいかな。」

「稗田一族が初代の時に、確認されたようなのです。因みに私は九代目です」

「そ、そんなに!？」

そんなにも間が空いているなんて・・・

「かなり古い書物ではありますが、記録も残っています・・・これです」

そう言ってかなり古い書物を僕に渡してくれた。開いてみると、どうやら三人いたようだ。

「しかし三人共ある異変で行方不明・・・そのまま時は流れてしまっただようです」

「……………」

「三人とも人間・いえ、一人は人間をやめたようですが、三人は強大な力を持つ人達で……信太さん、どうかしましたか？」

「……………！な、なに？」

僕は阿求さんに声を掛けられて少し飛んでいた意識を取り戻した。

「何か気になる事でもありましたか？」

「……………ううん、大丈夫」

そう言っ僕は書物を閉じて阿求さんに渡した。阿求さんは不思議そうにしていたが、書物を受け取ってくれた。

「あ、そろそろ神社からお迎えが来るかもしれないから、外に出ますね」

「あ、はい。お話、どうもありがとうございました」

僕は少し急ぎ足で阿求さんの屋敷を出た。

「……………」

屋敷を出た僕はあの書物に書かれていた事を思い出していた。あの書物には絵も書いてあったが、その絵と文を見て、何か思い出そうとしたのだ。三人の内一人は知らないけど、その内の二人はどこか自分は知っている感じがしたのだ。

「・・・っ・・・」

考えようとすると頭が痛くなる。無理に思い出そうとしているからかな・・・

あの書物を読んだ時、不思議な感じだった。頭に流れ込むような・・・

ドクンッ！！！！

「ウツ！！！」

心臓が強く高鳴った。頭も酷く痛む。苦しい・・・自分がどうにかなってしまうそうで・・・なんで・・・急に・・・

『それは君が現実と幻想の間に立っているから』

！？声が・・・一体誰の？

『君は今迷っている。帰れる事を望んでいる自分もいれば、幻想郷を知り、博麗の巫女を助けたい自分もいる』

・・・確かにそうかもしれない。巫女は誰とも繋がりを持たない。それは孤独になっていく事だ。



『君はどうしたい？後悔をしない道を選ぶの？』

僕は・・・僕は・・・いや、俺は・・・！

『幻想を抱いたまま、現実には帰れない。君はその答えを持っている限り、現実には帰れないよ？』

・・・構いませんよ。確かに記憶を無くしたまま、というのはまずいかもしれませんが、それでも・・・

『なら・・・答えを出しに行きなさいな』

・・・はい！

「ハッ・・・」

ふと目を覚ましたように僕は辺りを見回した。特に変わった様子は無く、時間は経過していないようだ。

「神社に・・・行くぞ」

僕は・・・うつん、俺は自分の出した答えを霊夢に言つ為に里を出て神社に向かおうと・・・

「.....」

神社って.....どっち？

人里・・そして決めた事（後書き）

次回で信太（五歳）の出番は終わりかな？

博麗の守護者（前書き）

マッサー

「相澤信太（五歳）編、この話で完！」

通りすがりの死神さん

「早っ！」

通りすがりの閻魔さん

「まだまだキャラが出ていませんね・・・」

## 博麗の守護者

信太Side

「よし・・・この先か」

里の人に博麗神社の道を教えて貰ったので、俺は早速向かう事にした。ただそこに行く事を酷く驚かされてしまったが・・・まあ、それもそうだよな・・・俺はまだ五歳だから。

「まあそんな些細な事は気にしないで・・・行きますか！」

まだお昼前だから大丈夫だと思うけど、暗くなる前に神社に向かった方が良くと思う。

俺が能力持ちかどうかはわからない。仮に能力持ちだったとしても目覚めたばかりの力じゃ上手く扱う事は出来ないと思う。

「（なるべく何も遭遇しませんように・・・）」

なんか忘れてる気がするけど・・・まあ、いいか！

【少年移動中・・・】

現在地・人里と博麗神社の間【

「ふっ・・・天気良いー」

里に居た時も感じたけど、ポカポカ陽気で気持ちいいのだ。

「さーて・・・神社はまだかな・・・」

急いで歩いてはいたので、そろそろ着いても良いんだけど・・・

ドカツ！

「うわっ！」

「わあっ！」

突然誰かとぶつかってしまった。一体誰だろうと思って見みると・

・

「いたた・・・なにをするのさ！」

綺麗な羽を生やした少女がいた。全体的な色は青・・・水色だろう・・・  
て今はそんなことどうでもいいよ。

45

「ご、ごめんね。少し周りをm」いきなりふいうちとはやるじゃないわ  
い！」・・・え？」

何言ってるんだこの子？

「でもサイキョーのあたいはそんなふいうちにびくともしないわよ  
！！」

サイキョー？というか凄く睨んでるんだけど・・・怖くないけどさ・

・

「てりゃああー！！」

「て、うおああー！？」

ヒュン!!

危ない!?本気で危なかった・・・氷の刃が顔面すれすれで辛うじて避けた。

「ふふん。サイキョーのあたいにひれふすがいいわ!」

そう言つて彼女は冷気を起こして何かを生み出そうとしている・・・恐らくあれが彼女の能力なのだろう。

今彼女は俺に敵意を剥き出しにしている。となれば、俺は逃げるしか手は無いんだけど・・・

サアアアアア!!

「うあああああ!!」

吹雪に近いような冷気をぶつけられてしまふ。

カチカチ・・・

「(?!?足が・・・)」

その影響か、足を両足が地面に入はり付いてしまった。これじゃあ、逃げる事は出来ない・・・

「ふっふっふっ・・・」

勝ち誇った顔でこちらに近付いて来る・・・まだ勝つてもないのに。

「もう勝った気でいるの？」

「とうぜん！あなたをあしがこおってうごけないんだから、あたいのさいこのこうげきでとどめなのよ！」

あたいサイキョーと言わんばかりに言い放っている・・・

「だったら・・・超特大の氷柱でも出して見る！！」

「ふうん！のぞむところ！！」

そう言つて彼女は氷柱を出現させていた・・・やはり、挑発に乗りやすい奴だった！！

「くらええええ！！！」

そしてその氷柱を俺に向かって投げて来た！！！！

【人里】

霊夢Side

「ええっ！？一人で神社に向かった！？」

「ああ、どつちやらそつばしい・・・」



私が決心をつけて人里に外来人である信太を迎えに来たのだが、彼は一人で私の神社に行くべく里を出たらしい。変ね・・・見なかったわよ・・・

「すまないこちらの失態だ。今私も捜索に加わる」

慧音が一緒に探してくれろというが・・・

「貴方は里で任されてる仕事があるのだから、そっちをやっていて里の外は私がやるの」

慧音は寺小屋で教師をやっている。今此処を離れてしまえば今日の授業が無くなってしまふ。それでは里の子供達が可哀相だ。

「しかしな・・・」

でも慧音はこれくらいでは引き下がってはくれない。なら・・・

「それに彼はいくら子供とはいえ、勝手に一人で里を出た。これで襲われていたとしても、自業自得よ」

「・・・そうか」

慧音はそれ以上は言って来なくなった。どこか悲しそうに寺小屋に戻っていったが、これでいいんだ。

博麗の巫女は誰であっても平等に、繋がりを決して求めない。そういう代々言われている。私もそれを守っていかなくちゃ、だめなんだから・・・

「さて……」

道もはつきりとわからず、しかも徒歩で行っているのであれば、確実に道が逸れた可能性が高い。なら、道を広く見ていくしかないだろう。

「……」

本当に、本当に少ししか会話をしていないのに、私はただ冷たく接しただけなのに、私は、信太に死んで欲しく、なかった。

今までこんなことは無かったのに。巫女がこんな感情を持っているのか……恐らく駄目だろう。でも、でも！

「（生きてなさいよ！）」

でも彼は何処にいる？人里と神社のどの辺りにいるの？道が逸れたかもしれないっていうけど、どっちに？

混乱している頭は私の頭の回転を狂わせる。どうしたら、いったいどうしたら！！

「考える前に……動きなさい。博麗の巫女にはその行動力も必要よ」

サアアア……

風が鳴った気がした。振り返ってそこにいたのは、日傘をさした金髪の女性だった。

「貴女は博麗の巫女。けれど必ずとも今までの決まりごとを通さなくてもいいんじゃないか？」

何を言っているの？この人・・・でも、この人に言われた通り確かに、考える前に行動！！

私は勢いよく空を飛び信太を探し始めた。

【少女移動中・・・】

「もし信太が道なりに（道なりというのも微妙だけど）歩いて行っただとしたら・・・！」

信太を見つけた私は飛んでいたスピードを極限まで上げて信太の所へ向かおうとした。

氷精の投げた氷柱が両足を凍らされて動けない信太に投げられたからだ。あれじゃあ、五歳の子供には致命傷になってしまう！

でも、間に合わない！！

「信太ああああ！！」

私は無我夢中で叫んでいた。

信太Side

「信太ああああ!!」

! 霊夢の・・・声。そうだよ。俺は、霊夢を守る為に、【ここ】で生きる事をしたんだ。【外】で失った記憶は取り戻せてないけど・・・仲良かった人達がいた気がするけど・・・俺は!

【博麗の巫女を・・・守る!】

そう心に決意した瞬間、俺は知らずの内に氷の精の後ろに行っていた。右手には何か不安定な、そして形もはっきりしない刃を持っていた。

ガシャン!!!

氷柱は真つ二つに斬っていた。そしてそれを投げた氷の精も、

「によえー!？」

ピチューン

妖精特例の一回休みになった。

「ぜえっ、ぜえっ・・・」

その場に膝を着いた俺は息を荒くして座った。不安定な刃は消えていたのを見ると、どうやら俺が生み出した物のようだった。能力開花したようだ。

「……で、あんたは何処に行こうとしてたの？こっちは神社から外れてるけど」

「あれ……そうなの？」

素で間違えたようだ……おかしいな……道なりが間違いだったのか……  
それでも調度いい、霊夢に言う事が……

「……それで巫女である私を守るって、どういふこと？」

あ……れ……？

「俺、口に出してた？」

俺の言葉に霊夢は頷く。一歩間違えれば告白だ。

注)二人共五歳です。

どうやって説明しようか迷っていると……

「……後悔しないのね」

「え？」

言葉を悩んでいたら霊夢が真剣な表情で言ってきた。

「幻想に生きるということは、現実には戻れない。外ではもう生活は出来ないの」

現実と幻想の選択・・・その選択をしなければ、ここで暮らして行く事は出来ない・・・

「貴方は・・・信太は、後悔しないの？」

「・・・そんなの。」

「しないさ」

俺は真っ直ぐに霊夢を見て言った。

「俺は霊夢を助けて行く為に・・・博麗の巫女を助ける。それが俺が選んだ道だ」

「・・・」

言い終わった俺は一息ついた。そして、霊夢は微笑んでいた。

「ありがとう・・・そしてようこそ幻想郷へ・・・  
よろしくお願いね、信太」

「・・・うん!」

これが俺の幻想郷での、最初のページ。これからどうなっていくかわからないけど、俺は博麗の巫女の守護者として、霊夢を守っていく。

【相澤信太（五歳Version）編終了】

【とある森のとある道具屋】

ガチャ

「こーりん！あいつは起きたー？」

「いや、まだだよ。どうやら外でよほどの事があつたんだろう。小さな子供なのに寝込んだように起きようとしなない」

「そうか・・・外の人間は珍しいから話を聞きたかつたんだがな」

「その外での事を喋りたく無いようだよ」

「むむむ・・・えーと確か名前は・・・」

「桜井俊一君だよ」  
さくらいしゅんいち

「そうそう俊一だ！」

「君が連れて来たんだから覚えておきなさい・・・それよりも・・・」

「?どしたーりん?」

「魔理沙・・・君は一体何をしにきたんだ。そんな引越りするような荷物で」

「うん!此処に住ませてくれ!」



博麗の守護者（後書き）

マッサー

「信太の紹介はもう少し後でします」

通りすがりの幻想郷の賢者さん

「まだまだ先は長そうねえ・・・」

マッサー

「次回は信太よりほぼ同じくらいに幻想入りした桜井俊一（五歳）  
編だ！」

幻想郷の賢者さん

「また五歳なのね・・・」

## 現実の着々の変化

【信太が幻想入りした同時刻・・・現実では彼の方が早かったが、実はそれよりもほんのちよつと後に、幻想入りを果たした少年がいた・・・】

### 【病院屋上】

薄い灰色の瞳をした短めの整った赤い髪の少年Side

「・・・・・・・・」

僕はただ何も考えず夜の病院の屋上で立っていた。

外の空気を吸いたかったとか、星を眺めたかったとか、そんなことじゃない。

もう僕は生きたくなかった。

僕のせいで信太君は死んじゃったんだ。皆は僕のせいじゃないって言ってくれるけど、僕がああ建物で探検ごっこをしようって言わなければ、信太君は、僕達の前から消える事は無かったのに・・・

難しい事はわからないけど、死体は発見されなかったらしい。それでも信太君にはもう会えないってことには変わらない。

「よいつ・・・しょ、よつと・・・」

フェンスを登っててっぺんまで来る。この病院の上から、頭から落ちれば子供の僕なら、すぐに死ぬと思う。

「・・・・・・・・」

地面がかなり下にあるのを見る。不思議と恐怖が無い。どうやら心の奥から死にたい自分のようだ。

バンツ！！

扉の音がした。振り返って見てみると、やっぱり、来ちゃったか・

「俊一！！！！」

「俊一君！！！！」

六人・・・皆がやって来ていた。出来れば来て欲しく無かったな・・・

「俊一・・・お前、何を・・・」

「・・・・・・・・ここから飛び降りようと・・・したんだ」

「っ！お前・・・！」

賢太君が僕が立ち上がったのを見て驚く。立ち上がって風に揺られる。何時でも倒れてもおかしくない。

「あぶつ、あぶないよお・・・俊一君！こっちに、こっちに戻って

きて！」

既に泣いている人達がいる。風間君は結局泣いてばかりだったな。  
・  
・

「俊一君……」

賢太君の前に二人、前に出てきた。僕達より三歳年上で……八歳かな？正由さんと渚さんだ。

「死ぬつもりなのかい？」

正由さんは黙ったままこちらを向いており、渚さんが僕に聞いてくる。僕は黙って頷く。

「……君が死んだら、この子達はさらに深い悲しみが出来てしまう……君は……そんな悲しみを背負わせるのかい？」

確かに僕は今死のうとしている。でも、皆を悲しませる……

「……」

僕は皆を見る。そんなこと……そんなこと……

「僕はもう……生きる事が嫌なんです……信太が僕のせいで「あれは君のせいでは」それでもです!!」

大声を上げて渚さんの声を黙らせる。

「もう、嫌なんです。本当に……生きる事に希望がわかないんで

す・・・」

「・・・っ・・・」

渚さんが顔を一度伏せる。すると今度は他の皆からも声を出された。でも・・・聞きたくない。

「もう・・・僕の事は、ほっといて・・・」

僕が静かにそう言つと皆黙っていった。そして体勢を後ろに傾けようとしたら・・・

「待つてよ・・・」

！これまで何も喋らなかつた・・・いや、ショックで放心してた、早苗ちゃんが涙を流しながら近づいてくる。

「何処行つちやうの・・・信太君に続いて・・・俊一君まで・・・何処行つちやうの・・・」

その涙を見ていると、とても悲しくなってくる。

本能的に、逝くなら早く逝けと告げている。

僕は足を滑らすように傾けていった。

バツ！バツ！

・・・やっぱり・・・来た。

傾けた瞬間、正由さんと咲夜さんが飛び乗って手を掴もうとしている。このままいけば僕の手を掴んで助けられるだろう。

ピカアツ!!

「うあっ!!」

「あっ!!」

このままいけばっ、だっただけだね。僕は予め造っておいた閃光玉を  
発動させて二人を止まらせる。

これでいい・・・これで・・・

「俊一いいいい!!!!!!!!!!」

「俊一君!!!!!!!!!!」

ああ・・・皆・・・ごめんね・・・さよなら・・・

【??.?.?Slide】

早苗の叫び声に近い声が入ってくる。止められなかったよ  
うだな・・・

「・・・落ちてこないね」

「ああ・・・そうだな」

恐らく俊一君はここに落ちて来ると思ったが・・・いっこうにそんな気配は無い。

「確かに貴様の言う通りになったな」

そう言っつて私達の後ろにいる男に振り返る。

「だろ？だから多分大丈夫だつて言っただんだ」

水色の瞳をした、水色と黒を混ぜた髪をした男は言った。

歳は恐らく見た目からいって18程度かもしれないが、こいつはそんな程度じゃない。隠しているのかわからないが、こいつは力が強大だ。それも私達神に近い程の大きい力を持っている。

「まあでも、相澤信太も桜井俊一もここからは消えたってことだから、死んだというのも間違っつてはいないぜ」

ここから・・・か。別世界にでも飛んだとでも言っつのか。

「・・・お前に聞いておきたいけど」

「なんだ」

目が生えている防止を被つた神が男に聞く。

「これから先、早苗の友達は・・・あの子達がどうなるか知っつているのか？」

「……いや俺が知っているのは一つだけ……。何年後かに、みやふじ宮藤  
正由と遠山渚とよまなづみには何かしら変化が起きる……。筈だ」

あの二人の少年か……。ム!!

「……まずいよ！早苗が力を暴走させてる！」

やはり早苗には耐えられなかったか！！早く止めに行かなければ・

「……貴様に一応忠告をしておこう……」

私は一度目をつぶり、そして殺気を目を開けた同時に放った。

「もし貴様がこの事に関連して加担している者だった時は……。殺す」

私はそう言ってもう一人の神と屋上に向かった。

### 【謎の男Side】

「加担してるわけじゃねえけど……。関連は……。してるのか？」

これがあのスキマB……。ゲフンゲフン、だったら関連はしてるだろうが……。だったら俺や、幼い頃の正由と渚にも気付く筈……。さてよ？



「・・・スキマババーン!!!!!!!!!!」

・・・

何も来ない・・・だと!?

あいつは外まで見てるわけじゃないのか・・・寝てるだけだったりしてな。

「はあく・・・しかしなあ・・・時間軸突き破ってこんな所に出るなんてなあ・・・」

しかも中途半端に、正由と渚が幻想郷に行く前の外だしなあ。くそっ!これも二回に渡ってあのアホカズメの・・・やめところ。故郷から突っ込みがきそつだ。

「家・・・どうしよう」

二人がまだ俺の事を知らない以上、二人の家は泊まれない。かといつてここのお金はもう無い。

「バイトのお金はすぐ尽きるぜえー」

今日も公園のベンチで寝るのか・・・布団で眠りたい。暖かいご飯が欲しい!!

「あゝ」

「んー?」

後ろから声を掛けられた。どうやら絶望しすぎたらしい。誰だ？

「何をなさってるんですかー？」

ようじよ・ゴホン！

女の子だった。緑色を連想したけど・・・あれ？

「あれ、もしかして私が見えるんですか!？」

「あ、ああ・・・」

足が無い・・・しかもこの言い方は・・・霊か。

「ふえ・・・ふえーん!！」

「えー!?!なんで急に泣くのー!?!」

慌てて彼女を泣きやまそうと声を掛ける。

「えぐっ、いえ、ようやく話相手が見つかって、嬉しくって・・・」

「そうかそうか・・・」

頭を撫でて落ち着かせて話を聞いた。どうやら彼女はもうどれくらい霊をしているかわからない、しかも自分の事もよくわかっていないらしい。

「(長い間霊のまんまだからかもしれないな・・・)」

前に渚がそんな事言ってたような・・・まあ、いいや。

「・・・・・・・・」

ん？彼女が何か言いたそうな顔をしてるな・

「どうかしたか？」

「あの！私がいる家に来て貰えませんか！！！」

・・・・・・・・え？

「お願いします！一緒に住んでくれませか！」

エ？コクハクデスカ？

しかしこれは・

「なあ、それって愛の告白のつもり・・じゃないよな？」

「え？・・・！」

うおっ。顔が真っ赤になった。どうやらそついう意味じゃないようだ。

「まあ・・だが、家には住んでいいのかな？寝床探してたから・君がよければしばらくお邪魔するぜ？」

「ふえ！は、はい！！！」

顔を真っ赤にしながら返事をする。・・・やべえ、カワイイ・・・口リコンじゃねえぞ！

「あ、私はレイラっていいいます。貴方のお名前はなんですか？」

「俺は……」

本名でもいいんだが・・うーん、万が一の為に偽名考えとくかな・  
・ま、今はとりあえず名乗っておくか！

「アラス。アラス・クロフィードだ。よろしく頼む、レイラ」

「は、はい……」

さて家は確保した・・

でもこれから先・・正由達を含むあの子供達・・そしてあの神様二人も、幻想に巻き込まれるだろうぜ・・さて、これからどうなるか。ゆっくりしていくとしよう・・



## 孤独の二人（前書き）

アラス

「言い忘れてたが・・・俺というキャラのことだ」

レイラ

「えっと・・・」

【アラス・クロフィード】元々はあるユーザーの小説のキャラで、マッサーは前の（黒歴史）小説にてお借りしていたオリキャラ。

今回も続けてお借り中。

あるユーザーはユーザー事新しくしてしまったために、元の小説は今の所存在しません（2011年6月28日現在）」

アラス

「そんなわけだ。よろしくな！」

## 孤独の二人

桜井俊一 Side

「う……ここは？」

僕は寝ていた身体を起こして辺りを見回す。  
……身体を起こす？

「あ・れ？どうして……」

僕は病院から落ちて死ぬ筈だった。なのに傷一つなく生きてここにいる……。

「（なんで……僕はもう生きたくもないのに……なんで……死なせてくれないの……!）」

そんな事を考えていたからだろうか、僕はこここの家の人だろうと思われる人物に気がつかなかった。

「君……大丈夫かい？」

声のした方を見ると、眼鏡をかけた男の人がいた。  
まさかこの人が僕を助けたの……？

「外傷は無かったようだが……大丈夫かい？」

再度状態を聞いてくるといふことは、間違いなくこの人が僕を助けたらしい……。

「なんで……」

「？」

僕は……僕は……！

「……なんで僕を助けたんですか？」

気付けば僕は本能の赴くまま目の前の人にぶつけていた。

「なんで……ね。逆に聞くが何故助けて欲しくなかったんだい？」

前にいる人は僕に疑問をぶつけてくる。この疑問はもつともだと思  
うが今はそんなことを聞いてくるこの人に腹がたった。

「……僕は死のうと思っていました。なのに貴方は僕を助けた」

僕が、死のうという言葉を使った瞬間一瞬表情が変わったが、すぐ  
に戻った。

「……何故そんなに死にたいと思っているんだ？よければ話をして  
みてくれ。少し楽になるかもしれないよ」

少し人の良い所もあるのかもしれない。しかし、今の僕にはそんな  
こと聞かれたくも無い言葉だ。

「そんなことを聞いて僕を止めようとしても、無駄ですよ。僕はも  
う、決めたんですから……」



もう僕は現実に生きていたくない。皆が許しても僕自身が許せないんだ……

「……そうか。それじゃどうするんだい？また死に行くのかい？」

「……必要以上にもっと言ってくるかと思ったけど、どうやら諦めたようだ。ならこんな所には長居無用。死ぬ場所を……」

ゾクッ！！

「っ！？」

死ぬ事を考えようとしたら、全身に寒気が起きた。え……どうして

「……泊まっていくのは別に構わないから……それとまだ寝ていた方がいい……それじゃ、僕は失礼させてもらうよ」

そう言っつて襖の向こうに行ってしまった……

僕は疲れているのかもしれない。言葉に従うのは嫌だが、甘えよう。

「そう言えば聞き忘れてたが……君の名前は？僕は森近霖之助」

いきなり戻って来て名を名乗ってきた。確かに失礼にあたってしまっつかもしれないから、名を名乗ろう。

「桜井俊一……」

「俊一君ね……それじゃ、ゆっくりしていくといい」

今度こそ襖の先の奥の方へ行く足跡が聞こえていった。

「……寝よう」

さっきの寒気はきつと疲れが溜まっていたから、なつたに違いない。そうだ、きつとそうに違いない。

僕は心の奥底で否定しながら目を閉じて意識を手放した。

霖之助 Side

「はあ……」

やれやれ・・・今日は厄日かなんかだったかな？店の近くに倒れていた少年を助けたはいいが、どうやら外来人だったらしい。しかし死のうとした所を神隠しにでもあったのだらう。そうしてここにきた。

「（そして次に面倒なのは……）」

僕は次に面倒な人物を見た。

「こーりん、空いてる部屋はどこかあるかー？」

この少女だ。名前を霧雨魔理沙という。人里の道具屋の娘さんだ。

彼女が荷造りをしてここに来た理由は、魔理沙が魔法使いになりた  
いからだ。それも妖怪ではなく、人間の魔法使いになるために。

「魔理沙。言っておくが空いている部屋などないぞ。俊一君を寝か  
せている部屋だって僕の部屋なんだからな」

と言っても聞かずに店の中を物色してっっている。

ああ、そうそうこの事を説明していなかったね。

ここは【香霖堂】。妖怪の道具や魔法の道具もそして外の世界の道  
具もある店。そして僕はその店の店主ということだ。まあもつとも、  
僕だけで店をやっているんだけどね。

魔理沙はただの品物を漁りに来ているだけだ。客でもなんでもない。  
そういえば・・・一つ気になった事がある。

「魔理沙、君は茸の孢子等は大丈夫だったのか？」

ここは里ではなく、【魔法の森】と言われている森だ。  
暗くじめじめしている、そして化け物茸の孢子が宙を舞っており、  
その孢子がさらに幻覚を見せてくるのだ。普通の人間は絶対に近寄  
ろうとはしないからだ。

「ん？別になんともないぞ？」

・・・まさか魔理沙は将来茸妖怪にでもなるんだろうか・・・そんな  
ことはどうでもいいな。

「それより魔理沙。君はあの俊一君をどうにかしてくれ。君が拾っ  
たんだろっ？」

僕は滅多な事が無い限り家を出ない。俊一君を、偶然遊びに来た魔理沙が助けて僕の店に運んで来たのだ。迷惑以外の何物でもない。

「んー・・・そうだなあ・・・なんかピーンてきたんだよ」

は？ピーンと来てた？訳がわからないよ。

「とにかく、彼は君がどうにかしてくれ。わかったかい？」

「ぶー。わかったよ」

そう言つて魔理沙は俊一君がいる部屋へと向かう。やれやれ、上手く事がいつてくれればいいんだが。

魔理沙 Side

やれやれ、こーりんにも困つたものだけ。

・・・お、なんかやつぱりこの、くだぜつという言葉、なんかいいな！これからそう喋っていくか！

「とか何とか言ってる内に・・・」

私が助けた男の・・・俊一だったな。寝ている部屋に来た。まあ元々この店は広くないからすぐにたどり着くと思つたけど・・・

サー・・

静かに襖を開けて中の部屋に入る。

「・・・・・・・・スウ・・」

本当に静かな寝息を起てながら寝ているぜ・・  
やばい、寝顔がかわいい・・

「（今寝てるんだったら何もできないな・・）」

私は俊一の近くに座って考え事をし始めた。

私は魔法使いになりたい。それも妖怪では無く人間の魔法使いを目指す。なんで人間のかというと、私が人間でどれまで出来るかを試していきたいのだ。

本で読んだりもして、私は里の道具屋の娘、で終わるのは嫌だった。そりゃあ確かにお父さんとお母さんから別れるのは辛かった。でももう、縁を切つてまでして家を出たんだ。もう後戻りなんて出来はしない。

これからは一人で何でもこなさなくてはならない。こーりに頼る事もあるかもしれないが、それは最低限にしていく。そうしなければ魔法使いになんてなれない。

私はこれから一人で・・

「（・・だから・・なのか？）」

最初は何故正体もわからない人を助けたかはわからなかった。でももしかしたら、一人な俊一を助けたかったのかもしれない。こーりんから聞いたけど、俊一は外来人。つまり外から来たということ。外の知り合いはここにはいないから、俊一は孤独に生きていかなければならない。

私は同じ孤独になった人を助けたんだな・・・

「・・・ん・・・」

お、目が覚めたかな。俊一は目を開けて私に気が付いたのかこっちを見ている。

「・・・誰？」

起き上がって私の方を見る。ここは名乗っておかなくちゃな！

「私は霧雨魔理沙！魔法使いになる予定の人だぜ！」

親指をぐっと立てて言う私。俊一は何か言おうとしている目だった。しかしその前に変化が起こった。

ドクンッ！！

急に心臓音が聞こえた。私じゃない、それじゃあ誰が？

「ゴホッ！ゴホッ！ゴホッ！」

急に俊一は咳を連発した。背中を曲げて何度も連発している。

「お、おい、大丈夫・・・!?」

咳から血を吐いていた。

「ゴハアツ・・・」

俊一がまるで力尽きるように倒れ込んでしまった。

「こ、こーりん!こーりん!!早く来てくれ!!--!!」

私は半ば叫び声でこーりんを呼んでいた。

孤独の二人（後書き）

アラス

「なんかシリアルが続きすぎじゃね？」

レイラ

「ち、朝食か!!」

マッサー

「夫婦漫才・・・？」

ゾクゾク！

アラス

「はっ！寒気が・・・」

マッサー

「アラスにフルボッコフラグが・・・」

レイラ

「？」



## 生きること（前書き）

魔理沙（五歳）

「この小説のこーりんは凄く何か秘密がある・・・かもしれないだけ」

俊一（五歳）

「後、魔理沙が香霖ではなくこーりんとしているのは、まだ幼女だから、だそうです・・・というか、まだ人間のキャラはまだ幼年時代だよね」

マッサー

「うす、もっとがんばります」

## 生きること

魔理沙 Side

急に血を吐いて苦しそうになった俊一をこーりんは様子を見て診断している。こーりんはこう見えて少なくとも百年を生きている妖怪だ。私よりは断然物知りで、俊一が苦しそうな理由もわかるかもしれない。

「これは恐らく・・・茸の毒にやられたんだろう」

「茸の毒？」

それだけでは説明不足だと感じたこーりんはさらに私に説明してくれた。

「ああ。恐らく俊一君は魔法の森の茸の胞子の毒にやられたらしい。  
・・・人間には当然だと思うが」

確かに魔法の森は人間が近づいてはならない場所の上位にあたっている。でもそうだとするなら、

「先に言っておくが、君は知らないぞ？胞子の毒にやられない人間なんて聞いた事ないからな」

・・・心読むんじゃないぜ。

「どうやったら治るんだ？原因がわかったんなら、治し方もわかるんだろ？」

こーりんは少し渋った顔になったが、すぐに口を開いた。

「確かに方法はある・・・が、正直助からない可能性が高い」

「・・・どうしてだよ」

こーりんはこうやって長く本質を言おうとしない事が多い。もっとはっきりと言って欲しい。

「・・・倒れた原因の胞子を持っている茸を俊一君に食べさせる・・・それが一番の治し方だ」

驚く私を無視するかのように、こーりんは言葉を続けて言った。

「第一にまずは茸を間違えて食べさせてはならないということだ。一度でも間違えば助からない。仮にあっていたとしても、彼の身体が毒を治すのもってくれるかどうかだ」

毒を盛って毒を制するというが、まさにその言葉が似合うように感じた。

「僕には彼が何の茸の胞子にやられたかわからない。魔法の森には沢山の茸があるんだ。いくら僕でも判別がつかない」

的確にズバズバと意見を出していくこーりん。私はもう聞きたくなくなった。

「いつそのまま何もしていない方が俊一君にとっていいのかも【バンッ！】」

私はこーりんの言葉を最後まで聞かずに店を飛び出していた。

何処を探せばいいのかわからない。だけどこのまま何もしないのは私がい慢出来なかった。

「はあっ・・・はあっ・・・」

だいたい俊一が倒れていただろう場所へ行ってみる。もしかしたら僅かな可能性があるかもしれない。

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

全速力で走った為に私は荒く呼吸をする。たどり着いたはいいが、やはり茸は沢山あってどれが正しい茸なのか、もしくはこの中では無いのか。それすらもわからない。

「（一体・・・どうしたらいいんだ・・・）」

私はただ頭を抱えて何か考える事しか出来なかった。

俊一 Side

息が苦しい。いや、全部が苦しい。まるで何か生命力が削れていくような、そんな感じだ。

「（このまま・・・死ぬるのか・・・）」

二人の会話はしつかりとは言えないが聞こえていたので、自分が相  
当危ないかはわかった。

「（ふふふ・・・やつとか・・・？）」

ようやく、ようやく僕は死ぬる事に心で少し笑っていた。でも、本  
当に心の奥でわらっていなかった。

「（なんで・・・？）」

僕は生きる事をしたくなかった筈だ。だからこのまま死ぬるんだっ  
たら後悔も何も無い筈なのに。

僕は死にたくないでも思ってしまったのだろうか？でも何で？現  
実で生きたく無い筈なのに・・・

「（そうだ・・・何か変だったんだ・・・）」

思えばここで目覚めてから、自分が感じていた自殺という感情が薄  
れていったのだ。代わりに逆に死にたくない、生きていきたい、そ  
う思っていたのだ。

最初はそのことを否定して考えないようにしていたけど、でも今は、  
死に近づいていることで死にたく無いという感情が強くなった。

「ぐっ・・・うっ・・・」

苦しい身体を我慢しながら僕は布団から起き上がって立ち上がる。

そして窓から外へ向かおうとした。  
今ここにいた霖之助さんは魔理沙が飛び出していつてからこの部屋からはいなくなったが、魔理沙を追い掛けて行った訳では無いだろうと思っただからだ。

「ぐ・ごほっ！！ごほっ！！」

もし起き上がっている所を見られればまた寝させられるにちがいない。

「（それに・・それに！！）」

飛び出して行った魔理沙が安心とは言えないからだ。このまま助かるかもわからない自分の為に頑張ってくれているのは心が痛む。

【ドサッ】

「ぬ・・・ぐう・・・」

上手く着地は出来ずに倒れ込むように脱出をする。

「はあっ・・・はあっ・・・」

確か自分が倒れていたのは・・・こっちだっかな・・

フラフラする身体を何とかバランスをとりながらゆっくりと歩いていく。

正直に言えば倒れて楽になりたいとは思っ。でもそれだけはしたくない。

「無事で・・・いて、くれよ・・・」

こんな自分の為に救う手を差し延べようとしてくれている魔理沙に、  
どうしても会いたかった。会ってお礼が言いたかった。

「ま・・り・さ・・」

僕の中の死にたいという気持ちは、とっくに消えていた。

霖之助 Side

「・・・やれやれ」

急いで店から飛び出して言った魔理沙。そしてフラフラながらも窓  
から飛び出して行った俊一君。そして・・・

「ふむ・・・悪霊魔女も現れ【ドゴォン!】・・・危ないな」

急に屋根を突き破って魔力弾が迫っていたので何とか避ける。きつ  
と『悪霊言つな!!』的な意味を込めての事だろう。

「（しかし彼女がここらにいるとは珍しいな・・・）」

確か神社の周辺にいるという（最近はずっと全く聞く事がないが）事を言  
っていたんだが・・・偶然ここらにきていたのだろうか。

だとすれば凄い偶然だ。魔理沙と俊一君は魔力は少なからずある。育て方によれば化ける事も可能だ。しかもちよつどよく魔女と来たもんだ。

「（森も騒がしくなつてきそうだ・・・）」

恐らく二人はこの森のどこかに住家を作つて魔法の研究を行うだろう。なら、二人にマジックアイテムでも造ることはしよう。

「あのー霖之助さん、人形の方はどうなりました？」

おつと今はお客がいたんだつたね。見た目は小さい少女にしか見えないが彼女は妖怪の魔法使い。僕と同じ森に住んでいる。

「（二人はどちらの魔法使いを選ぶのか・・・まあ、僕はどちらでもいいが）」

そう思いながら僕は前にいる客に対応することにした。

??? Side

「あの店主・・・後でシメテやる」



まあ今はそんなことよりあの二人が先か。  
あの二人をこのまま死なせるのは惜しいんだよねえ……。しかしあの少年の治すのが二人にわかるかどうか……

かといって簡単に助ける訳にもいかない。こんな程度の事を乗り越えられないなら、二人は魔法使いになんてなれない。

「お手並み拝見といこうかい」

これはある意味魔法使いになるための入門テストみたいなものだ。

「あんた達を私の弟子にするかどうか……。見定めさせてもらうよ」

この私……。【魅魔】様がね！

生きること（後書き）

魅魔

「決まった・・・（キリッ）」

マッサー

「（キリッ、だってお・・・ウボアア）」

霖之助

「無茶をしたね・・・」

目指す魔法使い（前書き）

マッサー

「俊一（五歳）編も今回で終わりです」

魅魔

「早く原作に進んで欲しいね。私も介入出来るんだよねえ？」

マッサー

「それはどうか・・・アッー！」

## 目指す魔法使い

魔理沙 Side

「くそっ！一体どれなんだ！」

私は考える事をやめてそこら中に生えている茸を片っ端から採って並べていた。考えることよりも行動を先にしたからだ。

「こんな沢山あるんじゃ・・・どれが正解かわかんねえよ！！」

そして今採り終わっていたのだが、十種類以上あったのだ。これでは結局振り出しに戻っただけだった。

「（このままじゃ・・・本当に俊一が死んじゃう・・・）」

時間が無いという事が私を焦らせて頭は良い案を出さない。このままではかなりマズイ！

ガサガサ・・・

「!？」

こ、こんな時に妖怪か！？妖怪もこの森の胞子を警戒していることは少ないが、出没する事だつてある。

「（茸だけでも持って逃げなげや・・・）」

私は両手を使って茸を落とさないように持って離れようとした。

「ま・・・り・・・さ?」

私の名前を呼ぶ声で私は離れるのを止め、後ろに振り返った。

「俊一!?なんでこんな所に!?!」

こーりんの店で寝ている筈の俊一がいたのだ。私は驚いて俊一に近づいていく。

「はは・・・僕も、現地に、来た方が、いいと、おもって、ね・・・ごほっ!」

そう言いながらも血を吐く俊一。そのまま膝を曲げて倒れ込んでしまっ。

「お、おい!俊一しっかりしろ!」

「ぜえっ・・・はあっ、やっぱり、無理がたたったかな・・・ごはあっ!」

凄まじい程の血を吐き出す。それを見て俊一はもう死に近づいているのがわかってしまっ。

「(どうする!?どうする!?このまま何もしないで俊一を死なせたくない!でも茸はどれだかわからない・・・)」

さらに頭が混乱した私はもうどうしたらいいか、そんな事もわからなくなっってしまった。

「ねえ・・・まり、さ・・・」

そんな事を思っていると苦しそうな表情で私に話し掛けていた。

「な、なんだぜ？」

私はそれに多少驚きつつも聞き返した。この状況で一体何を聞こうというのか。

「まりさは、どう、して・・・ぼくを、助けようと、してくれて、るの？」

それは純粹な疑問の眼差しというやつなのかもしれない。私は俊一の目を見て思っていた。

「どうして・・・かな？」

私はその問いに時間はいらなかった。理由はたいした理由じゃないけどな。

「・・・俊一、お前を救う為だ。身体も心も」

俊一は不思議そうな顔をしてこちらを見ている。まあ、それもそうか。

「こまかく言うなら、お前の生きる道を一緒に見つけようって事なんだぜ」

私は俊一を助けたのだ。どういった理由かは知らないが俊一は死にたがっていた。

私はそれが許せなかった。死んでしまえば俊一にも悲しんでしまう

人もいるのかもしれないのに。

だから私は俊一を助けて、一緒に何かを目指す為に私は俊一を助けたようにしているのだ。たった、それだけの事だった。

「……………」

俊一は最初は驚いた表情をしていたが、だんだんとこちらを見る目が笑っているように感じた。

「そ、つか・嬉しいよ。ありがとう……でも……ゴハアツ！！」

「……………!?俊一!!!」

血を再び吐き出す俊一。しかも連続で吐いている。吐き出した血が私の手などに着いたがそんな事を気にしている場合じゃない。

「……もう、限界、みたい、だ……」

息が虫の息になっている！本当に時間が無い！！

「短い、間、過ぎた……けど、まりさ、に会えて、よかった、よ……」

私の手を握っていた俊一の手が徐々に力が抜けていっているのがわかった。

「（こんな形で俊一と別れるなんて……ふざけるな!!!考える霧雨魔理沙！なにかある筈だろう!!!いずれ大魔法使いになる私なんだから、こんな危機ぐらい、クリアしてみるよお!!!……!）」

私は魔法使いという言葉に疑問を持った。正確に言うなら、ひらめきというのだろうか、それが浮かび上がった。

「（俊一の吐き出した血・・・）」

私は自分の手を見てそして考える。私はまだ完璧に操れるわけじゃないけど、魔力を持っている事は自覚している。だったら、できるかもしれない・・・

「（俊一の血から茸を割り出せるかもしれない!!!）」

そう思った直ぐに私は意識を集中させて血を解析し始めた。

「（落ち着け・・・落ち着け・・・私に出来る筈だ・・・）」

精神を集中させて魔力を込める。焦ったら負けだと、自分に言い聞かせながら・・・

ポワツ・・・

魔力が上手くいき、魔法を発動させた。こーりんの店で少し魔導書を読んでいてよかったぜ！

「・・・!!」

そして一つの茸が浮かび上がった！これはさっきの数十種類の中にあつたやつだ！

「よし・・・あとはこれを・・・!?!?」



俊一に食べさせようとした私だったが、出来なかった。

「嘘だろ・・・？」

既に息をしていなかったのだ。頭が真っ白になって私は茸をちょうどいい大きさに切って俊一の口の中に入れた・・・飲み込まない。

「・・・・・・・・」

次々と茸を入れていく私。頭では何も考えておらず、身体だけ動いているだけのようだ。

「・・・・・・・・」

茸をがぼがぼ口の中に入れて私は何を思ったのか、いや、何も考えずに俊一の背中をバシバシ叩き始めた。

「うつ・・・うつ・・・」

バシバシッ

私は目から涙が流れていくのがわかった。結局私は助ける事が出来なかった。

バシッバシッ

「モガッモガッ！！」

私がもつと早くこなししていれば俊一を助けられたかもしれないのに・

バンツ！バンツ！

「————！！！」

私も忘れないぜ、俊一。安心して、眠ってくれ。

バンツ！バンツ！

パシッ！

「！？」

不意に腕を掴まれた。今ここにはもう私しかいないはずなのに……誰が？

「……え？」

しっかりと目の前にいる俊一を見る。さっきは息一つしていなかった筈なんだが……

「ごほっ、ごほっ、おえー！！！」

私が口に入れた茸を吐き出していた。……え、それじゃあ……

「俊一、無事だった「何さらするんじゃ魔理沙ー！！！」「ふぶお！？」

大声でどなられた……なんでだよ！

「い、いきなり何大声で怒鳴るんだよ！」

「これが怒鳴らずにいられるかー!!今度はわいを窒息死させる気  
かいな!というか口調がおかしいのはなんでなんやー!!!」

大声で叫び続ける俊一を見て私は腹がたつてきたのか、怒りを爆発  
し始めた。

「おい!せっかく助けたのに文句ばかりか!お礼の一つぐらい言  
つたらどうなんだ!!」

別にお礼を言われたい訳じゃないが、文句ばかり言われて少し反  
論したかっただけなのだが。

「あー・・うん。それに関しちゃ感謝しとる。助けてくれてありが  
とな魔理沙」

「あ、ああ、気にしないでいいぜ・・」

そう笑顔で言われては私は黙らずを得なかった。少し顔が赤いのは  
気のせいさ、きっと。

「んー・・少し頭冷えたな。結局俺の口調が勝手に変わってるのは  
なんでなんや?」

「・・・うーん・・そうだなあ・・」それは恐らく食べた茸の症状  
だね「!?!」

私達の声じゃない、ということとは・・・

「ふふん・・・魅魔様華麗に参上・・・てね」

足が無くて、さらにまるで魔女のような姿をした人が私達の前に現れた。

### 魅魔Side

「そう警戒しなくていいよ。別にとって食うわけじゃないから」

中々にこの二人は逸材かな？

女の子の方はさっきの魔法を使った所を見てわかったし、男の子のほうも茸を食べた事で【幻想】に馴染んだ。おかげで魔力をもっている。

育てがいがありそうだ。

「・・・一体何の様なんや」

見事に警戒されてるねー。まあさっさと本題に入るか。

「君達二人・・・私に弟子入りして魔法使いになっみる気はないかい？」

「「!？」」

二人共驚愕の表情になる。押すならもうひと押しだね

「君達は魔力を持っていて魔法使いの才能はあるよ。言っとくけど、別に裏があるわけじゃない。ただ、長らく生きてると、こづいづこづいともしたくなるのさ」

二人を見てみると、なんとも疑わしい顔だ。まあ、当然と言えば当然かな。

「因みに私の魔法使いとしての実力は・・・【ギシャアア！】！  
ちようどよく雑魚妖怪が出てくれたね。

「これくらいさー！..」

ゴオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

七色の光線を生み出しやってきていた妖怪を消滅させる。

「魔法使いの可能性がわかったかい？さあ、どうする？」

二人の表情はさっきとはうって変わって何か決意したような目だった。

「弟子入りはします。でも一つだけ条件があります」

「なんだい、言ってみな」

二人は目を一回合わせて頷きあい、私を見てこう言ってきた。

「人間の魔法使いの戦い方を教えて下さい」「」

フ．．予想通りだね．．

「はっはっはっ！いいよ！きっちり詰め込んでやるから覚悟しなよ  
」！

さあって、これから面白くなってくるねえ！

目指す魔法使い（後書き）

魔理沙（五歳）

「次回で原作まで進むのか？」

俊一（五歳）

「あー・・確かに時が十年経って一番最初の異変に近くなるんやけど、まだ始まらへん」

紅い館の門番さん

「ええ、まだ異変は起きませんよ！ついでに私がヒロインのターンは終わっていないんです！ライバルも減りましたし！」

マッサー

「そうなんだけど・・正直に言うと・・」

門番さん

「？」

マッサー

「ヒロインじゃなくて・・友人感覚止まりになるかもあいつとは・・」

門番さん

「えええええー！？」

平和な現実・・・？（前書き）

マッサー

「今回フラグを多くばらまいた話になった」

アラス

「ギャアアアアアアッ！！！！！！」

マッサー

「おいおい！出番まだ早いです！姐さん落ち着いてー！？」



平和な現実・・・？

滝口風間Side

「こ、こんにちは？誰に話しているのかわかりませんが、ぼくは滝口たきく風間ちかざまです。ごくごく普通の中学校の三年生です。少し長めの黒い髪をしばっています。・・・応言いますけど男です。」

そんなことより今現在は授業中、しかも今日の最後の授業です。午後という事で眠たい人も沢山見えます。

「グゥ・・・zzz・・・」

唯一寝ている人がいます。ここからじゃ遠くて起こしてあげられませんが。

シュ！バシッ

「いたっ！」

案の定先生にチョークをぶつけられて起きました。

「いつつう・・・」

こういうところを見ると昔からあんまり変わって無いんだなあって思う。

彼は昔から、約十年前のあの時からあんな性格だったと思う。

彼の名は海崎賢太君うみざきけんた。喧嘩なら誰にも負けた事がない、凄い人です。

「クスクス・・・」

僕の隣の人も僕と同じ事を考えたのか、静かに笑っていた。彼女も昔からの仲良し組の一人、東風谷早苗さんだ。彼女は神社で巫女をやっているそうで、霊力という力を前に見せて貰った事がある。

二人共凄いなあ・・・

キーンコーンカーンコーン

あ、授業の終わりのチャイムが鳴りました。今日の授業は全部終わりです。今日も二人で一緒に帰るのかな？

【帰宅途中】

僕、賢太君、早苗さんは楽しく会話をしながら一緒に帰宅している。

「（でも皆・・・本当は悲しんでる）」

本当ならこの場所にあと二人はいる筈なんだ。

十年前、信太君は死んだ事になって、そして俊一君も病院から飛び降りて行方不明。警察はもう捜査はほとんどしていない、手掛かりが全くないから。

僕達ももう割り切るようにしてるけど、完全に吹っ切っていない。そんな日々が続いている・・・

「やっほー。元気してるか？」

そんな事を考えていたら、後ろから声を掛けられた。後ろを振り返って見ると、見知った二人がいた。

みやふじまさよし  
宮藤正由さんと、とみやまなぎみ  
遠山渚さんだ。僕らより2〜3歳年上です。二人も昔からの仲良し組の方達です。・・・本来なら、正由さん達の方にももう一人いなくちゃいけないんです。

「あの、正由さん、咲夜さんは・・・」

正由さんは首を横に振っている。やっぱり、行方知れずなんだ・・・

「信太君や俊一君、正由さんと渚さん、そして咲夜さんまで・・・」

早苗さんが悲しそうに呟く。実は正由さんと渚さんは約八年前ぐらいに、交通事故にあつて意識不明の重体で生死がわからなかったんだ。奇跡的に二人は助かったけど、それでも充分恐ろしい事だった。

そして最近起こった事は、十六夜咲夜さんが消えてしまったのだ。咲夜さんは正由さんと幼なじみのようなもので、同じ高校に通っていた。

咲夜さんが行方不明になったのはつい最近、しかも今回は目撃者も誰もいないのだ。

こつも僕達に不幸な事が起きるのはどうしてなんだろう。僕達が何かしたって言うのかな？

「・・・つと、暗い気分はここまで！きつと咲夜は見つかるから、心配するな」

正由さんが場の雰囲気を読み取ったのか、雰囲気を和ませる。

「じゃ、またな」

そう言って正由さんと渚さんは帰っていった。僕達も別れてそれぞれ家に帰っていった。

正由Side

「正由、一つ聞くが」

「なに？」

隣で歩いている渚が俺に聞いてくる。

「咲夜だが、もうこの現実にはいないな？」

・・・やっぱり渚は鋭いな。流星というべきか。

「ああ、恐らくな。ここまで手掛かりが無いんだ。多分そうだろうよ」

俺の言葉を聞いて解決したのか、渚はそれ以上聞いてこなかった。

「そつだ渚。これからあいつの住んでる場所にいくけど・・・大丈夫か？」

「・・・？何かあったのか？」

渚は疑問そうな顔だ。確かに意味も無く行く事は無いので疑問なのだろう。

「帰り道の途中で何かを感じたんだ。恐らくだが、あいつの所にだれか現代入りしたと思う」

僅かな気配であったが、現実と幻想の裂け目が出来た。

「へえ・・・なら先に聞いておくけど、次に現実から消えるのは、賢太か？」

勘が鋭いってレベルじゃねえぞ・・・

「恐らくな。賢太の所に咲夜が消えた日と同時に現代入りした人が幻想に戻る際、巻き込まれて・・・という形だろうな」

止めようとしても恐らく無理だ。それらは何度も起きてしまうだろうし、なにより今の俺らには力が無い。

「・・・これは結局誰の仕業なんだ？」

「わからない。俺達の知らない存在か・・・もしくは世界なのかもしれない・・・」

それ以降目的地にたどり着くまで互いに無言のまま歩いていった。

【古めの洋館】

目的地にたどり着いた。街より少し離れた外れにある洋館。バ〇オハ〇ードではないです。

トントン

ガチャ

「よー。レイラ、アラスはいるかー？」

「あー正由さん渚さん！ちょうどいい所に！アラスさんが大変なんですー！」

ノックして数秒でやってきた霊のレイラだ。涙目になっている。

ギヤアアアアアア！！

「・・・あいつの悲鳴だな」

「これぐらいの悲鳴だと来たのって・・・」

俺と渚は一緒になって考えて共に頷きあって、回れ右をした。

「帰るか」

「ああ」

そうして入口の扉に手をかけて出ようとする・・・

ガチャガチャ・・・

出られない・・・だと!?

「さあ・・・いきましよう?」

レイラが閉めてしまったようだ。腹くるか・・・

「ギヤアアアア!!!」

「男がギヤアギヤア騒いでるんじゃないよ!」

おーおーアラスがゴミのようだー・・・なんて言ってる場合じゃない。さてここから逃げる方法をだな・・・

「お・・・へえー、正由に渚もいたのかい・・・」

ギクツ!

気付かれた・・・だと。

「とりあえず・・・今は邪魔をしないでもらおうか？」

おおっ・・・さすが迫力が違う。というかそれだけ重要な事なのか？

「アワアワアワアワアワアワ・・・」

レイラは気迫で混乱状態である。仕方ないね。

「た、助け・・・」

アラス、わかってるよな？今の俺達には助けられる事なんて出来ない。だから

「頑張れ！」

「幸運を祈る」

「何をだあああああああ！！！！！！」

「うるさいよ！」

そう言っただけで彼女は再びアラスにプロレス技を仕掛けようとしていた。というか何処で知ったんだ？

「正由さん、あの人はいつたい・・・」

混乱から立ち直ったレイラが彼女の事を聞いてきた。レイラも気付いたのかもしれない、彼女の喜んでいる顔を見て、知り合いなのかと。

「彼女は鬼・・・星熊勇儀だよ」





動に巻き込まれる事になるなんて・・・思いもしなかった。

平和な現実・・・？（後書き）

アラス

「アッー！？！？」

勇儀

「今夜は寝かせないよ？（物理的な意味で）」

渚

「正由、俺達は大丈夫か？」

正由

「・・・問題だらけだ」

## 格闘技と狂った少女

賢太 Side

唐突だが、二つの事を話させて頂こう。

まず一つ目。美鈴が俺の家に住んでる理由・・・というより、出会いの時のことだ。

それは咲夜さんが行方不明になってほぼ同じ日、俺が家にたどり着いた日だった。

### 【回想】

『はあー・・・』

結局手掛かりがありそうな所を皆で全部探したけど、何処にも咲夜さんはいなかった。手掛かりもなにもなく。なんでこんなにも俺達はこんなことになっていくんだ？近頃はそんな事を考えてしまう。まるで神様が俺達を引きはがしているような・・・そんな途方の無い事を考えてしまうようになった。

『・・・はあ・・・』

ため息が止まらないままマンションの階段を上っていき、自分の番号の扉が見える通路に出る。

『・・・んっ？』

歩きながら目を凝らしてよく見ていく。近づいていっているのだから、いやでもわかってくるのだが。

『……………』

『……………ZZZ……………』

誰かが人の家で寝ている。赤い髪の長い髪でチャイナドレスに龍と書かれた帽子を被っている。中国人？しかも女性だ。胸が豊か。ごほんっ。

しかしなんで俺の家の前で寝てるんだ？

『……………ZZZ……………』

すごく気持ち良さそうに寝ている。起こすのを躊躇するくらいに。ただど何時までも扉の前に立っているのも邪魔なので起こして見る事にする。

『おーい……………起きろっ』

『……………ZZZ……………』

起きない。

『お・き・ろ！』

『……………ZZZ……………』

……………起きない。相当なお寝坊さんかこの人は！

『……………おきんかー！！！！！！！！』

『ひゃゃうん!?!』

周りの住んでいる人達の事等考えずに耳元で大きな声を出す。

『ななななんですか!?! 侵入者ですか!?!』

彼女は驚きすぎたのか、地面にへたりこんでこちらを見ている。

まずい、これを隣の人とかに見られたら、俺は女性を襲っている怪しい人にしか見えねえ!?!

『あ、あれ・・・?ここ、どこ・・・?』

などと俺が世間的にやばい事を考えていると彼女の様子がおかしい。キョロキョロと周りを見始めている。

『とりあえず話は俺の家に入ってから・・・OK?』

『え・・・あ、はい』

これが好都合と言わんばかりに、落ち着いた彼女の話を書く事にした。

『とりあえず座って。お茶でもいれるからな』

『はい、ありがとうございます!』

もしかしたら、泥棒かもしれない。場合に寄っては警察に・・・あれ?

見知らぬ女の人 酷く状況がわからなさそう 家に連れ込む . . .

俺が警察行きじゃねえか!?!?

『(つーかよく考えたら俺女性を家に入れてるよ!?彼女いない〃  
人生の俺が!?)』

いやまあ早苗さんと咲夜さんも俺の家に来た事はあるが、二人きり  
じゃなかったし、全然気にしてなかった。

だが今は完全二人きり。これは色々ヤバイ!

『(冷静になれ・COOLになれ・)』

意識しなければいいんだ。よし・・・そうならば精神統一だ・  
こついつ時に使うのは初めてだな。

『フウー・・・』

よし、平静になれた。後はお茶をいれるか・

『あのー・・もしかして貴方は武道かなにかやっているんですか?』

ん?今の呼吸を見てそんな事を言う事はもしかして・・

『ええまあ、受け継がれているようだから・・それより今は自己紹  
介が先だな。俺は海崎賢太。貴方は?』

『私は紅美鈴！よろしくお願いします賢太さん！』

【回想・終】

ドドドドドドドドッ！……！

………気にするな！

それから美鈴の話を聞いて、美鈴が幻想郷という場所から来た事、紅魔館で門番をしていたこと、自分も武道をしている事など、様々な事を知った。

どうやら美鈴は現代入りしたらしく、泊まる当てがあるわけないので俺の家に泊まる事になったのだ。

正直言つて美鈴との生活はとても楽しかった。ずっと続けば楽しいだろうなあ、と思った。

が……そんな楽しい幻想も終わりを告げてしまう。それは約二ヶ月後……（前話のラスト部分）それは起こった。

【回想】



家に帰った俺は手早く作った料理を美鈴と食べた。

『いやー賢太さんの料理は本当美味しいですね!』

『それはうれしいな。作りがいがあつたと言つもんだ』

美鈴はニパーという笑顔でお礼を言ってくる。

『さて、今日もやるか?』

『ええ、負けません!それでは用意して参ります』

やることというのは、武道の修業だ。つまり勝負だ。美鈴にはまだ一回も勝てていないが、そろそろ勝てそうな予感がするぞ・

『・・・?遅いな・・・』

ただタオルを用意するだけなのに、嫌に時間が掛かつてるな・・・ど  
うしたかな。

『け、賢太さん!来ては駄目です!』

!?!隣の部屋から美鈴の叫びが!一体なにが!そう思って扉を開け  
て中の様子を見る。

『賢太さん!?!』

扉の前には美鈴がいた。それだけではない。問題はその下だった。

『え・・・』

何か言葉に現せない想像を絶する地面へと変貌していた。そしてそのまま、落ちるようにして俺は一瞬気を失ってしまった、というわけだ。

### 【回想・終】

ドゴオオオオン！！

・・・

そうして俺は今ここにいるということなんだ。え？ここが何処かって？そんなの俺が知りたいよ・・・

121

### 【回想・数十分前】

「ん？」

意識を取り戻して俺は辺りを見回す・・・が、とてもじゃないが暗くてよく見えない。目を凝らしてようやく見えるぐらいだ。

「（は、そっだ美鈴は！）」

一緒に落ちたであろう美鈴を探す・・・しかし誰もいない。近くにあ

るのは・・・

「壊れた人形・・・？」

この時声に出したのがまずかったのかもしれない。

「ねえ」

「!？」

バツ！

咄嗟に声を掛けられたので拳を構えて後ろに振り返る。しかしそこにいたのは、

「（女の子・・・？）」

小さな女の子だった。咄嗟に戦闘体勢になった自分はどうした、と思ったが、それは正しい事だった。

「貴方はコワレナイよね？」

ゾクッ！

「!？」

【回想・終】

「アハツハ！！凄いいよ！まだ壊れないなんて！」

ドオオオオオオオン！！！！！！

何か不思議な羽のような物を生やして飛んで何かを放っている彼女。  
このままじゃ埒があかない・・・！

「アハハハハハツ！！」

近くに迫って来た！！

「（しかたない・・・本当は使いたくないが、やるしかないか！）」

心を沈め、精神統一をする・・・。俺がこれを習得しようと思ったのは、信太が消えたあの時からだ。代々海崎家に伝わっている技の極意。

俺が皆を守るような事をしようとしたんだけど、結局この力を初めて使うのが自分の為だなんて・・・

それでもまだ、美鈴は助ける事は出来る！まだ助けられるかもしれないんだ！

今こそ、継がれし技を使う時！

「アハハハ「はあああっ！」「！？」」

カウンターになるように彼女の突進に合わせ、そして技を発動させた！

「昇・・・龍拳!！」

ドガアッ!

「ガッ!！」

強烈なアッパーを喰らわせる。彼女はそのまま倒れ込む。・・・どうやら成功したようだ。

「（これも美鈴との修業のおかげか・・・）」

どうやら自分でも思っていた以上に強くなっているようだ。・・・人は止めてねえぞ？

「フフ、フフフ・・・」

つとーまあ、当然ながらまだ立ち上がるか。ようしなら・・・

「アッハハハ!ハハハハハハハハハハ!!!！」

な、なんだいったい?狂ったように笑い始めたぞ・・・

「楽シイ!楽シイヨ!コレデワタシモ本気で遊ベルネ!」

遊ぶ・・・だと、一体これの何処が遊びなんだ!

すると彼女の手には一枚のカードが握られていた。

【禁忌「レーヴァテイン」】

すると大きな剣が出現し、俺に向かって振り下ろされていた!まず

い避けれない！

「……………!?!」

咄嗟に防御をして軽減しようとしたが、感触がない。というかさっきまでの場所とは全く違う場所だった。

「貴方がこつちに来るなんてね・賢太」

聞いた声を聞いて振り返ると驚きの人物がいた。

「さ、咲夜さん!?!」

行方不明になっていた十六夜咲夜さんだった。

何故かメイド服だった……………どうしたことなの……………

姉の思っ心・・・妹への思い（前書き）

マッサー

「長くなったでござるよ」

レミリア

「ついに私の初登場ね。カリスマを見せてやるわ」

## 姉の思つ心・・・妹への思い

賢太Side

「さ、咲夜さんどうしてここにいるんだ!？」

行方不明の咲夜さんをこんな所で見つけるなんて・・・それよりここから脱出しなくては!

「落ち着きなさい賢太。今貴方がどういう状況になっているか、教えるから」

状況? 一体何を・・・

タツタツタツ!

「ぜえ、ぜえ、賢太さーん! 咲夜さーん!」

この声は美鈴!?! どうやら無事なのか。

「賢太さん、どうやら無事だったんですね!」

「ああ、まあ・・・」

「とりあえず美鈴も来た事だし・・・歩きながら説明していくわよ」

そう言つて咲夜さんを先頭にこの世界についてなどを説明される事になった。



【少年&少女達移動中・・・】

ま、まさかそんな世界なのかここは・・・。美鈴も妖怪だったのか・  
・流石に咲夜さんは人間をやめてはいないらしい。しかし能力がす  
げえ。

そして、この館の住民についてもだ。

今からこの主の吸血鬼に会いに行くようだ。美鈴は門番の仕事に  
戻り、咲夜さんが案内してくれている。

咲夜さんはどうしてここに来たのかと聞いたら、

「秘密はメイドに必要な事よ」

なんて言われた。そんなの初耳です咲夜さん。とかなんとか言っ  
ている間に主の部屋の前にたどり着いた。

トントン

「失礼しますお嬢様」

咲夜さんに続いて俺も中に入る。中央の奥で座っている少女を発見  
した。

見た目はただの少女にしか見えない。でも中身は相当なものだ。

「ご苦労様咲夜。下がっていいわよ」

「はい」

咲夜さんは廊下へと戻って行った。どうやら二人だけの会話をしようだ。

「初めましてね。私はレミリア・スカーレット。よろしくね海崎賢太」

「・・・！」

まだ名乗っていないのに・・・

「驚いたかしら？私は運命が見えるのよ。だからこの出会いも必然だったのよ」

運命・・・それが彼女の能力なのか？

「まずは、美鈴を助けてくれたのよね」

「助けた・・・というよりは泊めてただけなんだけど・・・」

「外に行く事なんて無いから大変そうらしいんだけど、貴方が美鈴を泊めてたようだから、美鈴は無事帰ってこれた」

まあ、そうなるのかな？

「それで今度は貴方がこっちに来たわけだけど・・・これからどうする気かしら？」

「どういふと言われるても、当ても何も無いよ」

帰る手段も咲夜さんは見つけていない。帰る気があるか微妙だったような気がしたが。

「・・・まあ私も興味深いし、泊まっていつてかまわないわよ？」

「・・・いいのか？」

いくらなんでも急すぎだろう・・・

「別に構わないわよ・・・ああそうそう、地下には近づかない方がいいわよ」

・・・

「何故だ？」

「貴方は身を持って知ったでしょう？今度は貴方、死ぬわよ」

・・・

「忠告どうも・・・」

ごめん、美鈴、咲夜さん、貴方達二人に言われた言葉、ちゃんと覚えてた。

『お嬢様に妹様の話はしない方が、いいと思います』

『お嬢様の機嫌を損ねないようにしなさい』

その言葉から察するに、レミリアにフラン、それも関係については聞いてはいけない事なんだと思う。

「ただ咲夜さん？俺がそんな話を聞いて黙っていられると思ったのか？」

「いやもしかしたら、知っていて止めなかったのかもしれない。」

「一つ聞いていいかな？」

「なにかしら」

俺はこの館の最大の不満を主にぶつけた。

「なんで妹から逃げているんだ」

咲夜 Side

さて予想が正しければそろそろ賢太は言ってるわね。もしかしたら彼はこの館を変えるかもしれない。なら、私は彼のサポートをしようかしら。

「（まずは地下に向かいます）」

妹様を連れ出す・・・それが私に出来る・・・いや、することよ。

「待つてください咲夜さん」

あら、この声は・・・

「あら美鈴。門番の仕事はどうしたのかしら」

「私も手伝います」

あら、美鈴もわかっていて止めなかったのね。僅か二ヶ月ぐらいの・  
いや、賢太の性格ぐらい、一週間ぐらいあれば十分だわ

「私はここの館に勤めて間もないからいいけど、貴方は長くからいるのよ？大丈夫なのかしら」

「長くからいるからこそ、動くのは今なんです。姉妹の絆を取り戻すのは」

なるほどね・・・本当は皆元に戻って欲しいわけか。

「さてそれなら問題は・・・話は全部聞かせて貰ったわ・・・！」

どうやらお嬢様の一番の友人に聞かれてしまったようね。

「そこまでよ。幻想郷で異変を起こそうとしている直前にこんな事はさせないわ」

パチュリー・ノーレッジ。魔法使いで、お嬢様の最大の理解者。今回私達紅魔館が起こそうとしている異変を考えた人だ。

「覚悟はいいわよね？」

普段は喘息持ちなのだが、調子が良い時はお嬢様と同等の力を持っている。

私と美鈴はそれぞれ構える。ここで時間を掛ける訳にはいかない。パチュリー様がスペルカードを取り出し・・・

「・・・なんてね」

再びしまい込んだ。あら？意外です。

「咲夜だけなら本気で止めたと思うわ。でも、美鈴が動いているのが驚いたわ。だから私も協力するわね」

そんなに美鈴が動いている事に意味があるのでしょうか？

「まあそれは彼女がレミイ達の両親がまだ生きている時から門番をやっていたから、よくわかってるのよ。だから今美鈴が動いているのは意味がある事なのよ」

「そう言わないでくださいって！自分じゃ何も出来なかったんですから・・・」

随分と信頼されてるのね・・・だから門番をしているんでしょうけど。

「さて、それじゃフランの元へ行くわ。時間は掛けられないから一

気にやるわよ」

「はい!」

私達は妹様のいる地下の部屋に行った。姉妹の絆を戻す為に・・・

レミリアSide

逃げる・・・フランから？

「どつという意味かしらね」

「言葉通りだ。お前はフランから逃げているんだ」

イライラしてきたわね・・・

「お前はフランを愛している筈だ。だが同時にあの子に悲しい事をさせたくないと思っている」

私は無言のまま彼の話を聞く。

「お前はもしかして運命で見てしまったんじゃないか？フランの遊びで皆が傷ついてしまう運命を」

私は眉がピクツと自然に動くのが感じた。

「だから地下に監禁した。長く長く。たまに一緒に遊んであげれば大丈夫だと思うって」

………黙れ

「だがそんなことは偽りの事でしかない！そんなことをして本当に幸せなのか！」

黙れ！！！！

「レミリアも本当は気付いているんだろう！！こんなことを何時までも続けて「黙れええええええええええ！！！！」グアツ！！」

ドゴオオオオン！！！！

私は紅き弾幕を飛ばし吹き飛ばした。

「貴様に何がわかる！たかが数十年しか生きていないお前に、口だしされる筋合いは無い！！」

ドドドドドドドドッ！！！！

怒りのままに私は賢太の吹き飛んだ先に弾幕を撃つ。

ザッ！！

「そうやってお前はずっと逃げて来たんだろう！！フランと本当は一緒に生活していきたいのに！！」

しかし弾幕は避けられてしまう。流石に最初の弾幕は命中したよう



で、額から血を流している。

「うるさい黙れ!!その耳障りな口を・・・いや、命を閉じる!!」  
私はこいつを殺す事にした。これ以上奴の顔など見たくもないからだ。

「天罰・スターオブダビデ!」

スペルカードを発動させ、弾幕を張る。奴はまだ幻想郷に来て一日も経っていない。ならばすぐに殺せる筈だ。

そう思っていた。

「な、なに!?!」

奴は全ての弾幕を避けきっていた。馬鹿な!奴はスペルカードがどんなものかはまだ把握もしていない筈・・・なのに何故。

ゴオオオオオオオ!!

「ぐっ!?!」

殺気と気迫をぶつけてくる・・・これほどの濃いものをだど!?!奴は、人間なのか!?!

バツバツ!ザツ!

近距離まで近寄られてしまう。くっ、美鈴のような近接タイプか!

「くっ!」

咄嗟に防御をとり、攻撃を防ごうとする。

ドゴォー!!

「ゲハアツ!!」

ドゴオツ!!

蹴りを入れられて勢いよくぶっ飛び壁に激突する。当然この程度で倒れる私ではない。だが、本気で私を怒らせてしまったようだな・

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴツツツ!!!!!!

私の出せる全ての殺気を奴にぶつける。人間なぞにこれほどの力は出したくないが・・仕方ない。

「レッドマジック!」

私は大量の弾幕を張る。人間相手に使いたくはないのだかな・・

「貴様はさっき言ったな・・私がフランを恐れていると」

弾幕が部屋を埋め尽くす。奴に避ける場所などない。私は弾幕を発射し始めた。

ドンドンドンドンドンドン!!!!!!

奴は避けられないのがわかっていたのか、防御をしたようだ。

「違う！私はフランを愛している！！」

フランはとてもやさしいいい子だ。姉の私には無い優しさを持っている。

「私が計画している事が成功すれば、フランを部屋から出して、一杯遊んであげる事も出来る！いつでも一緒にいてあげられるんだ！」  
明日にでも行おうとしている事。それが成功すれば、フランと仲直りすることだって出来る筈だ！

「だから貴様に言われる事などないんだ！！」

そうだ、私のやっている事は正しいんだ！フランと仲直りする計画が成功すれば・・・

「だったら・・・ごぶっ・・・」

弾幕の攻撃により奴は血まみれだった。それでも何か言おうとしている。

「何故・・・そのことを・・・妹に、言わないんだ！！」

「！？」

そ、それは・・・

「お前は言えないんだ！フランが自分を拒絶するんじゃないかと！495年監禁してきた自分を恨んでいるんじゃないかと！」

ち、違う！そんなこと、そんなこと・・・

「だから今まで監禁して逃げて来たんだ！長くなれば長くなるほど呪縛は大きくなるのに！」

そんなことない！私はちゃんと向き合える筈だ！！フランと向き合える筈なんだ！！

「私はフランと一緒に・・・【生きて・・・行きたいんだ！！！！】」

【神槍・スピア・ザ・グングニル】

弾幕を槍のように鋭く変化させ、奴に投げようとする。

「私達姉妹の幸せを得る邪魔を・・・するな！！！！」

ズゴオオオオオオオオオン！！！！！！！！

私はグングニルを投げた。そして奴の表情を見た。

「その気持ち・・・妹の前で言っただけよ・・・きつとフランは、喜んでくれる筈だ」

笑ってそう言っていた。

まさかこいつ、私の思いを聞く為だけに私を・・・！

「くっ！！！」

投げたグングニルは賢太のど真ん中を狙って放った。直撃すれば助からない。

「くそおおお!!!!」

奴は避けようとしなさい!! いや、もう避けられる体力も無いんだ!

「私は・・・誰も死なせたくないんだ!!!!」

「その言葉、待っておりました、お嬢様」

この紅魔館に住んだばかりの従者の声が聞こえた。

「時よ・・・止まりなさい」

美鈴 Side

ドゴオオオオオオオン!!!

お嬢様の投げた槍は誰にも当たる事無く、壁に命中しただけだった。  
賢太さんを助けたのは時を止めた咲夜さん。

お嬢様は一瞬理解出来なかったようだが、すぐにわかったようだ。

「さて妹様。今なら行って大丈夫です。貴方の気持ちをお嬢様に伝えて下さい。お嬢様も、貴方の気持ちに答えてくれますよ」

「う、うん・・・ありがとうみんな・・・」

そう言つて妹様はお嬢様の元へと向かつて行つた。

賢太さんとお嬢様の話はほとんど全部聞いていた。恐らく今なら二人は絆を取り戻せるだろう。思えば長かったものです。

「それじゃ、邪魔者は消えましようか」

「はい」

明日が楽しみです。本当に久しぶりの姉妹の仲の良い姿が見られるのだから！

これも全部賢太さんのおかげですね！起きたらちゃんとお礼を言わなくては！

姉の思つ心・・・妹への思い（後書き）

フラン

「ねえ作者、私とお姉様の仲直りシーンは？」

マッサー

「レミリアは不器用だからあの後弾幕ごっこになるからカット。パチュリーと美鈴はそのことに気付いてたから退散したの」

レミリア

「そのことを書きなさいよー！」

フラン

「あれでもそうになると異変はどつするの？起こす意味が無くなるけど・・・」

マッサー

「ふふふ・・・ここは幻想郷だぞ？異変を起こす理由なんて些細な事よ・・・」

咲夜 Side

「な、なんだつてー!?!」

朝食の時間、美鈴が凄く驚いた声を上げる。この場で驚いていないのはお嬢様二人だけだ。

「本気かしら二人共？はつきり言って異変を起こす必要はないと思うのだけれど」

元々姉妹の仲直りの為の異変だ。今仲直りした今、する必要はないのだけれど……

「何言ってるのよパチエ。ここは幻想郷よ？」

幻想郷だからなんなのだろうか？

「ここでもっとも優れた種族が吸血鬼だと言う事を見せ付けてやるのよ!」

「そーだそーだ!」

……なんというか、初登場時のカリスマは何処に消えたのかしら？小物としか感じないわ。

パチユリー様は呆れていて小悪魔も呆然としている。

「いいかもしれませんね」



しかしここで意外にも美鈴が賛成を示した。本当に意外だね。

「あら美鈴が賛成するなんて珍しいわね。反対すると思ったのに」

「まあ私もたまには、ばあーとしたいのです」

そういえば美鈴も妖怪なのよね。この館で人間なのは私と賢太だけね・・・

「ただし条件として、賢太さんの安全は確保して欲しいです！」

あ、それはもつともな意見ね。彼は命に別状はないが、しばらく安静にしていなくてはならない。

「それはわかってるわ。賢太が寝ている部屋には結界を張っておくから」

ならいいですよーと美鈴が言った。

「よし、それならば開始は今日の夜からよ。皆各自頑張りましょう」

「おー！ー！ー！」

お嬢様方は張り切ってますね・・・まあ私も頑張りましょうか。

何か、賢太の他にも出会いそうな感じがします。メイドの勘です。

パチユリーSide

私は美鈴と共に賢太の様子を見に来た。早速結界を張る為だからだ。

「賢太さんはゆっくり寝ています。異常は無いです」

「よし・・・それなら」

ピカア!!

結界を張る。これは私以外側からは絶対に開けられない。内側からなら簡単に開けられるけど、賢太が今日中に起きれる事は無いだろう。

「それでは！私は門番の仕事に戻って参ります！」

そう言つて門の所へ行こうとする美鈴・・・その前に私は聞いておきたいことがあった。

「貴方が異変に賛成したのは・・・彼が来ると思つたからかしら？」

ピタツと美鈴の足が止まる。やっぱりそうだったのね。

「確かに彼なら異変を起こせば飛んでくるような性格だと思つわ。でももう彼は・・・」

「わかっています・・・幻想郷の歴史を特別に見せて貰つて、それ

でも信じられなくって閻魔様の所へ直接聞きに言ったんですから・  
」

閻魔の所へ行つて無事に帰ってくるなんて、美鈴は妖怪の中でひよ  
つとしたら、私たちより上かもしれない。本当は隠しているだけで

「でも・でも・ひよこって出てくるかもしれないじゃないです  
か・あの人はそういう人ですから・」

そう言つて美鈴は今度こそ門へと向かつて行つた。門へ向かつてい  
つた美鈴は涙を流していた。

### 【現代】

正由Side

「・・・・・・・・」

静かに空を眺める。もう時刻は夜だ。今俺が一人なのは、渚、アラ  
ス、勇儀が酒を飲んでるからだ。

別に逃げたわけじゃ・ごめんなさい本当は逃げて来ました。

「レイラも毎回景色眺めているのか？」

「あ、はい。そうです」

どうやらレイラも夜の景色を眺めるのは好きらしい。

「夜の星を眺めていると・・・何か思い出しそうなんです」

「へえ・・・」

そういえば彼女は生きていた時の記憶が無いんだっとな・・・ん？

「月が・・・紅く見える」

「本当ですね・・・なんででしょう?」

恐らくこれは・・・

「幻想の歴史が刻まれていく・・・だろう」

渚か・・・ということはアラスは・・・チーンだな。

「物語りが始まった・・・いや、再開したというべきか?」

「ああ・・・これが新たなる始まりの事だ」

【絆が絆を生み、それは存在を強くする】

「彼らはこれから強くなっていく。そして彼女達も」

【笑いあったり泣きあったり怒りあったり、絆を深める】

「その先に何かがあるのかは・・・そいつら次第ってことだな」

【後悔はしない選択を・・・】

「ああ・・・」

【俺達のように・・・】

【幻想郷・人里】

阿求 Side

今は夜。人里の人達は皆寝ている時間と思われれます。しかしどうやら異変が発生してしまったようです。

「（・・・紅い館の悪魔・・・か）」

紅い霧・・・人体に多少なりとも影響はあるようです。今現在この霧によって様子がおかしくなった妖怪を寺子屋のせんせいの上白沢慧音を筆頭に静めてっています。

しかしこれでは根本的な解決にはなりません。が、恐らく巫女が動くでしょう。

私達はこの人里を護りましょう。それが私達に出来る事ですから。

【魔法の森のとある家】

「大変や魔理沙！外が紅い霧だらけやで！！」

「なにい！？まさか異変が起きたのか！！」

「どうやらそうや。この霧、人体に影響があるで。恐らく妖怪が発生させたもんや」

「よーしついに私達の名を上げる時がきたぜ！」

「そうやな！ここまで長かったでー」

「よしさっそくいこうぜ俊ー」ちよい待たんか魔理沙ー！「フオオ  
！？」

「おまえそんなヨレヨレパジャマで異変解決する気かいな！しかも髪もボサボサやん！」

「あー。悪い悪い。最近研究が続いてたからずっとパジャマだったぜ」

「あーもうわかったからきっちり整えてからいくでー」

「おーう俊ー着替えさせてくれー」

「羞恥心を少しは持て!!」

【10分後】

「よし行くぞ俊一!!」

「おっしゃー!!」

「手柄を我が手に!!」

「粉碎玉砕!!」

「「大喝采!!」」

「大丈夫かな？あの二人？修業の成果が出るといいけどねえ……」

【博麗神社】

「なるほどね……初めての異変にしては中々じゃない？」

「そんな暢気な事を言ってる場合かよ……」

「ま、いいじゃない」

「ま、そうか」

「じゃ、行くわよ」

「ああ、行こうか」

「「異変を解決に」」

博麗の巫女と魔法使いは異変を解決しに行く。それぞれ現実からや  
つてきた人物と共に。

そして紅き館にも現実からやってきた人物がいる。

これはまだたつたのページの始めでしかない。

幻想と現実には混じりあい、そして絆を作り、幻想と現実は何を生み  
出すのか？



【??.?】

「闇は全てを映す・・・ふふ・・・今日は素晴らしい夜になりそうね・・・」

マッサー

「さあ次回から原作の初の異変です」

霊夢

「展開が絶対に違いそうね」

魔理沙

「最後の奴が今回のラスボスか？」

レミリア

「なんですって？私がラスボスでしょ？」

フラン

「EXとか含めてなんだから、私でしょ！」

Stage 1 再会と対決（前書き）

魔理沙

「ヒャッハー！異変の始まりだぜー！」

俊一

「バリバリよろしくー！！」

## Stage 1 再会と対決

霊夢Side

バツ!!

札を飛ばして雑魚妖怪（毛玉みたいなもの）や妖精をぶっ飛ばしながら進んでいく。

「おやおや、こころでゆっ」「そおい!」「わー」

ピチューン

なんか生首がいたけど妖怪の類だろうから瞬殺ね。

「はっ!」

ザクツザクツ!

信太も全く無駄の無いグレイズでポイントを稼ぎながら敵を倒していく・・・ポイントって何よ?

まあそれよりも、

「んー・・・夜は気持ちいいね」

風が気持ちいいわ。敵も出てこなくなったので風を堪能する私。

「暢気過ぎないか?いくらなんでも・・・」

細かい事気にするわねー。まさにこまけえことは)ry

「いいのいいのこれぐらいで。逆に緊張してる方が駄目なんだから」

「ま、それもそうか・・・」

すぐに納得される信太。というより諦めてるよつに感じるわ。

「ん・・・誰か来たぞ？」

あら、こんな夜中に私達以外に行動しているのは妖怪ぐらいかと思っただけど・・・

「ん？誰だぜ？お前ら」

箒にそれぞれ乗った少年少女がいた。

### 【数分前】

魔理沙Side

「よつとー」

ドーン！ドーン！

弾幕を撃って雑魚妖怪（毛玉のような）や妖精を撃ち落とす。

「おいおい、こらでゆっ」「おりゃあ!」「ぎゃあー」

ピチューン

何か生首がいたがどうでもいいのですぐ忘れたぜ。

「ふっ! よっ!」

俊一もやってるぜ。それにしてもなあ・・・

「今日は一段と夜が深く感じるぜ・・・」

夜はあんまり好きじゃないんだよなあ・・・変なのはでるし。

「うーん・・・」

ん? 俊一が珍しく悩んでる?

「どうかしたか?」

「ん、ああ・・・よくよく考えたんやけど・・・」

そう言って俊一が跨がって飛んでいる筈を指差す。

「俺の筈って筈から武器に変化出来るやろ?」

「ああそうだな」

私にも火炉があるように俊一にもマジックアイテム、つまり武器が

ある。

「でもそうになると手に持つから飛べなくなるんやけど・・・」

・・・

ポン

「あ、そういえばそうだな」

私も今気付いて拍子抜けしてしまったぜ。

「香霖もなんでそれを俊一に渡したのかな？」

「知らんがな・・・」

まあ地上戦が出来ないなら私が協力すれば空中でも俊一の本気が出せるが・・・ま、それはわからんな！

「お、俊一誰かいたぜ」

私達以外で行動しているのは・・・妖怪かもしくは・・・博麗の巫女か！

「で、どうするんや？」

「多分異変を解決してきた巫女の可能性が高いな、よし・・・」

私はとりあえず話掛けてみることにした。

「そういうあんた達こそ誰よ。もしかして異変の黒幕？協力者？」  
突如現れた人物。箒に乗ってるわね。

「おいおい違うぜ。私達は異変を解決しに来たんだぜ」  
ふーん・・巫女以外に異変を解決しに行こうなんて考える奴もいるのね。

「あ、そ。ま、せいぜい死なないようにしなさいね。私達は私達で動くから」

別に協力する気も忠告する気も無いのでさっさと勘がいつている方向へ行こうとする。

「ん？」

行こうとしたのだが、信太が動こうとしない。どうしたのかしら？

「.....」

よく見れば相手の男を見ている・・・ま、まさか、信太にそんな

「なんや？わいになんか用なのか？」

「.....」



信太は何も答えようとはしない・・・というより信太の目がだんだんと鋭くなっていった。

「こんな時に頼む事じゃないが・・・そのあなた、俺と弾幕ごっこをしてくれ」

「へ・・・わいか!？」

信太がようやく口を開いて言った言葉は弾幕ごっここの要求だった。

「（ちょっとあなた本気!？こんな時に関係ない奴との弾幕ごっこなんて!）」

私はこそこそ声で信太に言った。

「（わかってる・・・だがなんでかわからないが、こいつと戦った方がいいと言ってるんだ・・・）」

それってもしかして・・・信太の無くしている記憶の事かしら・・・

「（・・・わかったわよ。遅刻は許さないわよ。さっさと終わらせて合流しなさい）」

「（ありがとう）」

はー・・・じゃあしょうがない。私はあのもう一人の魔法使いと行きますか。

「そのあなた」

「お！？私か！？」

「あんた以外に誰がいるのよ。とにかく、男どもは戦う事になったから、私達は先に行って異変をどうにかしに行くわよ」

「まだ戦うなんて行っておらへんのやけど・・・」

向こうの男が何か言ってるけど無視して私は先に出発する。程なくして魔法使いもついてきた。結構のスピードじゃない。中々やるわね。

「お前名前何て言うんだ？私は霧雨魔理沙だぜ！」

自己紹介してきたわね・・・面倒だけど向こうから名乗られたら名乗らない訳にはいかないわ。

「私は博麗霊夢。よろしくお願いするわ、魔理沙」

俊一 Side

そんなこんなで魔理沙も行ってしまって二人だけになってしまった。しかし本当に戦う気なんか？

「霊符【斬形】」

！？な、なんやて！？開幕スペカかいな！

「魔符【ライトニングアロー】！」

ドオオオオオオオオオン！！！！！！！！！！

至近距離でのスペルカード同士の発動で大きな爆発が起きる。無茶苦茶やなあ……

「本当は……霊夢に友人を増やそうとした計画にしようとした……」

なんか語りだしたぞこいつ……しかしなんか見覚えあるんやけど……

「博麗の巫女は人と人との関係を持つとしない……だから霊夢の友達になってもらおうとした」

「それが魔理沙かいな？」

相手はコクリと頷いた。

「なんで魔理沙なんや？」

「同じ人間で異変にも解決に向けて行動する人間は霊夢にはぴったりと思っただけ」

ははは……まあ魔理沙も積極的やからな。結構こいつ良い奴かな？

「そのつもりなんだけど……けど……」

「言いたい事あるならはつきり言ってみい？」

「・・・あんた、名前は・・・？」

なんか偉く苦しそうになってるな・・・

「わいは桜井俊一や！よろしく頼むで！」

「ぐう！！！！さくらい・・・しゅんいち・・・か・・・」

わいが名乗ったらなんかさらに苦しそうになりおった。おいおい大丈夫かな？

「・・・時間を掛けたく無いから、後一回スペルカードのぶつかり合いで終わりにさせよう・・・」

「ああ・・・別に構わへんけど・・・」

あんたの方が身体大丈夫かいな。

「そうそう、俺も名乗らないとね・・・」

多少ふらふらしながらもわいの方を向いてスペルカードを握っていやがる・・・大丈夫か？

「俺は相澤信太！！博麗の巫女の守護者だ！」

！？な、なんやと！？

【霊符・月閃】

信太のスペカが発動されて月の形をした弾幕を飛ばして来る。しかも速くて多い！！

【雷符・ライトニングレーザー】

ならば実力行使で消すしかないと思いわいも発動する！！

ドオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

「てめえ・・・いままで、ここにいたのか！！」

わいは弾幕通しがぶつかる中、思っていることをぶつけていく。

「やっぱり、俺を知ってるのか！」

っ！まさかこいつ・・・

ドオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

大きな爆発を起こして辺りは静寂になった。

恐らく信太は記憶喪失・・・だからわいの事も覚えてない。

「教えてくれ。俺は一体「そんなことはどうでもいいんや」・・・え？」

信太の記憶が無い以上、今のわいとの関係は何も無い・・・

なら、

「今はわいと友達になること・・・それが大事な事や」

新しい関係を作ればいい、それだけや。この幻想の世界でな。

「・・・ああ、わかった」

信太は手を差し延べて来たので、わいも手を出して二人で握手した。

「さて、これからどうするんや？」

「とりあえず二人の尾行。霊夢達も友人になってくれる事を期待しつつ、ね」

はは、それや面白そうやな。全く緊迫感がないわいらは静かに魔理沙達を追い掛けて行った。

Stage 1 再会と対決（後書き）

霊夢

「あら、Stage 1からオリジナルね？」

マッサー

「はい、もうこの時点で彼女がどう登場するか、わかるんじゃないでしょうか？」

信太

「嫌な予感しかしない・・・かもしれない」

Stage 2 氷精参上!! (前書き)

氷精

「あたい参上!!」

信太

「誰？」

霊夢

「なあ？」



## Stage 2 氷精参上!!

### 霊夢Side

「おい霊夢ー。こっちにこの霧の原因があるのかー？」

すぐ後ろを飛んでいる魔理沙が私に疑問を告げている。ま、確かに訳もなく進んでいるのが不安なんでしょうね。

「大丈夫よ。私の勘がそう言ってるから」

「勘って・・・おいおい、そんなので辿り着けるのか？」

昔から私の勘が外れる事は無い！今もこうして進んでいれば何か・

ドオンドオン！！

「！」

「ぬおっ!?!」

そら来た。

「……」

全体的に緑を連想させる妖精だ。しかも、そんなじゃそこらの雑魚妖精じゃないわ。妖精の中じゃトップクラスのレベルね。

トクトクトクトクトン!!!!!!

どうやら紅い霧でおかしくなってるようね。

「霊夢、どうするんだ!？」

そんなもん決まってるじゃない。

「実力行使で突破よ!」

こいつが異変の犯人なわけないし、邪魔をしてくるなら突破しなくちゃならないわ。

「……それもそうか。よしぶっ飛ばすぜ!」

ダンッ!ダンッ!

そうと決まれば私も弾幕を撃つ。

ガガガガガッガガガッ!!!!!

私達の弾幕を危なっかしくグレイズしている。……いや、当たりかけてるわね。

「ヒヤッハー!」

嫌に魔理沙はハイテンションね。逆に魔理沙を沈めようかしら。

ガガガガガガガッ!ドオン!!!

「……!」

ピチューン

魔理沙が無駄に撃っていた中私は一発だけを撃って妖精に命中させた。

やっぱ所詮は妖精ね。一回だけで沈んだわ。

「よっしゃ！！連携プレイだぜ！！」

あれが連携といえるべきなのかしら？まあそんなことはどうでもいいわ。さっさとこの辺を探索しましょう。

「お？霊夢、ここが目的の場所か？」

「まあね」

ここらに何かあると思ってやってきたわけだど……。たどり着いたのは霧のかかった湖。霧が紅くなっており、中々に視界が悪い。

「でもよう、特に何もなさそうだぜ？」

確かに魔理沙の言う通りだ。いたのはさっきの妖精がいたくらい。他は本当に雑魚妖怪や妖精くらいだ。となるとここじゃないのかしら……。私の勘に狂いはないはずなのに……。

「じらーーーーー！！！！！！！！」

ヒューン！

「！！！！」

バツ!!

大きな声と共に何か私たちに飛んでくる。飛んできたのは・・・  
氷柱!

「どうやらまた妖精のようだぜ?」

魔理沙に言われて攻撃してきた妖精を見る。全体的に見て青色・・・  
いや、氷色かしら?・・・自分で考えていてんだけど氷色ってど  
んな色かしら?

「勝手ににあたいのなわばりに入ってるんじゃないわよ!!」

青よりもっと薄い色かしら・・・?それとも空のような色なのかし  
ら・・・。

「さらに大ちゃんまで傷つけておいて・・・氷漬けにしてやるわ!」

ほかにも・・・えーと・・・他に知ってる青色がおもいつかないな  
あ。何かあったかしら。

「大ちゃん?そんなやつしらないぜ?」

「嘘つくな!!その紅白が大ちゃんを撃つたの見たんだ!」

うーん・・・濃い色の青?それとも薄い色の青?・・・どれも違いそ  
うだわ。

「そんなわけで覚悟しろ!その白黒もだーーーー!!」

.....

「大ちゃんを傷つけたこと、氷の中で後悔しなさい!!」

.....うるさい。

「凍符「パーフェクトフリーズ」!!」

.....

俊一 side

信太は本当に記憶喪失の様や。一応念のため確認したかっただけや。それで今は少し離れて魔理沙たちの様子をうかがつとる。どうやら新たな妖精が現れてる所や。

「しかしなー、こんなことしてるのなんか変態見たく感じるのは気のせいかいな？」

「気のせいだ」

いやどう考えてもストーカーやろ……。確かに魔理沙には女友達おらんから賛成したけど、俺らただ後ろから見てるだけやん。。。

「おーあの妖精スペカ使おうとしとる。まあ、二人なら問題ないな

「いやろっな」

さっき倒した妖精と同じぐらいの感じやし、わいらの出番はないな。

「……………」

「……………?どないした?」

なんか考え込むようにして黙っていたのが気になったので信太に聞く。

「……………あの妖精瞬殺される……………と思う」

「は?」

そんなんさっきの妖精と同じじゃないかい。

「ぶちぎれいむによってだけ……………」

なんやそのつなげたような感じは?

「魔理沙が巻き込まれなければいいけど……………」

え?そんなにやばいんか?そんなこと簡単には思えへんけど……………」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

!?な、なんや!?!かなり大きな爆発音やったで!?

「……………やっぱぶちぎれいむだった」

魔理沙 side 数分前

「うお霊夢！あの妖精スペルカード使ってきたぞ！」

さつきから全くしゃべらない霊夢に話しかける。

思えば不思議な感じがする奴ではある。まあ、博麗の巫女だから不思議な感じなんだろうが。でもある意味私たちは同じなのかもしれないな。

孤独に生きようとした私と孤独に生きていく霊夢。どちらも孤独だ。そんな私たちに偶然なのか、共に歩んでくれる人が現れてくれた。それで今の私たちがあつたわけだが・・・いつまでも俊一たちに頼りっぱなしじゃ悪いし・・・。

「（霊夢と友達になるのも悪くないかもな）」

そうすりゃ負担は減るし、俊一達も喜ぶかもしれない。

「て、私も考え事してるんじゃないかなかったぜ!？」

のわーーーーー!!!!!!妖精の弾幕がそこまで来とるー!?!?こんな  
らわたしのスペカで・・・

夢符「封魔陣」

ザアアアアアアアアアアア！！！！！！

妖精の弾幕は何かの陣によって防がれる。これは・・・霊夢のスペカか！

「て、あれ、何処だ霊夢ー？」

陣がなくなつて相殺し終わったと思つたら霊夢がいなくなつていた。相手の妖精も探してる。

霊符「夢想封印」

さつきとは違う霊夢のスペカが発動される。妖精の真後ろで・・・いつの間にあんなところに！？

ドオオオオオオオオオオオ！！！！！！

ピチューン

おなじみの撃墜音と共に妖精は倒れた・・・そういえば名前、聞いてなかったが・・・ま、どうでもいいか！

「ねえ魔理沙」

霊夢が私に話しかけてくる。どうかしたのか？

「氷色つてどんな色かしら」

・・・・・・はあ？



「どうもさつきから気になって仕方ないのよ。ねえ魔理沙はどう思うかしら？」

おいまさかそんなどうでもいいこと考えてぶっ放したのか！？・・・  
にしても氷色が・・・

「そうだな・・・水色の薄い色だとおもっぜ」

「・・・なんか違うかい？」

俊一 side

わー魔理沙もどうでもいい疑問に参加しているのを見て、なんかめんどくなってきたわ。

「そろそろ二人を止めよう。気になる場所も見つけた」

「ーどじやー」

そして信太は湖の先を指差した。

「向こうにある、紅い館だ」

Stage 2 氷精参上!! (後書き)

氷精

「おいバカーーー!!」

マッサー

「それはお前D A ー」

氷精

「あたいの名前ーー!!出してないぞ」

マッサー

「フッフ・・・それは伏線・・・」

氷精

「本当!？」

マッサー

「・・・かもしれない」

氷精

「うわーん!!」

Stage 3 紅色の門番（前書き）

（注）

一番最初に書きましたが、スペルカードルール？なにそれおい）  
y的な感じですよ。

マッサー

「この小説のめーりんは本気を出したら三面程度じゃ収まらないぜ」

美鈴

「わーい！」

フラン

「どれくらいなの？」

マッサー

「六面ボスでもいいよ」

レミリア

「なん・・・だと」

### Stage 3 紅色の門番

霊夢Side

「紅い館？」

私がそう呟くと信太は頷いて言った。

「この湖の向こう側の先に紅い館があったんだ。たぶんこの霧を起こしたのはあの館の住民だと思う」

ふむ……確かにね。私達は飛んで館の上空付近にやってくる。

「……間違いなさそうやな」

「ああ、そうだな」

? 俊一と魔理沙が何かに気付いたみたい。

「信太の言った通り、ここが目的地のようやで。霧を発生させてる魔力を感じるで」

ふーん……じゃあそうなのかしら……うーん……

「……? 霊夢どうかしたか？」

私が悩んでいるのを見てどうやら信太が声をかけてきたしまった。

「なんか何時もの調子じゃないが……いつもならすぐに突入しよ

うとするのに・・・」

「うーん・・・そうなんだけど・・・」

確かに勘は異変を解決するにはあの館に行けと言っている。しかし何か嫌な予感がするのよね・・・。

「（何か、この異変を利用してしている奴が潜んでいるような・・・）」

私の勘がそんな所まで言っているが・・・

「・・・ま、大丈夫よ。さ！あの館に入るわよ！」

「そうか、じゃあいくぞ」

細かい事を気にしていても仕方ないと思った私は目の前の異変を片付ける事にした。

【少年少女移動中・・・】

で、門の前にまでやってきたのだけれど・・・

「グー・・・グー・・・」

門番がいるわ。どこかの国の人のような服をしてるわね。

「寝てるんかいな・・・」

「門番失格じゃないか？」

きつと眠かったのね。ならさっさと通して欲しいけど・・・

「・・・・・・・・」

信太は先程から黙って考えている表情だ。そして私も正直簡単に通れるとは思っていなかった。

「・・・霊夢」

「了解、あなたも速く追い付きなさいね」

やっぱり勘の通り簡単には通れないようで、信太は気付いたようだ。そこで私は俊一と魔理沙にひそひそ声で話しかける

「（あなた達、いますぐ飛べる体勢になっておきなさい）」

「（え、ああ・・・）」

「（なんや、なにが起こるんや？）」

さってこっちは準備OKよ。信太、行って大丈夫。

コクリと頷いて信太は能力を発動させ、小型の刃物を出現させた。た。

バツ！

そして一直線に近づいていき、その刃物を門番に縦に斬ろうとした。  
・ここよ！

「行くわよ二人共！館に突入するわ！」

「うえっ！？まじかよ!？」

「ちよいとまてや!？なんで寝てたの起こす必要があつたんや!？」

あら二人は気付いてなかったのね・・・

パシッ!!!

「館には入れま「あいつらは先に入れさせてもらっぞ!」くっ!!」

バツ!!

バンツ!

最初の一撃は白羽取りで受け止められたけど、まだまだ信太の追撃のお陰で館には無傷で入れる事が出来たわ。

「おい！なんでわざわざ起こす事をするんだぜ！」

「・・・あの門番、起きてたんだけど。寝たふりをして私達を油断させていたの」

・・・

「「な、なんだってー!?!?」」

うるさいわぁ・・・館に入ったから静かにしてほしいはね。

「じゃあこれからは全員別れていきましょう」

「?なんでわざわざ人数減らしてばらばらになるんや?」

確かにこの館の人物がどれぐらいの力を持っているかわからない、  
だけどそれで何時までもまとまって行動しているわけにはいかない  
の。

「あのね、私達はそれほど平気だったけど、紅い霧はかなりの悪影  
響なの。人は苦しみ妖怪は狂う。早くしないと里が襲われてしまう  
の。だから急ぐのよ」

あの頭突き教師がいるからあまり心配はいらないと思うが、どちら  
にせよ早くした方がいいだろう。

「・・・わかったぜ」

二人は頷いて私の言った事を理解したようだ。

「それじゃ、片付けるわよ」

「「おう!?!?!」」

そう言って私達はそれぞれ別の道から館を探索し始めた。



美鈴Side

【門】

ガキイン!!

「くっ・・・」

カァン!!

「ぬ・・・」

私の拳と相手の刃はお互いを傷つける事なく、互いの攻撃を受け止めただけだった。なら・・・!

彩符「彩光乱舞」

スペルカードを発動させて相手の動きを制限させて攻撃しようとするも・・・

バツバツ!

「・・・」

相手は私の弾幕を避けてしまっている。やっぱり弾幕じゃ勝てないかな・・・

バツ!

霊符「斬形」

いくつもの刃を飛ばして攻撃してくる。相手もやっぱり使いますか・

「（仕方ないですね・・・本気でいきますか）」

フウ・・・

私は戦闘スタイルを変更させる。スベルカードではない、純粹的な格闘技で相手を倒す。

正直このスベルカードルール、あまり意味を成しているのか微妙ではあった。確かにこれで妖怪の欲求は多少満たされてはいた。

でも大きな力のスペカは大きな力がある。よって最悪死に至る。もっと改善出来ないのかなあ・・・

「（でもやっぱり私も妖怪ってことかな、純粹の格闘技の方が楽しく感じる）」

相手の子は私を警戒して様子を見ているだけである。攻撃するんだったら今でしたね・・・

「（賢太さんに聞いた技・・・試してみますか!）」

バツ!!

バキイ!!

「!」

ギリギリで防ぎましたか・・・しかしそのあとが隙だらけですね。

「ハッ!！」

バゴツ!

「ぐはっ!！」

ようやくまともな一撃が入った・・・どんどんいきます。

「・・・!！」

相手は今度は向こうから攻撃してきましたが・・・それは甘いです!

「（見真似）昇龍拳！」

バキイイイ!!

「がはっ!！」

見事に入りました。まあ、まだ立ち上がって来ると思いますが・・・

「・・・」

闘志が消えていません。相手も中々やりますね。さて、どうしますか。さっさと倒して中に応援に入った方が・・・

ドクンッ!

「!？」

・・・!？」

心臓が一回、大きく高鳴った。別に何かこの技を使った事でペナルティがあるとか、毒のある物を食べたとか、そんなことがあるわけじゃない。

高鳴った原因は・・・

「・・・賢太さん・・・？」

戦っている相手がいるというのに、私は後ろの紅魔館を見る。

嫌な予感がする・・・  
心臓がドグドク鳴っているのがわかる。

「まさか・・・まさか・・・！」

バツ！！

気付けば私は戦っていた事も忘れて、紅魔館の中に入って行った。

ダツダツダツダツ！！

向かう場所は一つだ。結界が張られている、賢太さんが休んでいる部屋だ。

きっと自分の気のせいだ、心配し過ぎて、勝手に嫌な予感がしているだけだ、と。

「はあっ・・・はあっ・・・」

息を荒くして私は賢太さんのいる部屋の前に来る。

そうだ、きつとこの部屋は開かなくて私の思い違いで終わるんだ。そしてもしかしたら賢太さんは起きていて、私が動かした事で内側から開けてしまつかもしれない・・・

「（それでも賢太さんが無事の確認なら・・・お願い！）」

私はドアのノブに手をかけて、ドアを開けようとする動作をする・・・

ガチャ

「っ！！！！」

ドアが開いてしまう。ということは誰かが・・・！

「賢太さん！！・・・！？」

その部屋にいたのは、静かに寝ている賢太さんと、

「・・・へえ、よく私がここに来ているなんてわかったね」

黒い服を着て、ふわりと浮かんでいる少女。そして、何か強力な力を感じる剣を持っていた。

「フフフ・・・まだ戦わないわよ・・・この部屋に来た理由は終わったから」

「！賢太さんに何をしたんですか！」

不気味に笑う少女。先程からひしひしと感じているがこの少女かな

りの力をもっている。

「私はただ彼に隠れている力を目覚めさせようとしただけ。目が覚めたら覚醒するんじゃない?」

「……この館に来た目的は?」

賢太さんだけに用があるわけが無い。どちらにせよ侵入者で倒さなくては……

「……別に理由は特に無いよ。ただ暇を潰せるかなあ……と思ったのよ」

「そうですか……」

話をしても無駄そうですね……ならば、さっさと片付ける!!

バツ!

ガキーン!!

「なっ!?!」

全開で行ったスピードに攻撃をしたのに、防がれてしまった。

「闇に消えなさい……」

キイイイイーン……

霊符「月閃」

バババババババツ!!!!!!

ガシッ!!ガシッ!!

「えっ!?!」

何かのスペカ宣言の後、私は引つ張られる感触を感じた。横には眠っているけど賢太さんもいる。

「逃げるぞ!!」

さつきまで外で戦っていた人です。どうやら後をつけられてしまったようです・・・

「わかりました!!」

私は賢太さんを抱えて部屋を飛び出しました。

【逃走中・・・】

特に追ってくる事は無く、無事に逃げる事が出来ました。

「ありがとうございます。私、この紅魔館の門番をしています紅美鈴です」

助けて貰った相手に名を名乗らない訳にはいけないので、名乗る私。

「俺は相澤信太・・・よろしく」

よろしくです。

「とりあえず私はこの方を安全な場所で守っていくので・・・好きに探索して下さい・・・ヒントは与えませんよ?」

「ん、ああ・・・それより、そいつは名前はなんていうんだ?」

あ、そういえば教えていないですけど・・・うーん、勝手に教えているものなんでしょうか?」

「えーと、海崎賢太さんです」

そう言った途端に信太さんは何か考え事を始めた。

「・・・迷惑でなければ、俺もそいつを守っていいか?」

はい?なんでこの人は見ず知らずの人を守るだなんて・・・もしかして、

「貴方は外来人の方なんですか?」

「それはわからないと言わせてくれ、説明するとだな・・・」

そうして私は信太さんの話を聞く事になった。

皆さん大丈夫かなあ・・・



Stage 3 紅色の門番（後書き）

マッサー

「もう流石にわかるんじゃないですかね」

黒い服の謎の少女

「そうねー。まあまだわかんない人もいるかもしれないからまだいいわよ名前はこれで」

氷精

「・・・グスン」

謎の少女

「あーそういえば作者が前回の後書きで泣かせたんだ。最低だね」

グサッ

マッサー

「グオ！」

Stage 4 大図書館（前書き）

魔理沙

「狩りだぜ・・・」

俊一

「おお・・・」

魔理沙&俊一

「魔導書狩りじゃあああ!!!!!!!!!!!!」

動かない魔法使い

「むきゅー!?!?!?!」

## Stage 4 大図書館

俊一 Side

さてどたどたと館を探索中や。途中洋風の服を着た妖精が襲ってきたけど振り返ちやで〜。

「探索つて言つても、別に物盗むわけじゃないんやけどな」

現在最初にいた階から階段で一つ降りたぐらいや。何かあるんやろ  
うか……

「……お、登り階段」

地下室でもあのかと思つたんやけど、ただの通路やつたんやな・

ババババババツ!!!

「うおっ!?!」

な、なんや!?!何の弾幕や!

「し、侵入者ですね!覚悟してください!」

目の前に人では無い翼を生やした人物が現れた。むむむ……言葉から察するにこの館の住民かいな。

「しゃーないな……でも好都合や」

この館では俺のマジックアイテムは使えそうだ。

ババババババツ!!

敵が弾幕を放ってくるが、返せないレベルじゃない。

「フォームチェンジ!」

ガギイン!

俺の声と共に先程まで乗っていた幕が姿を変えて、槍に変形する。

「な、なんですかそれえ〜!?!」

相手は非常に驚いているようや。ふっ、カッコイイやろ・・・

「はあっ!?!」

ガギイン!!!!

槍を高速で回転させ、バリアを生み出して弾幕を跳ね返していく。

「はわわっ!?!はわっ!?!」

慌てて跳ね返った自分の弾幕を避けていく。

「ふっ、おらあっ!」

槍を突くような感じで連続で突きを繰り返していく。勿論手加減して殺傷じゃないくらいにしてるで!!

ドオン！！

「キヤアアアアア！！」

お！手ごたえあり！仕留めたかな。これから先これぐらいなら楽なんやけど・・・

「ま・・・まだまだです！」

だよなー。異変を起こした主犯がいる館やねん。そう簡単にやられないか。ま、こっちもやられるきは・・・

「・・・・・・・・！！！！」

なんか聞こえるな・・・なんや・・・てこれはまさか！？

「い、いつたいなに・・・？」

悪魔っぽい女の子には悪いが言っている暇もない！！退散！！！！

「え、あ、ちょ「ダイナミックアタックー！！！！」ほぐう！？」

ドオオオオオオオオオオン！！！！！！

あーあ・・・やっぱりとんできたか・・・あの子に合掌や・・・  
てか、わいの活躍がとられた・・・だと？

「よ！俊一！無事だったか？」

そんな突撃して穴が開いた壁から出てくる魔理沙。お前は全くの無

傷かい！

「まあ無事やけど・・・どないしたん？」

「急に突撃したくなつた。後悔も反省もしていない」

最悪やーこいつ。まあ突撃した相手が敵やからいいけどな。

「そんなことより先に進もうぜ。さっきの奴を倒したんだからなか進展あるだろ？」

おお・・・魔理沙の言う通り大きな扉が！・・・わい、わざとらし！そんなどうでもいいことをしながらわい達は扉を開けた。

ガチャ

「・・・・・・・・おおっ！」

「・・・・・・・・すげえ！」

扉の先にはとてつもない量の本の数が！しかもこれは・・・！

「魔理沙！魔導書もあるぞ！！」

「こつちもだ！！たくさんあるぜ！」

こんなにたくさん本がある場所があつたなんて・・・これぐらいあるなら、

「何冊か持って行つてもええよな」

「さーてどれにしようかな・・・」

おおさつそく魔理沙は手ごろな魔導書を選びはじめとる。わいもテ

キトーに……

「もっていかないでー」

「借りてくぜ」「

見事にシンクロしたわい達。フツ、息ぴったりやな。……ていうか誰や？

「紫色のお化けか？」

「せめてそこは妖怪と言ってやれや」

確かにもしかしたらお化けかも「お化けじゃないわよ」……本人が違うと言ってるならお化けではないな。妖怪は否定せんかったが。

「えーと……目の前の黒い者達を撃退する方法は……」

黒い……ゴキやないんだからそんな言い方すんな。

「……燃やすにかきるわね」

なに……！ゴキを燃やすと多分臭いが充満して……てそんなボケかましてる場合じゃあらへん！

「来るで魔理沙！」

「わかつてる！」

火符「アグニシャイン」

ボボボボボボボボボッ！！！！！！！！

炎のような弾幕をとばしてきた。しかもこの感じ……

「……へえ……素人じゃないのね」

全ての弾幕を避けきったわいたちはわかった事を話あった。

「俊一、あいつはやっぱり……」

「ああ。魔法使いや！」

わいら人間の魔法使いやなく、妖怪の純粋な魔法使い。

「（アイツの他にも見れるなんてな……しかもかなり強そうや）」

魔法使いに関してはアイツにいくらか聞いて知っている。わいら二人でも勝てるかどうか……だが、勝敗はゼロやない。

「……アンタ名前は？」

「侵入者に名乗るのもどうかと思うけど、名乗っておきましょうか。あなた達、魔法使いのようだし」

さすがに気づいたか……

「私はパチュリー・ノーレッジ。知っての通り魔法使いよ」

妖怪の魔法使い。それは生まれつきの種族として生まれたのか、何らかの影響でなれたのか、このどちらかだ。もっとも知ってる知識ではこれくらいしか知らないわけで、本当はもっとあるのかも知れないが、今はどうだっていい。



「私は霧雨魔理沙。こっちは桜井俊一だ。ここに来たもくてきは・・・」

「この異常な紅い霧の原因を探りに来たんや。なんかしつとるか？」  
まあ恐らく、わいらの勘が正しければ・・・

「そうね、霧を起こしたのは私よ」

やっぱな・・・だろうと思った。

この紅い霧はどこか魔力的な何かを感じてたんや。だったらこの異変のボスは魔法使いやと思ったんや・・・

「言っとくけど私が主犯じゃないわよ。私は協力して霧を起こしただけ。文句なら私の友人に言っ頂戴」

ん・・・？意外に戦う気はないのか？そう疑問に思っていたら魔理沙が部屋を出ようとしていた。

「お、おーい魔理沙？」

そんなあっけなく立ち去ろうとしている魔理沙に疑問を感じるんやけど、すぐにその疑問は解消された。

「そうか・・・じゃ「待ちなさい」・・・」

呼び止められてしまった・・・気づかれたか？

「その隠してる私の魔導書・・・置いていきなさい」

「」  
「」  
「」

わいと魔理沙はみつめあってアイコンタクトをした。

「(に・げ・る・ぜ・!)」

「(了・解・!)」

バンツ!!!

扉を勢いよく開けて逃げようとする・・・だがそれはできなかった。

「フラン、そっち行ったわよ」

「はい!」

何か強烈な弾幕が迫ってきて・・・

「魔理沙!!危ない!!!」

「え・・・?」

バツ!!

ドゴオオオオオオオオオ!!!

わいがとっさに魔理沙を突き飛ばした所で、一瞬意識が・・・そんな状態で見たのは、

「ははっ、あそぼ?」

無邪気そうで、かなり危険がありそうな存在がいたことだった。

Stage 4 大図書館（後書き）

パチユリー

「次の出番で本気出す・・・のよね？」

マッサー

「・・・多分」

パチユリー

「・・・はつきりしなさい」

時止めメイド

「あ、次は私ですね」

霊夢

「ひねりつぶしてやるわ!?!」

**S t a g e 5 時を操りし者(前書き)**

この小説の紅魔館の住民はあまり好戦的ではありません。  
フランも自重はしていきます。

## Stages 時を操りし者

霊夢Side

「……………」

何かしらね……この館、何か別の力を感じる。最初に感じてた勘は気のせいじゃなくて、本当に何か起きようとしていること。

「（どつちにしろ、今は紅い霧を消す事を優先すべきね）」

どちらも異変解決に致る事ならば、原因にぶち当たるだろうと思っ  
た私は探索を続けていった。

「……それで、何時まで私を見張ってるつもりかしら？」

さっきから私を誰かが見ている感じだったのよね……それも結構な  
実力を持っていそうな。

バツ！！

「っ!？」

声の反応が無かったから続けて声を出そうと思ったけど、刃物のよ  
うな物が飛んできた。……急に現れたみたいだ。

「甘い！」

刃物を掠りもせずには私は完璧に避けきる。

「・・・なるほど・・・貴方が博麗の巫女というわけですか・・・」

刃物を完全に避け終わった後、誰かが私の前に現れた。この刃物の攻撃もこいつね。

「今の不意打ちでやられない所を見ると、どうやらそのようですね」

「刃物の扱いには慣れてるのよ」

よく信太の能力で生み出した刃物を避けてるからなんとなくわかるのよね」。

「そういう問題ではないと思いますが・・・」

あーなんか勘違いされてそうだけど、別にどうでもいいからいいわ。

「それより、このはた迷惑な霧を生み出しているのは貴方かしら？」

「いいえ。私ではありません」

うーんこいつでもないかー。

「じゃあ誰かしらね？」

「さあ？存じません」

こいつとぼけてるわね・・・フルボッコにして聞き出そうかしら・・・

「出来れば教えて欲しかったな」

「ですから私はご存知ありません」

こいつ意地でも教えないのね・・・ならしょうがない。

「そ、じゃあ私は適当に探索するから」

「そうですか。なら私はお掃除をしますね」

・・あら、止めないのかしら・・・あーなるほど。

ヒュン！！

カァン！

私はおはらい棒で刃物を弾く。

「その棒、一体何で出来てるのかしら？ナイフを弾くなんておかしくない？」

「知らないわよそんなの」

なんか昔から伝わってる博麗の巫女のおはらい棒らしいんだけど・・・細かい事はよくわからないわよ。

「一応聞くけど何故刃物を飛ばすのかしら？」

「あら、わかってるなら答えなくていいのよね？」

そうだけど万が一わからない人の為に言いなさいこのP A ( r y

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

「何か言ったかしら・・・」

「何も言っていないわよ」

なんという威圧・・・禁句のワードを思ってしまったようね・・・

「そうそう、お掃除しなくちゃいけないのよね・・・」

うわーこの世とは思えない顔ね。こんな奴とは戦いたくないわー・・・

「邪魔な紅白を片付けなげやー!!」

・・・しょうがない、まだ未完成だけど、アレを使うか・・・

## 咲夜Side

私は十六夜咲夜。今は紅魔館のメイドをやっている。元々家事等は得意だったし、別に困る事はなかった。

そもそも何で私が紅魔館、もとい幻想郷に来てしまったのか。それは幻想入りした夜の日に起こった。



その前に私の事を説明しよう。

私は賢太のような平穏な日常を過ごしていたわけじゃなかった。

私は【殺し屋】だった。その存在を知ったのは十歳のころだった。

私の両親も多分これが関係してないんだろう。

当時の私には二つの衝撃な事だった。

もうかなり小規模な軍団だが、その中でも私は一番の実力を持っていた。それは恐らく、私の生まれて持っていた能力があったからだ。

### 【時間を操る】

これがあったから私はトップクラスの実力を持っていた。

だから私は皆と一緒に笑う事なんて出来なかった。だから皆から去ろうとしたんだけど・・・

『お前が何を考えて何処に行こうとしているのかはわからない。けど、孤独になる事はきつと後悔するよ』

彼の言葉が、私の心に響いたのだ。

『咲夜がどんな人だろうと、俺は受け止めるよ』

幼なじみの、正由、宮藤正由の言葉に当時の私は救われたの。

彼は意識不明の事故に見舞われて助かる見込みは少なかったのに、見事に復活して私に暖かい言葉を言ってくれた。

とっても嬉しかった。正由は私の事を信じてくれて、わかってくれることが。

だからこそ、あの時の事がわからない。正由が、何か隠し事をして  
いる事が・・・

私が十九歳ぐらいの、幻想入りする日の夜。殺し屋に妙な事が起こ  
っていたのを調べようと私は調査していた。

私以外の者が全員行方不明になって帰還していないのだ。しかも、  
行方不明になった場所はほぼ同じ場所で同じ時間ぐらいに。

そうして私は原因の場所へとやってきていた。

『・・・・・・・・』

特に不自然な所は何も無い。桜の木は満開に近い九分咲きぐらいで  
綺麗に咲いているし、人は全く歩いておらず、風が涼しい。  
夏になつてるから夜は涼しいのは嬉しいのよね。

『・・・・・・・・!?!』

桜が咲いている!?!どうして!?!今はもう夏。桜の咲く季節じゃな  
い。しかも昼間来た時には咲いてもいなかった。

『・・・・・・・・!?!』

よく見れば普通の桜とは違い何か不思議な力を感じる。何時何が来  
てもいいようにナイフを構えながら、様子を伺う。

ピカーン!!

桜の木が大きく光輝いたと同時に何かが出現していた。私はそれにナイフを投げ付ける!

カキーン!!!

『!?!』

しかし投げたナイフは全て弾かれてしまう。だが私にはそんなことより、驚くべきことが目の前にあった。

『え……?』

桜の木から現れたのは私のよく知る顔だった。

長い髪の毛を一本にまとめて延ばしていて、顔立ちは女性のように、男性には決して見えない。そんな人物が刀を持っている。

『そんな……どう、して……』

『……』

その人物は静かに佇んでいる。何か人形のように。

ズバアツ!!!

『え……』

酷く驚いていたのが原因だった。普通の時でも攻撃がわかったかわからない。

斬られていた。肩から血が流れているのがわかる。

なんで?どうして?

『どう、してなの、正由・・・』

『・・・・・・・・』

そう、その人物は正由だった。なんでこんなことをするのかわからない。

静かに正由はこちらに歩いて来る。逃げる気力を失った私はもう座り込んでいる事しか出来ない。

涙が小さく流れていた。もう正由は近くまで来ている。このまま何をされるかわからない。私は静かに目を閉じた。

『全く。世話の焼ける由ちゃんの幼なじみちゃんだね』

バンッ!

かなり懐かしい声がしたと同時に拳銃音が聞こえた。

見ると正由はいなくなっていて、代わりに誰かの後ろ姿が目についた。

『咲ちゃん、由ちゃんの秘密、知りたい？』

秘密？というよりなんで私の名前s 『答えは聞いてないんだけどね』！？

『な、なに・・・？』

急に私は光に包まれていた。何か身体が薄くなっていく感じだった。

『説明している時間はないの。真実は見極めなさい・・・そして・・・』

『！あ、貴女は！？』

小さい頃の記憶で殆ど記憶無いけど、正由の姉の・・・

『幻想の地の、本当の幸せを皆で掴む為に、行きなさい・・・』

そうして私は紅魔館に屋根から激突して仕える事になった。

元々この館は料理を上手く作れる方や掃除も上手くはない方ばかりだったので、能力も有効活用してここで働く代わりに住めるようになった。

私以外には館には人間がいない事を驚いた事は驚いたけど、あまり変わらないなあと思った。

ここ、幻想郷で何かがある。正由にも、そして、私達が五歳頃に行方不明になった、宮藤雅美さんにも！

### 【現在】

そして今紅い霧を生み出した事で異変を解決しに来た博麗の巫女が今日の前にいる。

しかもなんか失礼な事を考えたような気がするのよねえ・・・

ナイフを持って近距離での攻撃をしようとしたんだけど、巫女に動きがない・・・

ドクンッ！

！私はこの時何か非常に危険だと心が告げていた。何が起こるかわからない。それでも何か自分にとって危険な事が起きようとしていた！

ならば時を止める！

「幻世」ズ「そおい！」「じぶう！」「

巫女は結界を投げ付けていた……って結界を投げるってそんな事が可能なの!?

「あ、成功ね」

しかも初めてなの!? 舐められたものね……  
くっ……できればさっさと片付けたかったのだけれど。賢太の部屋の結界が破られていることにさっき私は気付いた。開けたのではなく、破られた。それが気になっているのだ。

「さあどんどんいくわ……!」

私の後ろの方で威圧感を感じる。それは巫女にも感じとれたようだ。

この感じは……

「ダンスパーティーは……ここかしら?」

この紅魔館の主である、レミアア・スカーレットであった。

Stages 時を操りし者（後書き）

咲夜

「べ、べつに・が大きいければ嬉しがるかと思ったからとか、そんな事を思っていないながらしているわけじゃないわよ！」

マッサー

「なにに？どこが大きいと・・・ピチューン

賢太

「ま、まあ、正由さんも男だから胸は大きいと喜ぶかもしないすけれ・・・ピチューン

パチューリー

「（ちなみに・・・レミィぐらいの超絶h）むきゅー！！！！



Stage 6 運命と破壊の吸血鬼(前書き)

小悪魔

「私……壁に埋まったまんまで……誰かHELPですう。」

## Stage 6 運命と破壊の吸血鬼

「だんす？ぱーてい？」

一瞬たんすぱーていって聞いて聞こえたわ。うん、意味不明。

「・・・お嬢様」

ん？・・・お嬢様、てことは・・・

「あんたがこの異変の主犯かしら？」

「ええ、そうよ。そう思っただけで構わないわ、博麗の巫女」

ようやく親分の登場ね。よしぶっ飛ばすわ。

「この迷惑な霧をどうにかしてくれないかしら？」

「なんで私が人間の言う事を聞かなくてはならないのかしら？それに素敵でしょ？」

何処が素敵なのよ。悪趣味以外のなにものでもないわ。

「迷惑極まりないからよ」

「知らないわよそんな事」

この妖怪・・・うざ。

「さて・・・踊りあうのにこんな所は失礼な事ね」

ん？妖怪が動きを見せたわ。

「せっかく外は素晴らしいステージになっているのだから・・・」

バツ！ピカッ！！！

妖怪が何かを上投げたと同時に光が大きく輝いた。

目を開いた先には私は上空を飛んでいた。

「外で殺りあいましょう？」

魔理沙 Side

「俊一！？無事か！？」

「まあ、なんとか・・・無事・・・かな」

そう言っているが身体中から流れてる血は止まってない！くそっ！  
私が油断したばかりに！幸い命に問題は無い傷だな・・・

「ふふふ・・・壊れてないんだ！凄い凄い！」

この少女、見た目はあれだがかなりの實力を持った妖怪だな・・・  
なんとかして勝つ方法を・・・

「さあそつちの白黒も・・・アソボ？」

ゾクッ！！

私は殺気や威圧感で恐怖を感じたのは初めてだったと思う。

怖い・・・今すぐここから逃げたい・・・そんな事まで思ってしまった。  
う。

私の馬鹿！！こんな危険な事ぐらい家を飛び出した時にわかっていたはずだろう！

そう思っただけでも震える身体は止まらない。駄目だ・・・もう「魔理沙」そんな私を見てなのか、俊一が話しかけてきた。

ブシュー・・・

「しっかり・・・せや。異変を解決して、有名になるんやろ？」

俊一は立ち上がろうとしている・・・っておい！？

「俊一無茶すんなよ！血が吹き出して来てるぞ！」

それでも俊一は自分のマジックアイテムの箒を杖がわりに使って立ち上がるうとしてしている。

「こんな程度で・・・負けられへん・・・」

ついには杖無しで立ち上がっていた。

なんで・・・立ち向かえるんだろぅと思った。

「わいは・・・昔は本当に気が小さい方やった・・・今じゃそんなか  
けらもないんやけど・・・」

そんな私の心に答えるように喋っていく。確かに幻想郷に来たばかりの俊一はそんな感じだったような・・・

「そんな小さな頃・・・いつも励ましてくれてた人が言ってた言葉が・・・あるんや」

『信念を持って、突き進め』

この言葉を聞いた瞬間私はハッ！とした。そうだ、決めてたじゃないか。私は人間のまま大魔法使いになるって。

「フォームチェンジ・・・」

私の表情を見て大丈夫だと判断したのか、俊一がマジックアイテムの箒を槍へと変形させた。

「禁忌『レーヴァテイン』！」

「雷符『ライトニングレーザー』」

あの妖怪と俊一のスペカが同時に発動された。片方は紅き剣、もう片方は黄色い光線。

ドオオオオオオオオオン！！！！！！！！！！

結果は相殺されて爆発。俊一の方が若干押されていたが、爆発した

ので問題はなかったが。

「うふふふ・・・」

「バツ！！ピカッ！」

まぶゆい光と共に私は目をつぶってしまふ。そして目を開けると・

・

「うおっ！？なんで外にいるんだ！？」

私は外に飛んで浮かんでいた。

「魔理沙？なんであんたがいるのよ。まさかこれ、あんたがしたの？」

「私じゃねーよ」

「霊夢もいたのか！・・・俊一は何処だ！！」

「あのお兄さんならきつとパチュリーが治してくれると思うよー！」

「なんだそうかー。・・・て、さっきの奴が！？しかも別の奴がいるぜ！？」

「さあ踊りましょう人間？私の名はレミリア・スカーレット」

「私はフラン。フレンドール・スカーレット！」

「紅き吸血鬼の力・・・思い知るがいい！！！」

吸血鬼だったのか・・・だが、

「はっ、なめんじゃないわよ。いくわよ魔理沙！」

「おうー！」

私の中の恐怖はすっかり消えてしまっていた。

パチュリーSide

「・・・・・・・・」

今は気絶しているこの少年・・・確か俊一だったかしら。俊一がさっき言った言葉・・・

『信念を持って突き進め』

あの言葉はまさしくあの人が言っていた言葉。偶然とは考えにくい。この紅魔館を・・・レミィとフランを、私達を助けてくれたあの人の言葉を・・・

なんでこの少年が知っているのかしら・・・

「パチユリー様、ご無事です・・・!?!?」

咲夜がやってきたわね・・・?驚いている様子だけど、

「どうかしたの?」

「い、いえ・・・別に・・・」

首を傾げながら倒れている少年に疑問を感じているのだろうか?

「知ってるの?」

「いえ・・・他人の空似かもしれないですし・・・」

まあ今はそんな事どうだっていいわね。今それほど余裕ないし。

「咲夜。賢太の部屋の結界を破った奴を探しに行くわよ」

「はい!」

私の結界を破る奴がまだこの館内にいる。これじゃ、かなり危険かもしれないわね・・・全員無事ならいいけど。



霊夢 Side

「天罰『スターオブダビデ』!」

「禁忌『クランベリートラップ』!」

二つのスペルカードが同時に発動して私達に襲い掛かってくる。流石姉妹というべきかしら。息がピッタリ過ぎる。

それにしても・・・

「おっと、はっ!」

魔理沙もやるわね。私と同じように弾幕を避けながら反撃している。弾幕ごっこの才能あるかもしれないわ。

「よそ見をしている暇があるのか!」

ガキーン!!

「あるけどしてるけど?」

「ふっ!なめるな!」

レミリアの爪をおはらい棒で防いで弾く。本当にこのおはらい棒はすごいわねえ。

「うふふー・・・まてまてー!」

ブウンー!!

「あぶねえ!?!」



フランドールのスペカ宣言が聞こえたと同時に私に攻撃して来たフランドールをおはらい棒で弾きながら距離をとる。急にスピードが上がったのかしら？

「くくくふふ・・・」

ドオオオオオオオン！！

ドオオオオオオオン！！

ドオオオオオオオン！！

三つの鋭き弾幕が私に迫ってきていた。しかもかなりの速さで。これは流石に避けられないわね・・・

「夢符『封魔陣』」

ガアアアアアアアン！！！！

弾幕は陣を張ってなんとか受けずにすむ。それにしてもこれは・・・

「四人になってやがるぜ！？」

魔理沙の言う通り、フランドールが四人になってる・・・これはさっきのスペカの効果かしら。

「どう？驚いた？」

四人から一人に戻ったフランドールは無邪気な子供のように笑うその顔は楽しそうである。

紅符『スカーレットシユート』

ゴオオオオオオ！！！！

「あぶねえええ！？」

一点の鋭き弾幕が魔理沙に向かって発射されていたが、魔理沙は避ける事が出来ていた。

レミリアもまだまだやる気ありのようね。

「くつくつ・・・やるな人間。まさかここまで楽しめるとは・・・」

「すっごく楽しいよ！」

どうやら楽しんでくれてるようね。ま、負けるわけには行かないけどね。

「だが勝ちをもらうぞ！」『レッドマジック』！！」

「いつくよー！秘弾『そして誰もいなくなるか？』」

大量の弾幕密度これが最後の攻撃かしらね。

「霊夢、フレンドールは私がやる。お前はあのレミリアを任せていいか？」

大きく出たわね。ま、信じてみましょうか。

「あら、いいわよ。互いに終わりといきましょうか！」

「おっ！・・・」





倒れていたレミリアがフランドールを止めようと声をかける・・・  
何かやばいのかしら？

「・・・きゅっとして・・・」

ゾクッ！！！！

私の勘があればヤバイと告げている。だが今から攻撃して間に合うか！！

「ドカー【ズバアッ】・・・エ？」

結果的に嫌な予感の外れてくれたが、目の前にいるフランドールは血を吹き出していた。

「・・・ア？」

フランドールはゆっくりと後ろの方を見る。

「ナン・・・デ？ケ・ンタ・・・」

ドサッ

フランドールはそのまま倒れてしまった。

「なん・・・だと！？お前、どういっつもりだ！！何故フランにこんな事を！」

レミリアも驚愕な表情だ。そんなに驚愕な事なのね・・・

「……………」

対してこいつは無言のままこちらを睨みつけるようにしている。吸血鬼である彼女を何処から落ちてきたかわからないけど、手刀の一撃でここまでやるなんて

全身が黒っぽい……いや、黒ずんだ服の色をしている。更に目の色が赤……いや、血の色に近い。

「あんだ、何者？」

邪悪な力を持っていて、しかも殺意を剥き出しにしている……危険すぎるわ。

「拳が血ヲ求メテイル……………」

そう言つて拳を構えて標的を私達へと変えてきた。

でも何か……完全な邪悪に染まってるわけじゃなさそうね。勘だけだ。



Stage 6 運命と破壊の吸血鬼（後書き）

アラス

「なにー！？もう〇意の〇動k【バキバキー！】アダーー！？」

勇儀

「ネタバレは自重しようかアラス」

アラス

「ヤメテー！ー！アッー！！」

マッサー

「はい、私の黒歴史小説を読んで下さった方、あるいは予想していた方もいると思いますが・まあ、こんなもんです」

レミリア

「ちょっとフランはー！？」

霊夢

「私の勘で死亡フラグは回避してるわ（多分）」

レミリア

「心の声が不安でしかないわよ！」

Stage EX 1 闇の妖怪（前書き）

フラン

「EX1？」

マッサー

「話じゃ収まらなかったぜ！」

## Stage EX1 闇の妖怪

信太Side

俺はとりあえず美鈴と共に賢太を守りながら館を歩きまわっていた。いつさっきの少女が現れるかわからないので、慎重に行動していた。

途中この館の住民の小悪魔が壁に埋まっていたのを発見したので助けて事情説明した。その時泣いてお礼を言われた・・・そんなにか？ まあそれはともかく、事情が事情なので小悪魔にも俺達に同行してもらおう事にした。

「やっぱり・・・何か変です」

「ええ・・・そうですね」

美鈴と小悪魔が何か違和感を持っているようだ。

「最初は何も思わなかったですが、ここ、妖気が充満してます」

「しかも私達の知らない誰か・・・うう・・・怖いです・・・」

やはりあの少女が何かしているに間違いはなさそうだ。

さてこのまま三人に、気絶してる賢太を連れてるのはあまりにも危険になってしまう。そろそろ誰かと合流したいけど・・・

「・・・あ！咲夜さん！」

「パチユリー様!!」

どうやら主力の住民達と合流したようだ。よし、これでなんとかなるかもな・・・

「・・・・・・・・？」

・・・ん？合流した内の一人・・・えーと睽夜って人が俺を見ている。なんだ？

「・・・！？あ、あなた、まさか！？」

突如として大きな声で俺を見ながら叫んでいた。・・・まさかこの人も・・・

「信太・・・相澤信太君？」

どうやらこの人も俊一のような人らしい。俺を知ってるようだ。

「あんたも俺を知ってるってことは・・・俊一と同じで俺を知ってるのか？」

・・・あ、噂をすればじゃないが俊一が倒れてるよ。

「・・・・・・・・？どういこと？」

ああ、面倒だな・・・

「俺は記憶を失ってるみたいなんだ」

【少年説明中・・・】

「そう・・・なるほどね」

咲夜はどうやら話を聞いて納得をしたようだ。物分かりよくて助かった。

「確認の為聞くけど、身体に異常はないのね？」

「ああ、特に何も無い」

それだけ聞いて咲夜は俺の事について聞くのをやめた。

「んおっ!？」

お、俊一が目覚めた。傷はパチュリーが治したそうなので、問題は全くないそうだ。

「・・・あ？」

「・・・」

咲夜が苦笑して俊一は呆然としている。

「・・・お久しぶりね、俊一君。咲夜よ」

やっぱり知り合い同士か・・・俊一の反応は・・・

「ふおおおっ!?!?咲夜さんやないか!?!?なんでおるんや!?!?」

うわあ随分と大きな声でまあ・・・

「しゅ、俊一君・・・なんというかその・・・随分印象変わったわね・・・」

「あー・・・まあこれにはちょっと事情があつてやな。こうなつちまつたんや」

そんな印象が違かつたのか？

「てー・・・そこで寝とるのは賢太か！？なんでこいつもここにおるんや！？」

ああもうギャーギャーうるさいな・・・二度も説明めんどいです。

【少年再度説明中・・・】

「はーなるほどなー。それじゃ魔理沙と霊夢とこの館の主の吸血鬼姉妹が戦つてると」

そうそう。外が騒がしいのはその為だ。

「んでわいらは謎の少女を探してどうにかするんやな」

そうそうだいたいあつてる。

「でもなんでわいらの力も借りるんや？わいらはここに異変を解決に来たんやで？それに応援しないでいいんか？解決されるでー？」

あーそういえばそうだ。なんでだ？

「ま、ぶつちやけ異変を起こさなくてもよかったのよね」

・・・え？

「どういうこと？」

「本来の目的は、異変を起こす前日に、その男・賢太のおかげで達成されたからよ」

へーそーなのかー。

「じゃあ何故異変を起こしたんだ？」

「・・・暇潰しじゃない？」

「「あ、そう」

暇潰しなら仕方ないな。

「ふ、二人共それで納得なのかしら？」

咲夜がそんなことを言うてくるけど・・・ここじゃそんな理由でしかないような気が・・・

「う・・・うう・・・」

「あ！賢太さん起きそうです！」

ナイスタイミングだな。どんな反応をするのか・

「う・・・うう・・・うう・・・」

何か・・・うなされてる？

「大丈夫ですかー？」

美鈴が耳元で声を掛けている。

「うう・・・うウ!!」

！雰囲気・・・！

「ウウ・・・ウオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!」

ドゴオオオオオン!!

突如として立ち上がった賢太は天井に穴を開けて飛んでいった。

「賢太さん!?!?! 追いかけましょう!!」

美鈴に続いて俺達も後を追いかけて行った。

【屋上】



「賢太さん!？」

飛んでいって出た場所はどつやら屋上のようだ。

「……………」

静かに賢太は俺達に背を向けている。向こうは霊夢達がいる方か!

「行かせない」おっと…通さないわよ「!」

ゴオオオオオ!!

闇が行く手を阻んできた。どういうことだ…

「お前は……………」

「ふふつ……………」

賢太に何かしていた少女だ…………あの時何かしていたな。

「あなた…何者？」

「私はルーミア。闇を操る能力……………」

そう言ってルーミアは空間から剣を出現させ、こちらに向けてきた。

「お前…賢太さんに何をした!」

「別に何もしてないわ。ただ私はきっかけを作っただけなの」

きっかけだと・・・？

「こいつはね、闇と似たような力を持っていたのよ。私はその力を開放させてあげた・・・それだけ」

闇・・・それがあれなのか？

「賢太さんにそんな力が・・・？」

美鈴が驚きの表情をしている。

「こいつ自身がそれを知っているかどうかは知らない。けどせっかく見つけた闇だもの・・・目覚めさせてあげたかったのよ・・・ふっ・・・楽しいじゃない？知り合いに殺されそうになるなんて」

ガキイイン！！！！

気付けば美鈴は拳を前に突き付け、ルーミアは出現させていた剣で防いでいた。

「貴様・・・！」

「あらあら・・・」

む・・・賢太が飛び降りようとしている！

「止める！」

俺と同じ事を考えていたのか、俊一も動いていた。

「……闇に呑まれなさい」

グワアアアアアア！

「ぐっ！」

闇の何かが行く手を阻んでとてもじゃないが間に合わない。

ザッ！！

「ぐあっ！」

「貴方の時止めはやっかいただけねど……止められなければどうにでもなるもの」

咲夜が肩から斬られた傷から血を吹き出す。

「獲物を見つけたみたいねー。狙いは吸血鬼の妹かしら？」

まさか、今下でいるのを賢太は狙っているのか！

「くそっ！」

こんな闇の壁なんて気にしてられるか！！！！

「お、おい信太！」

ゴォン！

俊一の言葉を無視して闇の中に入っていく。

ドクンッ!!

ぐっ!?!なんだ、いきなり……

【俺は一体何者なんだ?】

そんな事今はどうでもいいだろう!なんでそんなことを……

【幻想郷へ来る前に……俺は何をしてたんだ?】

駄目だ……走れない……頭がぼおーとして……

ガッ!バシヤア!!

「うわっ!!!」

誰かに掴まれて俺は闇の中から飛び出していた。

「無事ですか?」

「あ、ああ……」

美鈴だった……て賢太がいない!もう降りてしまったのか!

「あの少女と戦うなら、今の闇に気をつけてください。取り込まれたらアウトと思っていいでしょう」

そう言っつて美鈴はルーミアの方を見ていた……いや睨めつけてい

ると言っても過言ではない。

「パチュリー様、今すぐお嬢様達の方へ。今の完全な闇に取り込まれていない賢太さんの拳では、誰も死にませんが・一応お願いします」

「・・・わかったわ」

そう言つてパチュリーは下の方へ降りて行つた。

「行かせると「行けますよ」！」

ガッ！

パチュリーの動きに合わせて美鈴も動いていた。ルーミアの攻撃しようとしていたのを止めていたのだ。

「本当なら貴方は今すぐぶっ飛ばしてやろうと思いましたが・・・ですが、今は賢太さんを止めるのが先。貴方はその次です」

美鈴もパチュリーに続いて飛び降りようとしていた。

「一つ・・・言っておきましょう。私の友人達に手を出したら・・・私は貴方を殺します」

バツ！

美鈴は屋根から降りて行つた。

さて・・・やれる事は決まったな。

ガキイン!!!

俺の中で一番使いやすい・・・ナイフぐらいの大きさに刃を具現化させる。

「おい、信太!？」

「俺達に今出来る事はこいつを消耗させる事だ!!少しでもしていれば、霊夢達が楽になるだろ!」

それを聞いて俊一も納得してくれたのか、武器を構えた。咲夜も、小悪魔も。

「小賢しい!消してやるわ!」

あれ・・・俺ってナイフって言葉知ってたか・・・?

StageEX1 闇の妖怪（後書き）

マッサー

「カリスマすげえ美鈴」

レミリア

「私のカリスマはどうしたのよ！」

マッサー

「か・り・す・ま」

レミリア

「その手はくわないわよ……!……!……!」

**S t a g e X 2 信念を持って突き進め！（前書き）**

美鈴

「この小説は技を色んな所から仕入れてます」

マッサー

「美鈴TUEEEEEEE！」



Stage EX 2 信念を持って突き進め！

レミリアSide

フランが賢太の拳によって倒れた。いや、拳と言っているものかわからない。

何より明らかに賢太の様子がおかしい。前に私は対峙した事があったが、全く違う。あれほどの殺意を向けられた事はない。

「……………クロス」

「…………一筋縄ではいかなそうね・魔理沙、いける？」

「あ、ああ、なんとかな」

二人の人間はどうやら立ち向かうようだ。  
待て…………私も…………

「心配は無用よレミイ」

「うわっ！？パチエ！？」

いつの間にかパチエが後ろに来ていた。それにフランを抱えて。

「レミイもそこに座って大人しくしてて」

「しかし賢太は…………それにフランを治せるのか！？」

考えたくないが、さっきの攻撃は吸血鬼でも治してくれるのかわからない、闇の一撃を持っていたような・・・？

「あれ・・・治ってる？」

「うん？私がどうしたの？」

見ればフランの傷は元通り塞がっていた。というか意識取り戻してるし！？

「私最初から意識手放してないよ？お姉様」

なん・・・だと？

「もし・・・賢太が100%取り込まれていたら、吸血鬼のフランでも危なかったでしょうね」

「うん・・・でも賢太、謝ってた」

その言葉から察するに、恐らく賢太はまだ完全になってはいないようだ。

「ま、ここは美鈴に任せましょ」

「な、なぜその名前が出てくるのよ!」

美鈴ではたして敵う相手かどうか・・・

「大丈夫ですよお嬢様。負けませんから」

気付けば美鈴が、人間達のすぐ前にいた。

そこで何か人間と話していたようだが、すると人間は紅魔館の屋上の方へ行ってしまった……。

「ねえパチエ、今あそこで何が起こってるのかしら？」

「館に紛れ込んでいた強き存在……今、咲夜達と侵入者が協力して戦ってるわ」

く……ならば加勢に行った方が！

「レミイとフランはここで見てなさい。加勢に行くのはそれから……終わっていないからだけけれど」

「何故？」

私達二人の傷はもう自己回復でもう回復しきっている。なのに何故……

「ちょうどいい機会だし、美鈴の強さをしっかり見るチャンスよ？ 本気を出すなんて珍しいから……」

美鈴が……本気？

確かに美鈴が本気……しかもこれほどの威圧感も感じた事がない。

「これが……めーりんなの？」

フランも驚いて美鈴の方を見ている。

「驚くのも無理ないと思うわ・・・でもま、二人が子供のころから門を守っていたのだもの。実力がなければ務まらないわ」

だがそれでもこんなに凄いものなの!?

「今回は少し・・・美鈴は怒ってるのと・・・賢太を絶対に助けようとしてるわ。心配はいらない」

私が五歳くらい、フランが赤ん坊の時くらいで・・・しかも記憶がはつきりしてる時にはもう美鈴やパチエ、小悪魔や古株のメイド妖精がいた。

親はいない・・・らしい。

「美鈴はある人の言葉を糧に修業してきた。それが今の美鈴」

でも・・・何か私がつっても悲しくて、泣いてた時、どうしよもなくわからない時、誰かが私の頭を撫でて何か言っていた気がする・・・

『君の両親を殺した人間達を恨むな、とは言わないよ。でもこれだけは覚えといて』

まるでお母さんとお父さんのような人のように・・・

「ねえ、パチエ、その言葉って・・・」

私は頭に浮かんだ言葉を口に出した。

「『信念を持つて突き進め』・・・だったかしら・・・」

パチエは微笑しながら頷いていた。

美鈴 Side

ガッ！バキッ！！

迫ってくる賢太さんの拳や蹴りを受け止めながら考える。

「・・・・・・・・クロス」

私は闇に取り込まれた賢太さん・・・いえ、

「（あのルーミアに無理矢理引き出された・・・拳の隠された道の一つ・・・）」

殺意の波動！！！！

賢太さんは波動の生れついた天性だったようですね・・・ま、五歳のころから修業して波動拳が出せるんだから何となくそう思っていたんですけどね！。

「（全く・・・凡人の私が肩身狭いですよ・・・）」

私は紅魔館に来る前は、様々な拳の道を知っていた。でもどれも器用貧乏で終わっている。私の能力は所詮気を使う程度の能力。更にはそれほど強くない妖怪だ。どの道も力不足に終わる。

「・・・滅・波動拳!!」

この色は波動拳の殺意版。防御はしないで・

「真空・・・波動拳!!」

ドオオオオオオ!!!!

殺意の波動の解き方は私は知らない。でも、戦う事でそして気絶させれば!!

「ハアツ!!」

ドガツ!!

「ゲウツ!?!」

自分のスピードを最大にして、蹴りを叩き込む。これで終わりじゃない。

「連牙弾!!」

ガガガガガガ!!!!

無数の連続した蹴りを喰らわせる。

「昇龍拳！」

ドカア！！

技を途切れさせず、続けて火をまとった拳を繰り出す。

「散華猛襲脚！！！！」

ガツガツドオン！！

急降下して蹴りの三連撃を繰り出す。

「グウウウウ！！！！」

まだ攻撃は終了していませんよ。

彩符「彩光乱舞」

ドオオオオオオオン！！！！

「グアアアアアアアア！！！！」

「これで止め！！！！」

賢太さん、少し我慢してください！

「真・灼熱波動拳！！！！」

ゴオオオオオオオオオ！  
ドゴオオオオオオオ！！

「ガハアツ・・・」

至近距離で放った攻撃は避ける暇無く賢太さんに命中して吹っ飛ばした。

そのまま賢太さんは気絶したようだ。殺意の波動も消えている。なんとかあった。

「（瞬獄殺を使われたら私でもやばくなりますからね・・・よかったです）」

さて・・・向こうはどうなったかな・・・

私は紅魔館の屋上を見た。無事にすめばいいですけど・・・

咲夜Side

カキーン！！カァン！！キーン！！

「（ナイフは投げただけでは当たらない・・・厄介ね）」



私のナイフが通用しない以上、時を止めて攻撃したいのだけれど・・・  
「ふふふっ・・・どうしたのかしら？」

まだ私の修業不足のせいか、時を止めるには十秒程必要だ。信太と俊一に時間を稼いでほしいのだけれど・・・

「はあっ・・・はあっ・・・」

「ぜえっ・・・ぜえっ・・・」

二人はずっと前衛でルーミアを相手にしていて、もうかなり体力を消費している。傷も多くなってしまっている。

「（何とか団結して時間を稼がなくちゃね！）  
メイド秘技『操りドール』！！」

ナイフを大量に投げ、ナイフの時を止める。物なら時を止めるの時  
間掛からないんだけどね！

「・・・行きなさい！」

ババババババババババ！！！！！！

大量のナイフがルーミアへと向かう。

「そんな手は通用しな「魔符『ライトニングアロー』！！」「ちい！」

私の攻撃によって俊一は察したのか、同時に攻撃してくれた。これ  
でなんとか・・・

「邪魔だ！月符『ムーンライトレイ』！！」

横から閉じるように弾幕が・・・て閉じる弾幕！？

「うわああっ！！！！」

「俊一君！！！！」

私は弾幕の範囲外にいたから命中しなかったが、俊一君は前衛にいたため避けきれず、命中する。

霊符「斬刑」

弾幕を放ち終わった隙を狙ってか、信太君がスペカを発動させた。

「甘い！！！！」

ガキイン！！！！！！！！

だがそれはルーミアの剣によって防がれてしまった。

「たあっ！！！！」

ズバツ！！！！

「ぐっ・・・があっ！！！！」

「信太君！！！！」



「わからないわね。お前はこの館とは関係がない。むしろこの異変を解決しに来たのだから、私に執着してなくてもいいんじゃないの？」

「そんなの・・・関係ねえ・・・」

信太君は肩で息をしながら言っている。

「俺は・・・記憶がないけど・・・でも、何が大切な事ぐらい、わかっている！」

大切な人達を守る！それが俺の決めた信念・・・！」

信太君が刃を生み出す・・・ナイフぐらいではなく、刀のようなくらいの大きさだ。

「信念を持って突き進め・・・それが・・・力になるんだああ！！！」

それは！？あいつの口癖の・・・

「うおおおおお！！！」

信太君はそのままルーミアへと突撃していく。

「・・・！ちい！！！」

ルーミアは何か驚いていたのかわからないが、遅れて反応して剣を

同時に振りかぶらせた！

ガキイン！！！！

ズバッア！！！！

「……………」

「ぐっ……………」

両者とも、刃の傷を受けた。

「この……人間が！！！！」

ルーミアが直ぐさま後ろを振り返り、信太に剣を振りかざそうとしていた。

させない。

カアン！

「時よ止まれ」

私だっずっと見ていたわけじゃない。何時でも発動出来るようにしていたのだ。

ルーミアの回りに大量のナイフを投げて停止させ、信太を安全な場所に避難させる。

「……………そして時は動き出す」



ピカアアアアアン!!!!!!

まぶゆい光の後ルーミアの姿は無くなっていた。巫女は渋い顔をしている。

「おいおい霊夢。まさか失敗したんじゃないだろうな？」

「失敗はしてないわ。力は封印して弱い妖怪になったわよ。ただ・記憶まで消せなかったけど・ま、封印はきっちりしたから問題ないわ。さ、信太達の怪我を治すわよ」

「どうやら終わったのね・・・さて、屋敷の修理でもしますか・・・きつとお嬢様の事ですから・・・パーティーでもするのでしようし、ね。」

StageEX2 信念を持って突き進め！（後書き）

マッサー

「次回【東方紅魔郷編】エピローグです」

レミリア

「私のカリスマシーン、全然ないじゃない！」

マッサー

「まあまあ、きつとこの先で・・・」

フラン

「あるの？」

マッサー

「原作と同じには毎回させない（多分）からきつとある（等）等（！）」

レミリア

「（）がまる聞こえじゃあー！！」



END 紅魔館パーティー（前書き）

マッサー

「紅魔郷完結！」

正由

「今回衝撃のラストオオオオオー！！！！アッー！？」

## END 紅魔館パーティー

賢太Side

この紅魔館が起こした紅い霧の異変から数日が経過した。

驚いた事は、死んだと思っていた信太や俊一がいたことだ。俊一の変わりっぷりは別の意味で驚いたが。

信太は記憶を失っているが、生きてるなら生きてるでよかった。

そして俺の中にいる、殺意の波動のこと。美鈴に聞かされた時、俺は館から出ていこうとした。これをきっかけにいつまた現れるかわからない。迷惑を掛けるわけにもいかなかったからな。

だがしかし、それは全力で止められてしまった。

フランには泣き落としされそうになるし、レミリアにはツンデレっぽい事を言われるし、散々だった。

・・・意味わからん。俺は紅魔館に落ちこちて一週間も経過していない。しかも俺のしたことは、親切の押し売りと迷惑をかけただけ。なんでそんなに俺をここに住まわせるのかな？

それに、俺も含めて外に帰る事も考えなくてはいけないし・・・と言ったら凄く悲しい顔をされた。ちょっと待て咲夜さん、あなたもでしよう？

まあでも、帰る手段は博麗の巫女が知ってるようだから聞いてみよう。今日は何かパーティーがあるみたいだからな。

「……………」

だが・・・それでいいのだろうか？

俺はここにいつまでもいるのは、元の世界を捨てた事になる。だけど、たった数日だけど、この世界で思った事はいくつもある。

ここは落ち着く。人が、いや生き物が暮らすにはいい空気だ。離れなくなるのは、それが原因なのかもしれない。

「（だが・・・そんな事でここに残っていいのか？）」

この世界にいと、元の世界に戻れなくなりそうだ。それが正しいかどうか・・・わからない。

「・・・考えても仕方ないか」

少し歩いて気分転換しよう。そう思って俺は部屋から出た。

「広すぎていまだに迷いそうだな・・・」

この館無駄に広い気がするんだよな・・・

「というわけで図書館にやってきました」

「何処に向かって言ってるのよ」

それは言わないお約束だ、パチュリー。・・・しかしなあ。

「なあ、呼び捨てでいいのか？」

「いいのよ別に」

俺は最初パチュリーとかレミリアとか呼び捨てにしてしまったが、よくよく考えれば相手は皆さん年上なわけで・・・さんづけにしようとしたが・・・却下された。いいのかこの館は・・・

「・・・それより賢太、貴方まだ迷ってるわね？」

「え・・・ああ」

流石にごまかしきれない俺は正直に話す事にした。  
ここらで誰かに話していた方がいいかもしれないからだ。

【少年迷いを告白中・・・】

「・・・というわけなんだが・・・どうしたら、いいかな」

俺の悩みを聞いてパチュリーは何かジト目でこちらを見ている。・・・え、なにこの反応。

「はあ・・・私から言えるのはこれだけね」

ため息も吐かれてしまった・・・なんなんだよ？

「信念を持つて突き進め・・・これだけよ」

「!?!?な、なんでその言葉・・・を？」

あれ、俺言つたっけ? いやそれとも他の人に聞いたか?

その事に聞きたかったがパチユリーは本を読み始めてしまい、邪魔しちゃ悪いと一人で考え始めた。

「（信念を持つて・・・突き進む・・・）」

俺の信念・・・それは・・・

「・・・!」

・・・なんだ。考えるまでもなかった。この波動の力を手に入れる前に決めた事じゃないか。

二度と誰も失わないように、守る力を得る。

だったら俺は、皆を守る為にもここにいなけやな。

ふっ、考える時間が勿体なかったな。

「よし!パーティーの準備、手伝ってくるかー!」

そう言つて俺は図書館を出た。手伝う事あればいいなー。

咲夜Side

ガヤガヤ！

ワーワー！

「なんというか・・・」

パーティーのかけらがあるのかないのか・・・ただの祭ね。

「まあこれがここ幻想郷なのかもしれないですよ」

近くにいた賢太が受け答えしてくれる。昼ご飯の時にここに住まわしてくれと自分から言った事に私とパチュリー様以外、皆驚いていた。

そのあとフラン様が賢太に飛び付いて壁をぶち破って行ったけど・・・まあ無事に落ち着いているのだからよかったわ。

「そういえば俺はここに住むにあたって、何をしていけばいいんですかね？」

「・・・うーん・・・執事かしらね」

料理の腕もたしかだったし、お菓子作りも出来る。紅茶の入れ方も出来ている。男性でここまでとは・・・

霊夢と魔理沙に聞いた話だと信太君も俊一君も料理上手なそうだ・  
偶然かしら？

「執事かー・・・執事マナーなんて知らねえなあ・・・」

「賢太が執事ですって！！うー」

酔っ払ったお嬢様が現れた。最後のうー、てなに？

「いや、あくまでも予想してただけだ。まだわからないし、そもそもレミリアが最終的に決めるだろ「よーしいいわよ！うー」・・・は  
？」

話を聞いていない。これがこのルールの一つかしら？

「貴方は明日からフランの執事！これで決まりよ！うー」

独断ですねー。酔った勢いでしょうか。

「おい！俺執事なんてやったことねーよ！」

「そんなの適当にやってりゃなんとかなるのよ！うー」

言っでは悪いですが、うーうー言ってるのに突っ込みたいです。

「とうづか、うーうーうっさいわー！」

「何ですって・・・この溢れ出すか・り・す・ま・おーらを感じない  
とうづのかお前はー！うー」

・・・そのか・り・す・ま・おーら、カタカナならよかったですね・・・はっ私はなにを。

「そんなカリスマあるかぁー!!」

「うー!!」

子供の喧嘩ですか？ほほえましい事です。

あら・・・？お客様の信太君に俊一君、魔理沙、それと・・・

「・・・」

屋上？

【屋上】

屋上へ来てみると霊夢が一人で立っていた。

「どっかしたのかしら」

「？・・・ああ、めいどという信太と同じ外来人ね」



・なんかその言い方冥土に聞こえたのですが・

「ちよつとね・・妙なよ」

「妙？」

何があつたというのかしら？

「ルーミアって妖怪いたでしょ？封印して大人しくさせただけ……  
感じないのよ」

……え、それはもしかして

「封印が解けたわけじゃないのよ。ただこの幻想郷から力を感じられない」

「まさか外に!？」

「……わからない。結界には反応なかったのだけれど……」

そうだとすれば大変じゃない!いくら封印されて弱くなったとはい  
え妖怪なのは変わらない。

「（無事だといいのたげれど……）」

まだ外にいる友人の無事を静かに祈っていた。

ルーミアSide

「ぐっ・・・うあっ・・・」

ここは、どこなのだー・・・記憶は失ってはいない。が、力は大幅に封じられ、喋り方が若干おかしくなっちゃった。

「お腹すいたのだー・・・」

能力を使っているわけでもないのに、辺りは暗いのをみると夜なのかもしれない。・・・あぁ、面倒。

「考えるのが面倒になってきたのだー・・・」

なんか複雑に考えるのが嫌になったらしい。それに

「眠いのだー・・・」

とりあえずここで寝よう・・・体力回復させときたいし・・・

「すー・・・すー・・・」

今は咲いてない桜の木を背に私は眠り始めた。

『ん？誰？』

何か懐かしい夢・・・

『貴方ですか？最近暴れ回ってるのは？』

ああ・・・いつの時代かの博麗の巫女だっけ・・・

で力を制限されちゃって・・・力尽きそうだったところを・・・

『どうかした？』

一人の人間に助けられた。

『ルーミアは妖怪だよー。助けなくていいよー』

『そういうわけにもないー。見てみぬふりは出来ないし・・・』

人にしては何か違うけど、私を助けてくれた。

『どーしてルーミアを助けたの？』

『特に理由はない！』

すてーんとこけたのはノリかもしれない。でもちゃんと教えてくれた。

『信念を持って突き進んだからさ』

『信念？』

『そ、俺は誰も失わないように、後悔はしない為に君を助けた。それだけ。な、理由なんて無いようなもんでしょ？』

笑っている人の顔はまるで光のようで私には眩しかった。

『ねえ、名前は？』

『俺は・・・正由。宮藤正由だ』

「こんなところで寝てると、風邪ひくぞー」

はっ！誰かの声で目が覚めた。気持ち良く寝てたのに・・・

「誰なのだー・・・!?!?」

私は開いた口が収まらなかった。

「妖怪でも風邪は引くからな。気をつけなげや駄目だぞ」

そこにはもう一度会いたかった人がいた。

「何か感じて来てみれば、君がこっちに来るなんて・・・ね」

でも本物なの・・・？

「ま・・・正由なの、か・・・？」

「・・・ああ、久しぶり、ルーミア」

その言葉を聞いた瞬間、私は正由の胸に飛び付いて泣き始めた。その間正由は私の頭を静かに撫でていた。しばらくして私は泣き疲れて寝てしまったようだった・・・

正由 Side

ルーミアが現実に来てくるなんて・・・これはやっぱり俺達が原因か・・・

思えば勇儀がこちらにやってきたのも・

「（紫・お前は どう思ってるかな・）」

やっぱり、悲しんでるのか？ そんな事を思いながら、俺は泣きつかれたルーミアを家に連れていく事にした。

「信念を持って突き進め・か」

あの時持っていた信念を突き通したのが、この結果か。後悔しない、なんて言っただけ・・・

後悔・した、な。

だけど・まだ終わってない。まだ俺にやれる事はある。

俺はそう心に言いながら家へと戻って行った。

「・・・私には挨拶なしですか？」

ギクッ！

さあーさっさと帰る「無視ですね？」・・・今日はまだ飯食って「・・・」

「何でここにいるんだ？」

「わかりません。ただその妖怪が倒れていたものですから、介抱ぐらいしよつかと」

偶然か・・・？いやそうだろうな。間違いなくそうだろう。

「さて、説明していただきましょうか、正由」

確実に怒ってるなー・・・はあ・・・。

「わかったよ・・・家で説明するから、ついてきてくれ華扇」

「わかりました」

そう言って俺の隣を歩き始めた、茨華仙（本名、茨木華扇）だった。

今ならお前の気持ちがよくわかるぞアラス・・・！

END 紅魔館パーティー（後書き）

アラス

「ううう・・・正由も大変だなあ・・・」

渚

「これはフラグか？俺にも誰か来るといふフラグなのか？」

マッサー

「次回、少しの日常編です」



## 日常・紅魔館の妖精メイド日記

妖精メイドside

あ、どうも。私、最近紅魔館に妖精メイドとして入ったばかりの妖精です。

最近つてどれくらいかというところ・・・紅霧異変が起きる数日前くらいでしょうか。私はその時にここで働くことになりました。まさか入った数日後に侵入者と戦うはめになるなんて・・・ぐすつ、私はただの妖精なのに！。博麗の巫女に吹っ飛ばされました・・・。

でもここはずいぶん聞いていた所と違うような気がします。

この主人は見た目は幼くとも吸血鬼。とても怖い方と聞きましたか・・・こないだのパーティの時・・・

『なによ賢太！！じゃあ私の執事がいいのね！じゃあきま』あ、じゃあフランの執事でいいや』なんでよー！！！！うー！！！！』

うーってなんなんでしょう？聞きたいけど怖くて聞けません。・・・というよりもどうでもいいです。

この人がこの主なのです。でもまあ、カリスマな所もありましたけど・・・落差がありすぎじゃないですか？

あともう一つ・・・主の妹の方はもちろん吸血鬼ですが問題はそこではなく、力をコントロールできない、破壊するものと聞いたんです。でも・・・

『え！？賢太が私の執事になってくれるの！』

『あ、ああ・・・まあ働かないのは悪いからな。でも執事なんてy  
わーいわーい!!』・・・ダメだ聞いてない』

あんなにはしゃいでるよう・・・コホン。あんなはしゃいでる方が  
破壊するものなんて信じる方がおかしいですけど・・・本能的に感じ  
てるので、正しいと思います。でも思ったより気楽に仕事に取り組  
めます。

今日はどんな事がおこるかな

【朝早く】

妖精メイドが起きる時間よりも早く私は起きる。働き始めてから毎  
日同じ時間に起きています。どこに行くかというと、厨房です。今  
日は確かいるのは一人かな？

「あら、今日も早いのね」

いました。私と同じぐらいにここで働くことになった、メイド長の  
咲夜さんです。人間ですけど、様々な仕事を受け持っている人です。  
私がここに来ているのは料理をもっと上手になるために、達人級の  
咲夜さんの料理を学んでいるのです。ただ見ているだけでは暇にな  
ってしまうので、

「じゃあそこの野菜を切ってくれるかしら」

こうして手伝わせてくれます。元々私は家事はそこそこできたので  
任せられています。

一通りの調理をし終えたら、朝早くの仕事は終わり、次は朝の仕



【朝】

朝はそれほどすることないです。門番さんが休んでる（説教中？）の間に門の掃除をするか、花の水やりか、妖精メイド達が食事をする食堂で配膳準備するとか。ここらは他の妖精メイドも起き始めるからまちまちになりますね。

今日は門番さんが説教されてるのでお花に水をやりましょう。

しゃわ〜

う〜ん気持ちいです〜。

朝の仕事はこんなものです。次は朝ご飯を食べてお昼までの時間です。

あ、朝ご飯は特に何もないのでカットです。ちなみに朝は現在洋食四割、和食四割、その他二割の確率のメニューになっています。

【昼にかけて】

お次は分担して館のお掃除になります。この紅魔館はとてつもなく広いです。地下も含めると多すぎです。まあだから大量の妖精メイドがいるのですが……。まあ私も含めて妖精は皆気分やですから、ダラ〜とやっている妖精がたくさんいます。それでもこなせるのが絶妙なバランスで仕事をしている……。のだと思います。

「はかどってるか〜？」

あ、今日は執事の賢太さんですね。賢太さんは門番と執事の仕事を順番に行っています。身体を壊さないのでしょうか？

「じゃ、互いに頑張ろうぜ」



ぎです。ちーT・・・げふん。

まあそんなこんなで今日の私のこの時間は回復の為に使ってしまったのでした。ああっ・・・もっと早く復活ってできないのかな？

### 【就寝までの時間】

基本的にお夕飯を食べた後は自由な時間です。お仕事が終わったということですよ。場合によっては緊急で働くこともあるそうですが・・・まれに、です。

さて、ゆっくりお風呂でも入りましょうか。館が大きいからお風呂も大きいですよ。

・・・妖精がお風呂に入れないなんて設定はないです！・・・なにを言ってるんでしょうか？

じゃあ入りますか・・・メイド服を脱いで・・・いざ入浴・・・

ガラガラ

「け〜ん〜た〜！」

「やめるフラン！！こんな所誰かに見られたりしたら・・・」

ガラガラ・・・ピシヤ。

・・・あ、急用を思い出しました。「ちょっと待って」どうしましたか？ロリコ・・・賢太さん？

「俺は無実です。だからそんな冷めた目で見んな・・・」

とまあこんなアクシデントもたまにあるのです。

毎日が充実しているこの日をもっと楽しんでいきましょう！！！！！！！！

以上今日の日記終わり！

あ、私の名前は、ユナです！頑張っていきまーす！

日常・紅魔館の妖精メイド日記（後書き）

レミリア

「え、誰こいつ？レギュラー？」

賢太

「妖精メイドの代表者だそうだ」

ユナ

「よろしくお願いします！」

レミリア

「まあいいわ。それよりも賢太、お前フランを・・・」

賢太

「待て、それは俺が被害者」問答は無用・・・」・・・やるかこらあつ  
「！」

ユナ

「あわわわ・・・次回！！春雪異変突入ですか！？」



正由

「異変、始まります」

マッサー

「今回もオリ展開真つすぐだぜえ」

東方妖々夢 ～ Perfect Cherry Blossom

魔理沙 Side

「うーん．．あれがこうなってこれが．．こうか」

私は今部屋にこもって魔法の研究を行っていた。俊一にも部屋に極力入って貰わないようにし、一人で行っているのだ。

ポウン！！

「．．．．．」

あんまり成功しないけどな！！！

「ゲホツゲホツ．．しゅんいち．．めし．．あれ？」

部屋の扉を開けて俊一を呼ぶが返事が無い。というより、人の気配が無い。

「どうしたんだ？俊一のやつ．．．」

ギイイイ．．．

そう言っ私は空気を入れ換える為に窓を開ける．．何故かカーテンまで閉じていたが。その理由はすぐわかった。

ゴオオオオオオ．．．

「．．．．．さむっ！？」

な、なんなんだこの寒さは！？私はすぐに窓を閉めて外の様子を見

る。

「うわー・・・雪が積もってるぜ」

全く、びっくりしたぜ・・・って、あれ？

「今は確か・・・春だよな？」

時期的にもう春になっていないとおかしい筈だ。なのに外はこんなにも雪が降っているし、寒い。

「これはもしかして・・・」

紅魔館以来の・・・

「異変か!?!」

そうと決まればこうしちゃいられない。早速調査する準備だ。

「寒いから暖かい服装に・・・ん？」

お？机の上に何やら置き手紙。・・・ははーん、さては俊一、待ちきれずに私に書き残しをしたんだな・・・

「あるえ〜？俊一が私に書き残しを？」

別に急ぐ必要もないし、住んでいるのは私らだけなんだから、一声かければいいじゃないか？

「どれどれ・・・」

とりあえず考えても仕方ないので、手紙の内容を見る事にした。

【魔理沙へ

この異常なまでの寒さを考えていたんやが、よく考えたら今は春の季節の筈なんや。

気になって魔理沙に話そうとしたんやけど、そこにアリスがやってきたんや。アリスはわいと一緒に調査して欲しいとのことやった。せめて声だけかけようと思ったんやけど、アリスが無理矢理連れ出すとするから・・・スマン。書き残しは残せたんや。魔理沙もすぐに来てくれやー!】

・・・まあ俊一が勝手に行ったのは別にいい。だが・・・

「アリス・・・だと」

しかもこのメモ欄にアリスが書いたような字があった。

【そういう事だから、ゆっくり来なさい。焦ったら負けよ】

丁寧に書いてあるように見えるが私にはこう読めた。

【俊一は私と一緒にいるから、貴方は来なくていいわよ】

ブチッ

「キッシャアアア!!!」

ビリビリッ！！！！

紙をばらばらに引き裂いて破く。私の怒りが大・爆・発！

「俊一は渡さん！！！！」

私は厚着もしないで家を飛び出して行った。

「俊一の相棒は私だああああああっ！！！！」

咲夜Side

「うーん・・・」

この春だというのに異常な寒さ。やはり異変の類なのかしら。

「だとすればまずいわね・・・」

香霖堂から譲ってもらったストーブの灯油が尽きそうだわ。春になるからもういらなないと思ったけど・・・

「これは早急に調べる必要がありますね・・・」

私は調査に出る許可を求める為にお嬢様の元へ向かった。

「そうね、いいわよ咲夜。調査してきて頂戴」

「歯をガチガチさせて言う台詞じゃないわねレミィ」

的確な突っ込みをするパチュリー様。お嬢様は涙目になっております。

「寒いよお・・・」

フラン様も寒そうです。因みにお嬢様方はタオルケットに包まれて少しでも寒さを防いでおられます。

「こうして見るとカリスマのかけらもないわね」

「パチエ・・・私に何か恨みでもあるの・・・？」

多分からかって楽しんでるんだと思います。

「うー・・・早く咲夜！！異変を解決しなさい！！出来れば巫女達よりも早く！！！！」

えー・・・頑張りますけど流石に一人はきついですから・・・。

「賢太と・・・後、美鈴も連れて行ってよろしいですか？」

まあ門番ですからどっちか片方しか無理な気がするけど・・・

「いいわよ！両方連れて行きなさい！！」

あら・・・意外ですね。大丈夫なのでしょうか・・・と聞こうとしたらパチュリー様が耳打ちしてきた。

「大丈夫よ。今のレミイは機嫌が悪いから早く異変を解決した方がいいわ。だからお願いね」

その機嫌が悪い原因はパチュリー様にもあるのでは・・・と考えたら負けだと思った私は厚着になって門へと向かった。

「ぬー・・・お風呂行くわ！」

「私も行くよお姉様・・・」

・・・お風呂行って暖かくなつたとして、あがる時に・・・

「悪循環になるわね」

早く異変を解決しよう。

【メイド移動中・・・】

「あ、咲夜さん？お出かけですか？」

「ちょっと異変を解決しにね。その間の事は任せたわよ、ユナ」

「はい！！！！」

【門】

「というわけで門に来ただけねど・・・」

二人がいないわね・・・あるのは人が一人入るぐらいの雪が積もってるのが二つ・・・

うーん・・・ここはそうですね・・・

「・・・せつかく異変を解決しに誘おうとしたのだけれど・・・二人をね」

多分こうすればきつと・・・

ドゴオン！！！！

「ふおおあ！！！！！！」

美鈴が自力で雪を脱出したようです。

「ささささささ、咲夜さん！？異変を解決に同行しても、いいんですか！？」

「え、ええ・・・お嬢様はそう言ったわよ」



何をそこまで驚いているのかしら？

「何となく驚かなくてはいけない気がして・・・  
それよりも賢太さん！雪で固まっている場合じゃないですよー！！  
！」

バゴオ！！！！

「ぐわあっ!?!」

賢太が入っていた雪の塊を拳で破壊して賢太を出しましたね・・・吹き飛ばしましたね。  
とりあえず説明しますか。

【メイド長説明中・・・】

「なるほどなあ・・・この寒さは異変だったか」

まだ異変どうかはわからないけど、恐らくそうでしょうね。

「それで私達三人で調査するんですね！！」

気合い入ってるわね美鈴。空回りしなければいいのだけれど。

「とりあえず行くわよ。手掛かりが無い以上、地道に探すしかないのだからね」

「了解です！！」

「ま、仕方ないか・・・」

こうして紅魔館からは私達が異変解決組が動いた。

### 霊夢 Side

この春だというのに冬真っすぐな状態を調査しに私と信太は飛んで調べていた。

「うーん・・寒いわね」

「じゃあ何か着たらどうなんだよ。脇丸出しで寒くないのか？」

不思議と平気なのよね。寒いって行ったのも何となく言わなければいけない気がしたのよね。

「・・・じゃあこれでも着とけ」

「・・・ありがとう」

信太が着ていた一つの上着を私に着せた。・・・なんか嬉しく感じる。

「でも寒くないの？」

「気にすんな」

全く・・・我慢してるわね・・・

「それより、何処に向かっているんだ？・・・まあ予想してるけど」

予想してるなら聞かなければいいんじゃないかしら。

「勘で進んでるわよ」

そのあと信太はやっぱりなーという顔をしていた。

「（でも・・・）」

また今回も・・・何か別の力・・・いや、

「（様々な力が交差してる・・・それも、外にまで影響が出る程の力がある・・・）」

でも何か・・・とても悲しい力・・・

「（この異変・・・幻想郷全体に響きそうね・・・）」

私の勘が嫌な予感を告げていた。

【現代】

正由 Side

「……………」

真夜中の今。俺は一つの桜が見ている。桜は満開だ。でもその桜を見ていると、とても悲しくなってくる。

「共鳴なのかな、これは」

思い出すのは誓いの桜の木。この桜はそれに似過ぎていた。

「紫……………」

俺は幻想郷に戻る事は出来ない。でも、いつか戻れる日が来るかもしれない。

だけど、今すぐに君に言っておきたい事がある。

あの時言えなかったことを…………

俺は光り輝くように咲いている桜に背をつけて、座って目を閉じた。

どうか…………一度だけでいい…………

幻想郷を護らせてくれ！

紫達を護れる力を…………少しいから取り戻させてくれ！！！！

ピカー！！！！

そう思った瞬間、俺は不思議な感じがした。何か桜の中に入るような・・そんな感じ。  
目を開けると、そこにいたのは・・

「久しぶり、正由」

「・・幽々子」

亡霊じゃない、生前の幽々子がいた。

東方妖々夢 〵 Perfect Cherry Blossom 〵 (後書き)

美鈴

「まさかの私自機化ですね！」

レミリア

「最初からいきなり謎が出てきてるわね・・・」

マッサー

「では次回からStage開始です！」

## Stage 1 冬の忘れ物

霊夢 side

勘で進んできている私たちだけど、あんま、特にないわね。現在は人里付近を飛んでるかしら。

「そついや、俊一達はどうしたんだろうな？」

あー・・・そついえばまだ今日は会わないわね。

「どうせ調査中に会えるでしょ。そんな気にする必要ないわよ」

退き際は・・・たぶんわかってると思うし、実力はあることはわかってる。心配は無用だろう。

「まあそつだな・・・下手すれば出番を奪われるかもしれないな」

・・・それは博麗の巫女としてまずい気がするから阻止しなくちゃね。・・・ん、人里・・・

「信太、里に下りるわよ」

「珍しいな・・・わかった」

なんか私の勘が里に降りろって言ってるのよね・・・ここは素直に行ってみましょう。

【移動中・・・】

「里も随分雪が積もってるわね」

子供が遊んだような跡が残ってるわね。呑気なものね。」

「ん・・・？あそこにいるのは・・・」

信太が夜の里で誰か発見したようだ。多分あいつじゃないかしら。

「・・・誰かと思えばお前達か。どうしたんだこんな夜中に？」

里で寺子屋の教師をやっている上白沢慧音ね。私達の気配でも感じ取ったのかしら。」

「今起こってるこの異変をしらべてる。春になってもこれは異常だからな」

「確かに・・・里の皆も不思議がっていたよ。そろそろ巫女にでも依頼しようとしていたらしいからな。丁度いいだろう」

まあもう私達はもう動いてるけどね。」

「慧音、何かこの異変について心当たりはないかしら？」

「む？心当たりか・・・？うーん・・・」

考え込んでくれる慧音。何かここで情報を得られると思ったのだけ  
れど・・・



「……すまん、特に心当りはない。力になれず申し訳ない」

「そう……」

慧音がわからないとなると……はずれだったのかしら。私の勘に不都合でもあったのかしら……

「里にいても進展はなさそうだな、そろそろ行くか？」

「……仕方ないわ「ちょっと待ってください」？」

ん……確かこの声は……

「阿求？どうしたのよ」

稗田阿求。随分昔から幻想郷の歴史を書き残している一族ね。確か阿求は九代目。でもなんでこんな夜中に？

「この今起こっている異変と関係があるとはわかりませんが……妙な事があります」

「妙な事？」

何かしら？

「場所は特定されていないのですが、迷った者がたどり着く屋敷があるそうなんです」

迷うものがたどり着く屋敷……

「・・・阿求、悪いんだが、あんま関係なさそうじゃないかな？」

「うーん・・・私もそう思うのだが・・・」

信太と慧音は関係がないように言っているが・・・

「やはりそうでしょうか？すみませんでした」

阿求もどうやら違うと思ってしまったようだ・・・

「・・・？霊夢、どうした？」

・・・私にはどうもひっかかる。確かに阿求の言っていることはこの【春なのに冬のような季節】とは関係はないと思う。でも何かひっかかるのだ。

私は目を閉じて意識を集中させた。何かひっかかる。自分の勘が思ったことを考える。

そもそも今回の異変、何か様々な力を感じていた。その一つが阿求の言っている所の一つ？

少し違う。そこからどこかに行ける不安定な道が、何か力を感じる・・・。

「・・・！！」

私の中で、勘が告げた。その館に行けと。そうすれば道は開けると、告げられた。

「阿求、ありがと。信太、行くわよ！」

「・・・わかった」

信太はどうやら察してくれたようだ。私たちは里を飛び出して行った。

魔理沙 side

少し冷静になった私、厚着をし忘れて寒いぜ・・・

「くぅ〜・・・寒い・・・どうにかならないかだぜ」

さっさと異変を解決して暖かいお茶を飲みたいぜ。

「はっはっはっはー！！あたい参ぞ」あくでも布団でぬくぬくするのもいいな〜」【ドゴツ】むぎゃー!？」

ん？何かぶつかったか？・・・周りに誰もいないから気のせいだろ。

「さーてアリスの奴にどんなことをお見舞いしてやるつか・・・」

無断で俊一と一緒に行きやがって・・・むう、一人じゃ寂しいぜ。

「ちょっと待ちなさい」

「ん？誰だぜ？」

前に立ちふさがるように誰かが現れた。妖怪かな？

「ん〜、さすがにチルノを撥ねといてそのまま、というのはいただけないわね」

チルノ？誰だそれ？妖怪か？

「下に撃墜してるわ」

そう言つて下を指さしていたので下を見る。．．．おお確かに何かいるぜ。しかもあれは妖精か。

「すまんすまん、考え事してて見えなかったぜ」

下をそういや見てなかったからなおさら気づかなかつたぜ。

「はあ．．．それより人がこんな夜中になにしてるの？」

「この寒さをどうにかしにいくんだよ。寒くて敵わないからな」

「ふーん．．．そうなのね」

そう言つと前にいる奴は考え込む姿勢をとつて考えていた．．．なにやってんだこいつ。

「．．．．．」

何か私をみてる．．．そして何か辺りの寒さが格段に増した気がした。そして次の時には！！

白符「アンデュレイションレイ」

ズガガガガガガガガガガ！！

「うわあぶね！！！！」

スペルカード宣言してきやがった。いきなりだなおい！

「一応私冬の妖怪だから、少なからず抵抗させてもらつたよ」

なるほど・・・今の季節を戻させたくないってことか。

「私はレティ・ホワイトロック。よろしくお願いね」

ズガガガガガガガガガガガガッ！！

弾幕を避け続ける。たいした弾幕じゃない。落ち着いてやれば全く問題ない。

「・・・そこだ！！！！魔符『ミルキーウェイ』！」

すぐに奴の次のスペカが来ると思うが、少しでも攻撃が出来る時にはする。それが今の私のポリシー。すぐに変わるけどな！

ジュードーン

「あゝれ〜」

さーて次の弾幕はどんなのが・・・て、

「おおい！？なんで墜落してんだ！？」

なんでかわからないがレティは私のスペカで撃墜したようだ・・・  
避けられなかったわけじゃないだろうし・・・

「・・・なんか納得いかねーぜ」

身体も暖まらなかったし・・・むづ、早く俊一達に追いつくように  
急ぐか・・・

## Stage 1 冬の忘れ物（後書き）

【その後のレティ】

「これぐらいでいいかしらね。争うことは好きじゃないし、いつまでも冬というのも生き物に影響がでちゃうから・・・これでいいの・・・」  
それにしても、あのまほ一剣士さん、もう来ないのかしらね・・・  
待ってるのだけれど・・・」

というのがレティさんの望みでした。確かにこのままならずっと活動出来ませんが、彼女の優しい性格が望んではいませんでした、という事です。

まほ一剣士は誤字じゃないです。彼女が魔法を理解していないだけです。

Stage 2 垣間見える桜の思い(前書き)

今回、戦闘描写無し！

橙

「ええー！？」



## Stage 2 垣間見える桜の思い

慧音Side

霊夢と信太が里を飛び出して行って見えなくなってから、私は隣にいる阿求に疑問をぶつけた。

「・・・聞くが阿求殿。何故スキマ妖怪の住家の入口がある可能性の高い館に向かわせた？」

自分でも少々わかりにくい言い方だと思いが仕方ない。元々スキマ妖怪の住家は何処にあるのかわからない。噂ではスキマの中に家があるのでは？とも言われている事もある。

「・・・今回の異変は、十年程前から、あらかじめ八雲紫から教わっていました」

その言葉に私は驚く。あの八雲紫が自分で行動を起こした事に。

「彼女自身数百年ぶりの日の光を浴びていたのでしょう、かなりやつれていました」

阿求殿が五歳ぐらいの時、スキマ妖怪は突如やってきたらしい。

『・・・貴女が八雲紫・・・でしょうか？』

『・・・ごまかすのはやめなさい。久しぶり、でしょうか？』

『・・・ごまかせませんか。しかし長い間籠っていましたね。あ、今はもう九代目ですから、阿求と呼んで下さい。それと何か御用ですか？』

『長くなりたくないから単刀直入に言うわ・・・いつかわからないけど、幽々子は異変を起こす』

『いきなりですね。何故でしょうか？』

『・・・わからない。自分の見ていた夢が本当にある事かなんて、予測出来ないわ』

『どんな異変でしょうか？』

『・・・桜を満開にするの』

『！？それはまさか・・・』

『そして私は加担も邪魔もしない・・・いえ、横取りするかもしれない』

『・・・？』

『愚かな事を考えたものだわ・・・友人の集めた力を使って、最愛の人を生きかえらそうとするのだから・・・』

『え………』

『どうなるかなんて……わかりきっているのに』

『待ってください……、ただ行方がわからないだけではなかったのですか!?!』

『……二人は……ね。でも……』

「そして今幻想郷の春は集められている所を見れば、間違いなく西行時幽々子が起こしている異変。恐らく八雲紫も動くでしょう」

阿求殿の言葉には驚きしかなかったが、その中でもとびきり驚く、いや、信じられない事があった。

「阿求殿、正直に言ってくれ……先生が……死んだ、のか……?」  
どう思ってもあの人死ぬわけがない。否定しても、変わらない事はわかっていても。

「……ええ、そうです」

阿求殿の言葉を聞いた時、私の中の何かが砕け散った。

八雲紫の式、八雲藍Side

私は今、ある一つの桜の木の前に来ている。

「・・・何故ここに来てしまうのだろうか・・・」

供えている花を交換して新たな花を供える。その付近には突き刺さった小太刀程の長さの刀二つ。

「・・・正由。お前が命をかけてまで救った幻想郷は平和そのものだった。でもな・・・」

桜の木は私の言葉を聞くように風で揺れている。

「私達の心は・・・救われていないぞ？・・・勝手に逝ってしまった・・・」

涙は出てこない。事実を知った時にたくさん流してしまったからだろうか。

「渚もアラスも行方知らずだ・・・一体何処に行っただんだろうか？」

私は揺れている桜を見つめる。そろそろ、戻らなくては……。

「今、私は幽々子様や紫様の企む事を全部潰そうとしている」

幽々子様は西行妖の封印を解こうとしている。そして紫様は集められた春の力を使って……

「……もしお前がいたら、全力で二人を……いや、私も含めて止めるのだろうな……」

『藍様！聞こえますか！』

む、その声は橙か。どうしたんだ？

『今私のいる所に近づいて来る人がいます！これは恐らく博麗の巫女です！』

巫女ということは……恐らく巫女と一緒にいる男もいるだろうな……そしてよくこちらの方に向かって来たな……

博麗の巫女は何時の時代も侮れんということか……だがこれは好都合かもしれんな……

『橙、その二人をスキマに落とせるか？私が相手をする』

『わかりました、やってみます！』

橙にはまだ二人の相手は早い……なにより二人に協力を求めるなら私が相手をした方が早い。

「さて・・・それじゃ私はそろそろ「ちよいと待ちなお前さん」・・・  
死神か・・・」

その場を去ろうとしたら、死神がいた。

「・・・あなた・・・死ぬ気かい？」

「・・・さあ、どうだろうな？」

惚けるように言ってみるが、まあ通用しないだろう、鋭い目で見られる。

「・・・そうかい、ならあたいからは何も言う事ないよ。気をつけていきな」

「ああ」

死神が何故ここに来たのかはわからないが、私は止まるわけにはいかない。

主達を目を覚まさせる為に・・・

【現代】

正由Side

「藍・・・」

今先程まで藍が言っていた事は幻想郷にある桜とここにある桜を通じてわかった。

「正由がしたことは・・・幻想郷で随分と影響を及ぼしたの。特に心を、ね」

幽々子・・・生前の頃の姿の幽々子が話しかけてくる。今更だと思いが少し薄い。

「そして・・・ね。正由のしたことじゃ・・・終わらなかったのよ。アレは完全な消滅はしなかった」

「っ！！！！」

考えたくなかった。でも、正直自分のした事では手応えがなかった。

「・・・正由、私の残っている力を使って、今だけ【私】と紫を守ってくれる？」

私というのは幻想郷にいる幽々子のことだ。

「だけど、お前はとうするんだよ！」

一時的にでも俺の魂を向こうに送って実体化させる。【幻影】。

「うん。これをすれば私は確実に消滅する……だけど……それでいいの」

「なんでだよ……」

気付けば俺は涙を流している。それはなんで泣いているのかはわからない。悔し涙なのか、悲しいから泣いているのか……

「私は生きてる時、紫と正由に笑顔をたくさん貰った……幸せをたくさん貰ったんだよ？とつても嬉しかったんだから。」

でも、今紫も正由も【私】も悲しんでる……そんなの見てるのはとつても悲しいよ」

……

「だからね、皆笑顔にする為に、私は正由に力を使うの」

……ふふっ。なんというか……

「……変わらないな、幽々子は」

「もう霊なんだから変わるも何もないと思うんだけど……」

それでも変わってない幽々子に笑わずにいられない。

「わかった。必ず今度こそ、絶対に皆を救う……」

俺はしっかりと幽々子の顔を見て言う。



「【皆と一緒に、助けあっていくー!】」

その言葉を聞いた瞬間幽々子は満足そうにしていた。

【その言葉・・・忘れないでね?・・・ありがとう】

そう言った瞬間光に包まれた。

光が止んだと思えばそこにいたのは、渚とレイラだった。他にもアラスや勇儀、華扇、ルーミアもいる。ただし後の四名は何かと戦っているようだが。

「やはりこいつらは・・・」

「ああ、アレの塊で出来た幻影だ」

やはりそうか、と思う。

「それで、お前は どうするんだ?」

よく見ると微妙に渚は笑っているように見える。とは言ってもこいつが笑っているかどうかなんて気付く奴は少ないと思う。ていうかさっきの会話は皆に聞こえたの?

「・・・一時的に向こうに行って、約束しに行く」

「・・・そうか。それで俺達に説明は？」

「帰ったら説明するよ」

そして戦って桜の木を死守してくれている皆に向けて言う。

「四人共、この場は任せるよ!!」

「おう!任せろ!!」

「ふっ、鬼の力、見せてやるよ!」

「ちゃんと帰ったら説明すること、いいですね?」

「待ってるのだ!」

そう言う四人の言葉を聞いて俺は桜の木を背中にして座り込み、目を閉じた。

待ってて・・・紫!幽々子!

Stage 2 垣間見える桜の思い（後書き）

マッサージー

「そして橙の頑張りで霊夢&信太はスキマに落とされてしばらく出番無しになるのであった」

霊夢

「覚悟は出来たかしら？」

信太

「カットしやがって・・・」

マッサージー

「大丈夫！不自然じゃないようにするから！」

霊夢&信太

「そういう問題じゃないわー！！！！」

半霊おじいちゃん

「わしはどつなるんじゃ？」

マッサージー

「どつどつしよつどつ・・・出すべきかな？」

みよん侍

「出すべきだと思います…！」

Stage3 人形使いの憂鬱 (前書き)

霊夢

「しばらく出番ないから前書き後書き出演してやるわ」

信太

「全然戦闘描写ないなあ・・・」

マッサー

「いいのだよ！この先超絶シリアスで戦いも多いの！！」

### Stage 3 人形使いの憂鬱

七色の人形使い アリス・マーガトロイドside

はあ・・・

あ、いきなり溜息でごめんなさいね。私は妖怪の魔法使い、アリス・マーガトロイド。人形を使う魔法を使うわ。因みにこの小説で私は今回が初登場じゃないわよ？まあ、名前は出なかつたからわかんなかったかもしれないけど、ヒントは出たようなものだからわかつてたかしら？

それよりも・・・なんで私が溜息を吐いていたかというと・・・

「うふふ・・・うふふ・・・アリス？覚悟はいいかだぜ？daze  
?ze?」

同じ森に住んでいる中の、人間の魔法使いの魔理沙がご立腹だからだ・・・原因は私にあるから文句は言えないのだけれど・・・溜息の一つも出さなきゃやってられないから、ね。

「ze?ze?zezezezezezezezezezezezeze???」

うわあ・・・なんかわけわかんなく狂ってるわあ・・・  
なんでこんなことになってるかと言うとそれは少し前の事・・・

【三十分ほど前】

「もうすぐよ俊一、冥界の入り口があるのは」

私は今回の異変を調査していた。その場所、冥界のところまでは調査できたが、その先は一人では不安なので俊一に頼んだのだ。

「しかしなあ・・・そんな急がんでも、魔理沙を待つぐらい出来たんやないか？」

「・・・いいのよ別に」

単純に、一言でいえば嫉妬だ。私は魔理沙に嫉妬している。

「まあええか。それよりよくそんな結界がゆるくなってるなんて気付きおつたな？」

「ただの偶然だけどね」

一緒にいてくれるパートナーがいて、かなり羨ましい。まあ同じ魔法の森にいるのだから、会う機会はいくらでもある。それを踏まえ、ても、だ。

「・・・ん？」

なんか近くに誰かの気配がするわ・・・誰かしら？俊一も気づいたようだけど。

「俊一気を付けて。誰か来るわ」

「いやこれは確か・・・」

俊一が考え込むようにして頭をひねっていた。知り合いかしら？

「アリス。ちょっとここでまっときゃ！」

そう言つて俊一は誰かがいる方向へスピードを上げて飛んで行った。  
・・・て、

「ちょ、待ちなさい俊一！」

ああもう！無駄な時間過ごしていると絶対魔理沙が来ちゃうじゃない！そんな私の気持ちは声に出してるわけではないので通じず俊一は行つてしまった。

「むう・・・」

せめて一緒についてこいとか言つて欲しかったのだけれど、ね。

「まあそんなの俊一にはわからないか・・・」

俊一は鈍感・・・だと思う。それは魔理沙と同意してる。

「・・・私も妙な人を気にするようになったなあ・・・」

今まで人間とはほとんど関わらなかつた私だけど、俊一と魔理沙は別だった。二人ともなんか積極的というか・・・無理やりというか・・・人の研究中の所に押しかけてきたりとか・・・。

・・・邪魔しかしてない気がする。

「でも、私にはそんなバカ騒ぎも必要、ということかしら？」

だからお母様は私を魔法の森に住ませたのかしら？そんなこと考



えてもなさそうだけれど。

「おい。何をぶつぶつ言ってるんだぜ？」

「!？」

ぼおっとしていたせいだろうか、今一番会いたくない奴がいた。

「ようアリス」

「……ごきげんよう魔理沙」

魔理沙、やっぱり来たわね……。

「さて……俊一は何処だ？」

「……あんたとは別に今近づいてる奴の方に飛んでったわよ」

「じゃあかえって好都合だな」

まあ魔理沙が聞こうとしてるのは何となくわかるから、俊一は確かにいない方がいいかもしれないわ。

「……なんで私を抜きにして先に行った？」

「……」

やっぱりか……でもここで、正直に言つのもいいかもしれない。

「答えないつもりか？なら力づくでも……」



予想通りすぎる反応だわ……ここまで予想できる奴は他にいない気がするわね。

「……正気か？俊一は人間だぞ？」

少し落ち着いたのか、魔理沙は真剣な顔になって私に言った。確かに私は妖怪で俊一は人間。寿命の差は歴然だ。でも……

「それがなによ？」

「へ……？」

魔理沙が呆けてるけど私は言葉を続ける。

「種族の壁があるとないと、私は諦めない……それだけ」

あらあら、魔理沙は呆然としてるわね。ま、私も思いきった告白だから少々自分の顔が赤くなってるように感じるわ。

「……そうか……それじゃあ……」

魔理沙はまるで何かを決意したように、ゆっくりと動いてスペルカードを取り出した。……え？

「……お前をぶつつぶすしかないな……!!」

魔符『スターダストレヴァリエ』

ガガガガガガガガガガ!!!!!!!!!!



爆発・・・しなかった。

ドオオオオオン!!!!

いや、確かに爆発はした。でも何か間に割って入った・・・？

ゴオオオオオオオ!!!!!!

「春です・・・ヨオオオオオオオオ!!!!」

「春なのよ・・・ヨオオオオオオオオ!!!!」

狂ったような声と共に私達の弾幕は相殺されてしまった。

そしてその煙が晴れた所にいたのは・・・

「.....」

怒り狂っている二人の妖精がいた・・・今にも襲い掛かりそうになっている。

はあ・・・憂鬱だわ・・・

Stage 3 人形使いの憂鬱 (後書き)

マッサー

「もう次回からシリアスになるかも・・・？」

信太

「最後の妖精は・・・」

霊夢

「ホワイトなブラック!!」

半霊おじいちゃん

「で、わしわ?」

マッサー

「出る・・・と思う」

霊夢

「あ、そうそう、なんか意見とか感想は随時受け付けてるわよ。その際おさい銭するのを忘れずに」

Stage 4 騒霊の異変(前書き)

霊夢

「この小説の魔理沙ってヤンデレかしら？俊一も大変ね」

信太

「(霊夢は……)」そこ、変なことは考えない」……」

## Stage 4 騒霊の異変

魔理沙 Side

「春ですよー！……！！！」

「春なのよー！……！！！」

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！！！

うおー！？なんだこいつら！白いのと黒い妖精が狂ったように弾幕を撃ってきてやる。

というか黒と白だと？私の黒白のキャラカラーが被る……ゴホン。

「一体何時になったら春の暖かさになるのですかー！！！」

「もう冬は終わってるのよー！！！」

「さっさと春を返せー！！！！！！」

この言い方から察するに、恐らくこいつらは春の妖精かなにかだろ  
う。

そして春の季節になっているのに冬の状態になっているのを怒って  
いるのだろう……ん？それはつまり。

「……ただの八つ当たりじゃねえか！？」

おいおいそんなら迷惑過ぎるぞ……まあ違うと思っが……。

「そつですよー！！！！」

「何か悪いの！？」



「確信犯かよ!？」

どうやらまさにその通りだったようだ。これは力づくで黙らせるしかねえな・・・

「魔理沙、ここは同時に弾幕を撃つわよ」

「・・・それしかねえな」

不本意だがそれぐらいしか思いつかなかったし、あんまり認めるのも少し嫌だが私とアリスは相性はいい。魔法使いたるの意味で、だ。その二人のコンビ弾幕なら何とかなるんじゃないかと・・・思った。

「「桜吹雪ー!?!?!?!」」

ゴオオオオオオオオオオ!!!

突如として桜が舞っていたのだ。まるで桜の竜巻、その言葉が似合う。巻き込まれれば切り刻まれそう。

「ち、アリス。やるぜ」

「ええ、わかってるわ」

私とアリスはそれぞれスペカを構えて発動しようとした・・・



咲夜 Side

ギャグによって落ちた魔理沙はしばらくしたら復活するから無視して私は初めて会う人物と挨拶をした。

「初めまして。私は十六夜咲夜といいます」

「私はアリス。アリス・マーガトロイド」

たいして先程のを驚いていないのを見るとどうやら大丈夫そうね。  
・何か私と同じツッコミ属性を持つてるような・・・いないような。

「とりあえず今やる事はさっきの妖精を狂わせた元凶と戦う事かしら」

あら・・・この人。気付いていたのね

「ええ・・・はっ!」

バツ!!

私はナイフを一本投げる。そこには何もなさそうに見えるのだが・・・

ブウン

空気が歪む。そして歪んだ空気はやがてその姿を現す。

「・・・・・・・・」

姿を現したのはトランペットを持っている少女だった。

だがわかるのは、彼女は人間じゃない、というのはわかった。何故わかったかというと、先程にも似たような気配を感じとったからだ。

【数十分前・・・詳しく言えば魔理沙とアリスが戦っている頃】

「いやー・・・まさかあんさん達も異変の調査にきとるんなんてなー」

「うちのお嬢様が寒いと、我慢が出来なくなつたみたいでね、だからこうして調査中だよ」

私達は調査をしていたが特に進展は無く、辺りをさ迷っていた。そんな所に俊一君がやってきたのだ。話によれば、私たちと同じくこの異変を調査しに来たとのこと。案外私たちは無茶苦茶に進んで道は正解だったらしい。

「だったらちようどいいわね。人数は多い方がはかどるし、一緒に協力しましょう?」

「いいで〜。断る理由も特にあらへんしな」

なんなく俊一君も協力を得てくれた。そして改めて調査を再開しようと思っただけれど・・・

「あら・・・？」

なにか身体が重く感じるわね・・・さすがにメイド服にマフラーだけじゃ寒すぎたのかしら・・・風邪なんて今は引いてられないのだけれど。

「これは・・・」

風邪かと思っただけれど、どうやら違うようだ。私以外の人も身体に異常が起きているようだし、美鈴が何かに気付いたようだ。

「！・・・皆さん気を付けてください。敵が近くにいます」

確かに何かの気配がある。人ではない何か。同時に曲が聞こえてくる。これが耳に入ってから身体が重くなるような、鬱な感じになってくる・・・はっ！？危ない危ない、曲に入りすぎたわ。

「とりあえず曲が流れてる方へいってみよう。何かあるかもしれない」

「わかりました！」

賢太君を先頭に私たちは動き始めた・・・と思ったら俊一君が話しかけてきたわ。

「悪いんやけど、魔理沙達を迎えに行ってくれへんか？咲夜さんならいざとなったら時止めもあるし・・・」

「・・・いいけど、貴方が行ってあげた方がよくないかしら？」

これは私の予想にしか過ぎないけど、絶対魔理沙は・・・まあいいのだけれど。

「そうかいな？でもなーんか行かない方がええような気がしてな・・・」

そこまで言うなら断るのも時間の問題だし、さっさと行くつもりだよ。

【そして現在】

「・・・」

トランペットを持っている少女は無言のままこちらを見ている・・・？

「（おかしい）（）」

無表情すぎる。明らかに心ここにあらず、という感じだ。まだまだ

察知能力は得意じゃないけれど、魔力とかではなさそうだ。となれば……他は思いつかない。

「……まさか……いや、でも……」

？アリスが何かに気付いたのかはわからないが、驚愕の表情になっている。いったい何が……？

「……」

ザッ

む！逃げ出したわ急いで後を……というよりも時を止めて追撃して「咲夜、攻撃はしないで後をつけるわよ」アリスに思考を遮られてしまった。でも一理あるかしらね。

「さ、いくわよ」

私はアリスと共に追跡をし始めた

【少女追跡中……】

私たちは少女を追跡していた所、妙な所に来ていた。

「ここはいつたい……」





も見てみたい・・・はっ！？そんなどうでもいいことを考えていたらトランペット少女が合流されてしまったわ・・・。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

三人の少女たちは無表情のままこちらを見ている。・・・明らかに異常だ。ここまで無表情なのは何かあると思うのだが・・・

「・・・全員、先に行きなさい。こいつらは私がやるわ」

「アリス？」

魔理沙が疑問の声を上げる。疑問に思ったのは私達も同じだ。相手の力量がわからない以上、一人で戦うのは危険だ。せめて同じ人数で戦うのが好ましいのだが・・・

「いいから、私を信用しなさい。片付けて後で追いつくから」

「でもなあ・・・」

言いよどむ俊一君。それもそうよね。

「この先って・・・どこに向かえばええんや？」

「・・・そこなの！？心配はしないの！？」

「冥界のどこかに白玉楼というところがあるわ。恐らくだけど、春が来なかった原因はそこにある」

「おーそ・なのかー。じゃあ行ってみるか！」

そういつて魔理沙は動き始めてしまった。俊一君も行ってしまう。

「・・・大丈夫なの？」

「まあ、ね。心配する必要はないわ。少なくとも負けはしないから」

すごい自信ね・・・

「咲夜さん、ここは信じよう。アリスと付き合いの長い俊一と魔理沙は先に行っただ。きっと大丈夫なのだと思う」

賢太に言われて考えるけど、本当にそうかしら・・・でも、

「悩んでる暇はないわね・・・行くわよ二人とも」

そうして私たちも目的地の白玉楼に向かうのであった。

アリス side



Stage 4 騒霊の異変（後書き）

霊夢

「ついに【アレ】がほーーーーーんの少し出てきたわ」

信太

「【アレ】？なんだそれ・・・」

霊夢

「この小説の、本当に最後の「ネタバレ禁止ーーーー！！」だれ！」

謎の巫女装束の少女？

「まだまだ【アレ】は伏せる事が多いの！謎がありまくるかもしれないけど、これからもこの小説をよろしくねーーーー！！」

信太

「・・・誰なんだよ！」

霊夢

「キャラかぶるから出てくんない！！！」

咲夜

「・・・なにかどこかで見たような・・・」

Stages 白玉楼(前書き)

霊夢

「・・・いい加減主人公の私は出番まだなのかしら・・・」

信太

「霊夢、落ち着け落ち着け」

マッサー

「相変わらず、スペルカード？なにそれおいしいの？的な戦闘です」

霊夢

「はたして戦闘といえるものなのかしら・・・」

## Stages 白玉楼

賢太Side

アリスにあの三人の少女を任せて俺達は冥界を探索していた。その中で・・

「それにしても長い階段だなー」

「どれくらいあるんやろうなあ」

とてつもなく多い階段を飛んで向かっている。この先に力が感じられて来ているからだ。

「・・・あ、もうすぐ見えて来ますよ」

どうやら階段の頂上のような。結構長かったな、歩いて渡ったとしたら相当な時間がかかりそうだ。

「これがアリスの言っていた白玉楼かしら？」

随分大きい屋敷だ。紅魔館よりもでかい・・・か？

「さあ中に入ろうぜ」

そう言って門を飛んで屋敷の中に入ろうとする魔理沙・・・



「(刀・・・か)」

長いのと短い刀を一本ずつ持っている。アレデ刃を生み出して攻撃してきたようだ。

「・・・・・・・・もう一度言います。こんな所に何か御用でしょうか？」  
再度俺達に用件を聞いてくる。

「この辺りで、春になってるのに冬の状態になっている理由を調査しているんだ。で、この屋敷の中から凄い力を感じたからな・・・何かあると思っ・・・・・・・・!？」

ザアアアッ!!!!!!

俺は最後まで喋る事は出来なかった。何故なら少女が近くまで接近していて斬りかかっていたのだ。俺は辛うじて避けて距離を取る。

「その攻撃は肯定の意味を備えてるが・・・ここで間違いなさそうだな」

「ええ、そうですよ」

少女はコクリと頷いた。その目にはまるで侵入者を倒す目だ。

「大きく出たわね？まだごまかしようはあつたんじゃない？」

「問題ありませんよ。貴方達全員、ここで眠って頂きます。

白玉楼の庭師、魂魄妖夢・・・・・・・・いざ参る!!!!!!」







チャキン  
ズバアアアアアッ！！  
血が二人から飛び出ていた。

「なっ！？」

二人はそのまま地面に倒れてしまう。命に別状はなさそうだが、重傷に見える。

「言った筈です。貴方達全員、ここで眠って頂くと」

妖夢は鋭い目つきでこちらを見ていた。

くっ、とりあえず俊一と魔理沙を治療しなくては・

「賢太、美鈴。二人は先に行きなさい」

「咲夜さん！？それよりも二人を・・・あれ？」

二人がいつの間にかいない？

「二人は私が預けられる所へ送りました。心配はいりません」

時止めか・・・二人が意識を失っているから、運べたのか。

「でも咲夜さん、一人で大丈夫なのですか。さっきの攻撃は・・・私でもわからなかったですし・・・」

さっきの攻撃とは当然俊一と魔理沙を倒した技だ。スペカだったのかどうかもわからない。

「大丈夫、先に行きなさい二人共」

しかし咲夜さんは俺達を先に行かせたいようだ。

「・・・わかりました・・・行きましょう賢太さん」

美鈴まで!?

「咲夜さんがここまで言うんです。考えがあるんでしょう」

そう言っつて咲夜さんを見る。咲夜さんは頷いた。

「わかった・・・じゃあ先に行く。気をつけて!」

そう言っつて俺達は飛び始めて屋敷に入ろうとする。

「そうはさせないと・・・言った筈「はああっ!!」「!!」

ガキイイイイ!!!

咲夜さんのお陰もあつてか、俺達は入る事に成功した。

油断した・・屋敷に侵入者を入れるなんて・・。いますぐ私も後を追って止めたいけど、目の前の人物がそうはさせてくれないだろう。ならばこいつを迅速に倒し、幽々子様に危害を加える者は倒す！幽子様が何故西行妖の封印を解きたいと言った真意はわからない。だけど主の命には従う！それが使命です。

「（しかし何故こいつは私の技がわかつたんだ・・・）」

先程私が二人を倒した時の技・・・というより斬り方は未完成だ。元々魂魄流とは違っているので、覚えるのに相当時間を掛けてしまった。

「（おじいちよ・・・師匠も覚えるのは難しいと言っていた・・・）」

もし完璧にしていたら、先程の攻撃をカウンターとして喰らわせていた。私もまだまだ未熟という事か・・・

「・・・貴方に聞きたい事があるのだけれど。因みに私は十六夜咲夜よ」

「・・・なんでしょうか」

時間稼ぎのつもりか？ならば質問が終わった時に斬る！！！！

私は先に足に力を込めて置き何時でもダッシュ出来るようにする。

「貴方、いつたい誰からさっきの【居合】を教わったの？」

私はその言葉を聞いた瞬間私は足が止まってしまった。驚愕の目でこの人を見る。

「・・・言い方を変えましょうか。最初に貴方が現れた時に使ったのも、そしてさっきの居合も・・・貴方、何故【滅斬流派】の技が使えるのかしら？」

私は驚愕の表情になるが、冷静に考える。

「・・・そういう貴方も、何故知っているのですか？見た所刀を使うわけではないようですが」

先程使っていたのはナイフだ。この人に別の武器があるとは考えにくい。

「・・・知ってるだけよ。ただそれだけ・・・でもなんとなく、見えて来た気がするわ」

見えて来た？一体何が見えたというんだ？

「・・・・・・・・」

目を静かに閉じている。なんだ？何をするつもりなんだ？

「思えば不思議に思う事だらけだった。あの人が事故で意識不明になって、奇跡的に回復した後のあの人は、何か隠してるようだった」

静かにゆっくりと、そして自分の思いを話しているような、そんな感じだ。

「多分、私を巻き込まない為に隠してるんだとすぐに思ったわ。全く、バレバレというか、なんというか・・・」

笑っているのか呆れているのか、口元には笑みがこぼれている。

「それでも私はあの人が何を隠しているのか知りたかった。でも結局は解らずじまい・・・そう、幻想郷に来るまでは」

そうしてこの人は目を静かに開いた。

「この幻想郷に来た時、私は思った。ここには何かあった・・・いやあると」

ナイフを構え、こちらに向かおうとしている体勢だ。私もそれに応じて同じ体勢を取る。

「そして人里の稗田家にお邪魔した時、古い書物を見て確信した・・・  
それでも新たに疑問に思った事はたくさんある。でも私は・・・」

バツ！！

ダッシュしてこちらに迫って来た！

「あの人を・・・あいつを信じる」

この人が誰の事を言っているのか・・・なんとなく、わかる気がした。私のもう一人の師匠であり、憧れの人・・・。

「はあああああっ！！」

「たあああああつ!!」  
迫り来る相手に合わせてカウンターを仕掛けようとする。

「散りなさい……」

「刹那によりて斬る……」

この間合い……貰った!!

「真空滅牙「遅い……」!?!」

いつの間にか懐にまで入られてしまっていた。そして私が見たのは・

サアアアア……

風が……吹く。

ズザアアツ!!

「がっ……はっ……」

「だから私は負けられない。あいつの真実を知る為にも……ね」

瞳の色を紅と蒼の目にした十六夜咲夜だった。



Stages 白玉楼（後書き）

霊夢

「え？なにこれ。Stage6に向かったの原作にいないやつじゃない」

信太

「霊夢はスキマルート。魔理沙は治療中。咲夜さんは途中から？…あるえー？」

美鈴

「なんという出番が…ここで活躍すれば！」

咲夜

「それはどうかしらねー…ねえ？」

マッサー

「ふうん。次回お楽しみに」

Stage 6 - 1 桜の鳴く頃に(前書き)

???

「願はくは 花の下にて 春死なん その如月の 望月の頃」

## Stage 6 - 1 桜の鳴く頃に

賢太 Side

「これか、今回の異変の原因は」

妖夢の相手を咲夜さんに任せた俺達は白玉楼の探索をしていた。そしてすぐに原因らしき桜の木を発見した。

「この桜にとてつもない力が集められています。恐らく間違いないと思います」

美鈴も力の大きさは感じ取れているらしく、その多さに冷や汗を流している。

「それで・・・どうするか」

「そうですね・・・」

力づくという手は真つ先に思い付いたが、それが通用するとは思えないが・・・

「霊夢さんがいれば封印という手段もあったのでしょうが・・・」

・・・そういえば信太と霊夢はまだ見ていないな。どうしたのだろうか。

「・・・賢太さん、ここは私が桜に包まれている力を取り込んでみせます」

「はっ！？そ、そんなこと出来るのか!？」

明らかに気とも波動とも違う力を取り込んでもいいのだろうか、それ以前に美鈴にそんなことが出来るのだろうか・・・

「わかりませんがやってみる価値はあります。このまま時間消費するのも勿体ないですし・・・それではやってみます!」

美鈴はそう言っつて桜の方へ歩いて行った。

【あらあら・・・そんなことされたら、せつかく集めた春が無駄になっっちゃうわ〜】

サアアアアア・・・

蝶のような弾幕、それが辺りを飛んで来て俺達に迫ろうとしていた。

同時にこれを受けたら危険だと、本能が告げていた。

「くっ!!--」

「ちい!!--」

即座に距離を取り、蝶の弾幕から離れる。そしてそれを上空から放ったと思われる者へと顔を向けた。

「よくここまで来れたわね。お茶とかは出ないけど歓迎するわよ〜」

・・・な、なんかほんわかした人が出てきたな。

「私は西行寺幽々子。この白玉楼の主。よろしくね。」

マイペースで天然なんだろうか・・・まあ、今はそんなことはどうでもいい。

「今回の異変、春が何時までたつても来ないのはあんたの仕業か？」

「ええそうよ。各場所の春を集めていたの。」

春を集めるだと・・・そんなことが出来るのか。

「それでこの西行妖に取り込ませて、満開にするの。そうすればこの西行妖に封印されている人が蘇るって言われているんですって。」

満開・・・やばい、後二分か一分で満開じゃねえか！

「とりあえず邪魔をするなら・・・貴方達、生きて帰さないわよ。」

ゴオオオオオオ・・・

何時でも命を取られるような殺気、それが幽々子の殺気だった。

「行けますか賢太さん。」

「ああ、わかってる。大丈夫だ。」

俺達はそれぞれ戦闘体勢を取った。

「あらあら、やる気満々ね．．．でも」

【貴方達に耐えられるかしら？死の恐怖を．．．】

ドクン．．．

心臓が強く高鳴った。

「あ．．．れ．．．？」

気付けば真っ暗な所に自分はいた。どうしてこんな所にいるんだ？

「．．．．．」

酷く身体が重い。身体全体がだるく、立っていられなくなる。

ドサッ

「……………」

そのまま倒れてしまう。喋る事も面倒になってしまったのか、声も出せないでいた。

思考する事も…なにか、したくなくなつて…来た…このまま…  
寝て…しまおう…か…

「賢太さん！！しっかりしてください！！！」

「はっ！？」

美鈴の声で我に返つた俺は辺りを見る。先程の何も無い真つ暗な空間ではなく、元の所へと戻っていた。

「俺は一体何を…？」

「多分あの人の能力を使われたのでしよう」

「ん…正解」

扇で口元を隠しているが、微笑しているように見える。

「私は死を操る程度の能力を持っているの。能力無しでは破られた

事は無かったのだけれど・・・」

そう言つて幽々子は美鈴を一回見た。

「そつちの人は能力関係なく、打ち破つたのよ。凄い精神を持ってるわ」

美鈴が・・・俺は声を掛けて助けられたのか。

「能力が意味がない以上、実力でかかつて来たらどうですか？」

「・・・そうね。そうしましょうか。このままやることを潰されるのも嫌だし」

今度こそ戦闘体勢を取る俺達。同時に幽々子も空に浮かんでいた。

「貴方達二人共近距離なのよね。厄介だわ」

亡郷『亡我郷 - 自尽』

ガガガガガガガガガッ!!!!!!!!!!

スペルカードが発動されるが・・・これは、

「弾幕が濃くて・・・近寄れねえ!!」

「くっ!!!!!!!!!!」



遠距離からの大量の弾幕で勝つつもりでいるのか・・・しかしこれでは時間稼ぎにしか・・・

「こうしていれば、十分に時間は稼げるでしょう？その間に春を全部西行妖が取り込み終われば、目的は達成なのよ」

そうなたらどうなるかわかんねえぞ！？くっ、どうしたら・・・

「賢太さん・・・私があれを吹っ飛ばします！」

「美鈴・・・まさかあの技を使うのか！」

あの技はまだ調整が効いていないし、なにより上手くいくかどうか・・・

「だけど破壊力はあれ以上に私にはありません・・・大丈夫です。あの人には当てませんから！」

言葉を言い終わった後に気を高める美鈴。

ゴオオオオオオオオ！！！！！！！！

気のオーラで美鈴に迫ってくる弾幕は掻き消されていく。

「あらこれは・・・まずいかしら？ 幽曲『リポジトリ・オブ・ヒロカワ - 神霊』！！！」

ザアアアアアアアア！！！！！！！！

新たな弾幕を出して来た幽々子。

「かぁ・・・めえ・・・」

独自の体勢をとり、手から蒼い光が出てくる。いわゆる、溜めの動作だ。このままいけば美鈴は間違いなくあの技を発射するだろう・・・

「はぁ 斬符『斬霧雨』」わああああああっ!?!」

ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザ!!!!!!  
!!!!!!!

まるで雨のような斬撃の弾幕が幽々子の放った弾幕を相殺した。ついでに美鈴も避けてこちら側にやってきた。

「別に相殺しなくてもよかったんじゃないの? 門番がなんとかしたと思うんだけど」

「・・・なんとなく邪魔した方がいいと思ったからだ」

先程まで美鈴がいた所に二人がいた。

「さーて、主役は遅れて登場なのよ」

「遅れすぎな気がするがな」

博麗神社に住む霊夢と信太だった。

Stage 6 - 1 桜の鳴く頃に（後書き）

マッサー

「次回は少し時間を遡って霊夢と信太のSideになります」

藍

「私か」

信太

「フォックスウウウウウ！！！！！！！」

藍

「狐違いだ」

霊夢

「ラーメンのナルトっておいしいよねー」

藍

「凄い遠回しに言っなー！」

Stage 6 - 2 桜の変化（前書き）

???

「ほとけには 桜の花を たてまつれ 我が後の世を 人とぶらは  
ば」

## Stage 6 - 2 桜の変化

霊夢 side

「……うごごごよー……………!!!!!!」

なんか猫の妖怪に札投げられて気が付いたらどこかの屋敷にいた。  
中々立派な屋敷だわ……。ってそうじゃない。

「霊夢、少しは落ち着け……」

「……まあ私も騒ぎすぎた感はあるわ……」

でもね、これだけは言わせて信太……

「あの気持ち悪い目が大量にあるのを黙って見てられる？」

「……あまりない」

ずいぶん悪趣味な背景よ全く……

「とりあえずこの屋敷に入ってみるしかないな。他に道などわからないし」

私は信太の言葉に賛成し、この屋敷に入ることにした。

「じゃあ行くわよ」

「……扉あるんだからそこからはいるつよ」

罨があるかもしれない入口から入るなんてそんな手には・・・

バチバチバチバチバチバチ！！！！！！！！

「・・・だろうな。俺達は連れて来られたんだから、罨を張って  
いると思っただよ・・・」

だったらそれを早く言いなさいよ・・・身体をぶすぶす言わせなが  
ら私は忠告が遅かった信太を恨めしく思った。

【少女回復中・・・】

「よし、今度こそ行くぞ」

屋敷の扉を開けて、中に入る・・・

「・・・霊夢」

「・・・ええ、わかってる」

そのままの姿勢で私たちは止まる。・・・明らかに殺気が私達に向  
けられているからだ。

「（・・・それにしては何もしてこない・・・）」

殺気を放っているのはかなりの力を持つもの。恐らくは妖怪だろう。数分経過しただろうか。埒があかない・・・こうなったら。

「こそこそしてないで、正面から出てきたらどう！いるのはわかっているのよ！」

私はどこかに隠れている存在に向かって声を掛けた。そのまま数秒が経過する・・・

『・・・流石、博麗の巫女というべきか』

ドオオンドオオン！！！！

突如として声が響いたかと思えば、弾幕が放たれてきていた。

「そこ！！！」

「ふっ！」

ヒュン！！

ザアア！！

私は追跡型弾幕を、信太は斬弾幕を一見何もないような方向へ飛ばす。だが私達にはそこに飛ばす意味はある。

『・・・いや、訂正だな』

ドオオオオン！！！！！！

再び声が聞こえた。今の私達の弾幕は何かの防御壁のような物に防がれてしまったようだ。

「流石は博麗の巫女とその守護者・・・かなりの実力はあるようだ」  
九つの黄色い尻尾。そしてこの感じ、間違いない。九尾の狐だ。その実力はかなりの物と言われている。古くからの書物からの知識だけど・・・。とにかく油断すれば間違いなくこちらが負ける。私達は油断なく身構える。すると狐は私達の予想に反する事を言った。

「待ってくれ、攻撃したことは詫びる。別に私はお前たちと戦うためにここに連れてきたわけではないんだ」

そう言っ頭を下げる狐・・・は？

「それじゃあなんでここに私達をつれてきたのよ？」

「説明は屋敷内でしょう。ついてきてくれ」

正直信じられないのだが、九尾の狐がわざわざ頭を下げているのだ。だったら少しぐらい聞いてみるぐらい良いだろう・・・多分。

「（霊夢、どうする？）」

「（・・・行ってみましょう。不意打ちをするようにもみえないし）」

そうして私達は屋敷の中に入れて貰う事になった。因みに狐は藍と  
いうようだ。



【少年&少女移動中・・・】

屋敷の中に入って私達は出された茶を飲みながら話を聞いた。

今回の異変を起こしているのは藍の主人の友人である事。友人は亡霊であり、西行妖の封印を解こうとしていること・・・そうすれば自身が消滅すること。そして主人はそれに関与せず、ぎりぎりのところで桜の力を使おうとしていることも・・・

「これが今回の異変の全貌だ」

藍の話聞き終わった私達はあまりいい気分ではなかった。まあ信太は何を思ってるかわからないけどね。でも・・・私の次の行動は決まっている。

「それで・・・二人には頼みたい事が「却下。私達だけで充分よ」・・・何？」

藍は予想外だったのか、私を睨んでいる。でも正直本当の事だ。

「今の貴方じゃ、足手まといなよ。正直まだ妖精の方が役立つわ」

「・・・何故だ、と聞いておこうか」

一応九尾の狐としてのプライドがあるみたいね、殺気がピリピリと伝わってくるわ。・・・さてまあ、理由をぶっちゃけちゃいますか。

「一緒にきて手伝うのは構わない・・・けど、それが死ぬためな

「来ないでほしいわ」

「なっ!?!」

「考えていることがばれたことに驚愕をしている。・・・まあわかったのは勘なんだけど。」

「それにね、あんたもあんたの主も（多分だけど）過去に囚われすぎなのよ。いつまでも引きずってたら、前には進めないわ」

「・・・・・・・・」

「藍は顔を伏せて静かになった。・・・少し言い過ぎたかしら？」

「さて、早く異変の場所に行かせてくれないかしら？このまま時間を無駄にできないの」

「藍はそのまま動かない・・・？いったいどうしたのかしら。」

「!、霊夢、危ない!?!」

「バツ!?!」

「いたっ」

「信太が私を押し倒すような形で体当たりしてきた。同時に私は見た。」

「式輝『狐狸妖怪レーザー』」

藍がスペカを発動していたこと。そしてそのスペカが向けられていたのは……

ジュアアア!!!

「あぐうあ!!!」

私が見つ立っていた場所で、そのスペカを信太が直撃はしなかったものの、命中した。私を庇ったせいで。

「巫女よ……好き放題言ってくれたな……」

藍はというと、怒り狂っている状態だ。なんの逆鱗にふれたのだろうか。

「何も知らずによくもまあ言ってくれる……私だけならいざ知らず、紫様まで侮辱するとは……許せん!!!」

紫……それが主の名前? ……まあ今はそんなことどうだっていいわ。

「つつつう!!!」

信太は背中にひどいやけど傷を負っていた。ぱっと見た所命までは別状はなさそうだ。

「信太、無事?」

「ああ、なんとかな……」

本人も大丈夫そうね。立ち上がってくれた。でも無理はできなそう。



驚愕の表情をしている藍。だが、私はそのままスペカ発言をした。

「霊符「待ちなさい!!!」…………!!」

誰かが制止した方向を見たが、気付いたら穴に落つこちる感覚になつていた。

「その先が今回の異変の場所よ。解決は貴方たちに任せます。式の無礼をお許しく下さい。そして…………ありがとう」

最後にそんなお礼を言われた気がした。

【少女&少年スキマ落下中…………】

「信太、無理しないでよ」

「あ、ああ…………」

さっきのスペカを使った信太は一見平気そうだが痛みはあるようだった。本人は隠してるようだけど、私は見逃さなかった。

「向こうに門番組がいるようだし、そつちで休んで下さい。あとは

私ができるから」

「・・・わかった」

さて、これで周りを気にせずやれるわね。

「あらあら、厄介なのがきたわね」

「人をばい菌みたいに言うな」

亡霊・・・確か幽々子だっけ？空をとんでいて後ろに扇が広がっていた。

「貴方には本気でいかないとまずそうだわ・・・桜符『完全なる墨染の桜・開花』」

スペルカード宣言と共に弾幕が放たれていく。それは徐々に弾幕の密度が上昇していくものだった。

「よーし・・・やってやるっじゃない!!」

気合を入れて避け始めた私だった。これが終わったらようやく暖かい春がくるのね〜と知っている反面、何か嫌な感じがする。そう勘が・・・

「つつ!?!?!?」



「藍様！？紫様！？返事をしてください！！！！」

私は白玉楼から離れた場所で戦いの様子を式神の力で見守っていたけど、幽々子様の異常な力の増幅が起きたことで爆発が起き、状況がわからなくなってしまうた。

「こうなったら私も行かなくちゃ・・・」

お役に立てるかわからないけど、それでも黙って待つことなんてできないです！！

「・・・ん？」

なんか近くに大きめな力が・・・

「ま、真後ろ？！？！？！？」

真後ろに背中をつけていた桜が光輝いていた。

「わ！？わわ！？ど、どうしたら？！？」

そういつている間に光り輝いた桜は、光が何か人型になっていった。

「（・・・綺麗・・・）」

私は心の底からそう思った。さらさらしてそうな腰まで伸びている黒い髪の毛。優しそうな顔立ち。綺麗な人だった。

「・・・ん？」



前にいる人は私に気付いたらしい。・・・はっ!?綺麗すぎてみとれてしまいました。」

「すみません、少しいいかな?」

「はい!!なんですか!お姉さま!!」

その人はなぜかこけてしまいました・・・何故でしょう?

「・・・コホン。それで聞きたいことが「あーーーーー!?」?」ど、どうした!?!」

こ、こんな所でのんびりしてる暇なんてなかったんだ!!

「は、早く行かないと藍様が、紫様が・・・」その話、移動しながら詳しく聞かせて「・・・え?」

その人は真剣な目で言っていた。

Stage 6 - 2 桜の変化（後書き）

紫

「次回、Stage 6 - 3 誓いの桜。お楽しみにね」

外伝 Stage プリズムリバー姉妹（前書き）

マッサー

「今回は外伝・・・というより次の章の準備？」

レイラ

「久々の現実 Side ですね」

## 外伝 Stage プリズムリバー姉妹

アリス side

「……これはどういうことかしら。私はあの騒霊の相手をして  
いた筈だ。なのに何故、

「……その相手がいなくなってるのかしら」

おかしい、明らかにおかしい。騒霊は合体スペルカードを発動させ  
て私に向けて撃っていた。私はそれを迎え撃とうとスペルカードを発動さ  
せようとした。しかし相手がいなくなってしまった。

「それにしても……さっきの騒霊は……」

あの騒霊は間違いなく自我がなかった。私は話しか聞いたことしか  
ないが、聞いた話で特徴が一致していた。

今より大昔に起こった、【幻闇異変】と……

「……と、そんなことより白玉楼ね」

先程白玉楼で大きな爆発音が起きた。もし【アレ】が少しでも存在  
していて、集められた力にとりついてしまったら？確実にそれが影  
響かもしれない。

「急がなくちゃ……」

私は急いで飛んでいった。

【外の世界】

アラスSide

「はああ!!!」

ズバアッ!!!

『ガアアアアアアッ!!!!!』

俺は実態を持たない影をぶった斬る。既に斬った数は百を越えていく。

「うーん・・・正由はまだ終わらないんでしょうか？」

「まあまだ10分ぐらいしか経ってねえんだから仕方ないだろ」

あれから俺達是一本の桜に背中を預けて眠るように座っている正由に近づけさせないように戦っている。最終防衛ラインは渚とレイラだ……まあそこまで行かせねえがな！

「だけどごう派手にやっちゃいけないのが残念だねえー。どうにかならないのかい？」

「そうすれば楽なのだ」

実際俺もそうしたいが、残念ながらそれは出来ないのだ。結界なら華扇が出来るが、そうすると正由に影響が出てしまう。

正由は今、魂だけ実態化して幻想郷にいる。

つまり簡単に言えば幽体離脱だな。

で、今正由の身体だけしかないという事。今正由の身体に攻撃されたらどうなるかわらない。というよりは、正由が寄り掛かっている桜にも攻撃されないようにもしなくてはならない。

ここまで言えばわかるだろう？

「俺達が力を無駄に使ったら桜にも影響を及ぼすかもしれないからな、我慢しようぜ！」

今面倒を起こせば正由も戻ってこれなくなるし、幻想郷もただじや済まなくなるかもしれない。だから俺達は手加減して影と戦っていた。

「そうですか……何か来るようですね」

華扇が何かに気付いたようにある方向を向いた。勇儀やルーミア、

もちろん俺も気付いてそちらの方を見る。

それは空間が開きそうになっているものだった。バチバチと音を立てるようにそれは開いていく。

「なんだありゃ」「きゃあああああああああああああああ！！！！」「！？レイラ！？」

レイラが大きな悲鳴を上げていた。いや、これは……！

「空間がレイラに反応している！？」

まさかこれはレイラに反応して空間が現れたのか！？……っと！そんなこと関係ない事を考えている場合じゃねえ！

「レイラ！！しっかりしろ！！！！」

今のレイラは霊体なのだ。これ以上空間と力を共鳴させていたら、消滅してしまう。

「ア・・ラ、ス、さ・・ん・・あああああああああああああ  
あ！！！！！！！！」

駄目だ、無理に止めようとすれば悪化するようになってしまう……  
じゃあねえな！

「周りにいる雑魚は頼むぜ！！」

「おう！任せときな！！」

新たに再び影が出現してきたのを勇儀達に任せて俺は・・・

ガバツ!!

「うっ・・・おおおおおおお!!!!!!」

「あ・・・アラス、さん!？」

中断させると危険かもしれないのなら、俺もそれに混じってレイラの力の消費を軽減してやればいいことだ!

「はああああああああああ!!!!!!!!」

なるべくレイラの力を使わないように意識して俺の力を送り込む。そうして空間を開けさせるのだ。

「アラス!あまり力を出すな!!桜に影響が出る!」

俺の力を感じとって渚が声をかける。

「わかってる!それぐらい加減はしてるからな!」

とは言っても速く終わらさねえとレイラがやばくなってしまっからな・・・。

「・・・アラスさん、私は平k「AHOーー!!」きゃう!？」

レイラはなんでグーで叩かれたかわかっていないようだ。全く!どうして俺の知り合いにはこうも自分が犠牲になるうとするんだ!・・・ん?俺もか?まあそんなことはどうでもいい!!



「俺は守りたい者がいるから【守る】んだ。とーぜん、レイラも含まれてる。だから一人で背負おうとするな」

そこまで言うとレイラは泣きそうな顔で笑顔を見せた・・・ったく。

グオン！！

おっと、そんなことを言っていると、空間が開き終わっていた。

「・・・何か来ます！」

背中にしがみついているレイラがそう言った瞬間、音楽が響く。

「『大合葬』霊車コンチェルトグロツソ・怪』！！！！」

響いたと同時に大量に弾幕・・・か？それが迫って来ていた。放って来たのは弾幕の後ろにいる三人だろう。

「まさか・・・あれは！」

華扇が気付いたようだ。本物かどうか知らないが、仙人を名乗っているのは自称じゃないということか？まあどっちでもいいが。

「【闇】に操られたか・・・」

これではつきりしたな。数百年前の戦いじゃ決着はつかなかったよ  
うだな・・・まあ、正由もそれを向こうで感じてるだろうな。



「同意」

・・・オマエラスコシハシンパイシテクダサイ。

弾幕が全弾命中したというのに、痛みは全くない。気分も悪くない。特に異常は俺にはない。

「レイラ？」

レイラは泣いていた。それがなんの涙かはわからないが、少なくとも悲しみの涙じゃない筈だ。

「アラス、さん・・・」

「・・・なんだ？」

俺は三人の方を向く。レイラが言おうとしていることは、わかっている。

「姉さん達を、正気に、戻して上げて下さい!!」

「・・・おう!!」

泣きながら俺に頼んだレイラの気持ちを答える為に俺は、三人を正気に戻す・・・もとい気絶させるぐらいの力を出す。闇にあてられた

ぐらいのものならば、気絶で充分だ。だが力を出せば危険が・・・と思うだろう？・・・だが、

「手助けはいらない・・・かな？」

「当然よ！！」

もう正由は戻って来ていたのだ。早いな。

「もう向こうはいいのか！」

「うん。ちゃんと約束したから、紫も元気になった」

それはよかった・・・な！！

「はあああああっ！！！！」

力を大きく発動し、オーラのように身体から溢れ出す。

「ブリザード・バスター！！！！」

ゴオオオオオオオ！！！！

氷色の光線を発射させる。ある技のNORMALレベル・・・もとい弱くした技だ。

まあ一直線だから避けられるが・・・

「見通してんだよ!!」

手に魔力を集中させきつた俺は魔法を発動させる!

「フィンプル!!」

ゴオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

氷の竜巻を起こして三人をまとめて吹っ飛ばす。

「はっ!!」

これぐらいじゃ気絶はしないだろうから、俺自身も竜巻の中に入る。

「とあっ!!」

ゴスッ!!

「!?!?!?!」

拳一発入れて気絶させた。さてあと二人だな。

元々戦うタイプじゃなさそうだから、それほど苦勞はしないな。

【少年フルボッコ中・・・】

「よし終わりだ!!」

三人を気絶させて今はスースー寝息をたてている。戦闘シーン？なにそれ美味しいの？

「さて、それでは私達は幻想郷に戻ります。何時までも私達が外にいるわけにもいかないので」

・・・あれ？まさかの華扇、ルーミア、そして勇儀が幻想郷に戻るなんて・・・

「・・・ガッツポーズをするのは何故だい？アラス」

「へ、あ、いや別になにも？」

ついつい身体が正直に動いちまったぜ・・・。いやいや悲しんでるよ？別にプロレス技を受けるのがなくなるからガッツポーズをとったのではなくて・・・

「アラスさん・・・」

ん、レイラが話し掛けてきた。

「私は、姉さん達と幻想郷に行きます」

・・・うん、まあそういうと思った。ここで「貴方と一緒にいます！」なんて言われたらいろんな意味でやばかっただろうな・・・。

「私、思い出したんです。私は・・・」

俺はレイラの頭を撫でる。

「安心しろって！レイラがどんな奴だろうと、俺は嫌いにならない。さっきも言ったろ？守るって」

「！・・・は、はいっ！」

泣きながら嬉しそうに、それは凄く笑顔だった。

「だから、安心して行け。俺は不死なようなもんだからまた会える  
」！」

「はいっ、アラスさん、ありがとう！！」

こうしてレイラ達は幻想郷に行った・・・

「何勘違いしてるんだ？アラス」

「ひよ？」

レイラ達が幻想郷に行った後、空間の割れ目をどうしようかと考えていたら正由が声をかけていた。しかもなにか嫌な予感がする……

「お前も行くんだぞ？」

……

「ハアツ！？」

正由の言葉を理解するのになんかかかった。

「華扇達を帰らせたのは、まあ以前から説明させたように外にいきると影響が出てしまうから。これはわかるな？」

それはわかる。幻想郷に住んでいた者が帰りたくなるからだ。

「向こうで紫に言われたんだがどうも空間が不安定なようで、幻想郷の住民が知らずの内に現実にも、つまりこっちに来てしまうこともあるんだ」

・なるほど、つまり溜め込まない内に帰らせた方がいいのか。

「そしてこれがアラスが幻想郷に行く理由なんだが……」

正由は凄い言いたくない表情をしている。



「アラス、お前さ、勇儀と久しぶりに会った時どれくらいボコボコにされた？」

「いやまあ、かなり・・・半不死身じゃなきゃ死んでるぐらいの・・・それがなんだよ？」

そう言うと正由は「あー・・・そうだろうなー・・・」という表情だ。隣の渚は「・・・頑張れ」といった表情だ。というか渚は何かわかつたのか？

「そのなあ・・・俺は幻想郷には行けないし、渚は力は戻ってないから無理だから、アラスに頼むのだけれど・・・」

「な、なんなんだよ？」

ここまで遠回しに言うのは何かまずい事を言うのか！！！！

「・・・萃香に会いにいつてあげて」

「え・・・？」

鬼の中でもっとも親しいであろう鬼の名前がでてきた。

「いや、な。闇が出てしまった以上向こうに規格外な力を持った奴は多い方がいいんだ。だから・・・」

「・・・ああ、わかった」

萃香の名前が出た瞬間俺は理解してしまった。

「つまり俺に萃香の鬱憤晴らしの相手をしると・・・そうだな？」

「正解」

女声で言っても無駄ー！

「多分ねー・・・ぶちギレると予想してるんだ」

「・・・その予想当たるぜ。俺が保証する」

俺達がいなくなった事の悲しみは勇儀と同じくある。しかし萃香は勇儀達鬼と違って地上に住む事にした。恐らくだがそれは俺達がいなくなった後も続けただろう。

それと萃香は宴会好き。宴会は長年したるうが、俺達がない宴会だ。不満が結構塵に積もっていつているのかもしれない。

「やべえな・・・どうやって相手をすべきか・・・」

「・・・まあ、頑張ってね（俺がこの時考えた事は後書きで！）」

そう言ってるがなあ・・・こんな時思いつくのは力づくで・・・

「いいからさっさと行きなさい、妬ましい」

ゲシッ!!

「エ?」

身体が中に浮かぶ。

「あ、パルス【ゲシイ!】グハッ!」

「妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい……」

ガバッ!

「うおっ」

「わー!久しぶりの渚だよ、スーさん!」

え、うそ、ちよっ!?!?

「うあああああああああああつ!?!?!?」

こんなんで幻想郷に戻るのかあああ!?!?!

というかどこに俺は行くんだあああああ!?!?!?!?!?!?!

外伝 Stage プリズムリバー姉妹（後書き）

正由

「萃香の方程式

（正由、渚、そしてアラスがいなくなった＋アラスがいらないとなんか物足りない＋宴会は楽しいけどアラスがいらない＋紫が宴会に参加しない＋宴会の数が物凄く減った＋淋しい）×数百年〓合計×今回の異変で桜の咲く時間が・・・  
〓・・・もうわかるかな？」

渚

「・・・最悪アラス死ぬんじゃないか？」

パルパル

「妬ましい・・・方程式なんて考えてた正由が妬ましい・・・」

毒人形

「この小説は私の小さな人形をスーさんと呼びます！」

正由

「この二人は・・・まあ、わかるよね？」

渚

「・・・また騒がしくなるな・・・」

Stage 6 - 3 誓いの桜

紫side

「身のうさを 思ひしらでや やみなまし そむくならひの なき  
世なりせば」

私の親友である幽々子が声が聞こえてくる。さきほどの爆発は力を一時的に多くくしてしまったものだから、危険なことを知らせるための爆発のようなもの……あくまでも推測だが。

「紫、様……ご無事ですか……？」

「……ええ、大丈夫よ」

式である藍がすぐ隣に来てくれていた。藍は少し頭から血を流している。因みに私は服が少々汚れたぐらいだ。幸い怪我はなかった。

「……ねえ、藍」

「……はい」

私は静かな声で、それでもはつきりする声で藍に聞いた。

「今……西行妖と……幽々子を操ってるのは……」

私の頭にはもう確信に近い答えは出てしまっている。それでも、聞かすにはいられなかった。

「……はい。間違いなく、あの時に現れた【闇】です」

「……そう」

その言葉だけ聞けば充分だった。闇はまた私の前に現れた。闇は今度は私の親友を奪おうとしているらしい。どうして世界は悲しみを起こさせる？

目を閉じて思い出すは、あの人との最後の会話……

『大丈夫。必ずここ（幻想郷）を護るから』

私はあの時幻想郷の事よりも、あの人の事を考えていた。消えてほしくない。私からいなくならないで、そう願ったのだ。しかし……現実是非情だった。あの人はもう二度とここに戻ってくることはない。なぜなら彼は……閻魔に裁かれたからだ……つまり死んだ。思えば私は随分変わった、と思う。別れなんて、悲しむことなんて私にはないと思った。ずっと一人で私はやってきたのだから。でも、あの人……あの人に出会ってから全てが変わった。

『俺は宮藤正由。よろしくね』

それからのような気がする。絶対に幻想郷を創ろうと誓ったのは。正由がいたから頑張れた。正由がいたから私は幸せだった。

「反魂蝶 - 分咲」

幽々子……というよりも幽々子のスペルカードを闇が発動してき



・・・お前たち無事だったのか!？」

博麗の巫女とその守護者と・・・紅き館の門番二人ね。四人ともあちらこちらから血を流しているが戦闘に支障はなさそうだ。

ポオン!!!

「なにかよくわからないけど、あれを止めればいいのでしょうか? 元々異変を解決しに来てるんだから、やるわよ?」

ザシュ!!!

「こんな時にのんびり寝る事なんてできないからな。助太刀する」

ドン!!!

「さつき信太さんに邪魔されたせいで不完全燃焼なんです!!! 体力尽きるまで暴れさせて頂きます!!!」

ゴオオン!!!

「まあでも、あの結界は霊夢があんたらしかなんとか出来なさそうだからな。ここは引き受けるぜ?」

・・・全く。なんとという人達かしら。こうも簡単に妖怪に協力するなんてね。

「・・・藍はここで影を倒していて。私は博麗の巫女と西行妖を止めてくるから」

「わかりました。お気をつけて!」

私は博麗の巫女に近づいていく。



「私は八雲紫。よろしくお願いするわ」

「よろしくする気はないけど、まあよろしくね。私は博麗霊夢よ」

この時代の博麗の巫女・・・といっても昔の博麗の巫女をほとんど覚えてないわ・・・どうでもいいけどね。

「それじゃ、行こうかしら霊夢？」

「ええ、わかってる」

結界の中に私達は向かおうとした・・・だがそれは叶わなかった。

ザシュツツ！！！！！！

「ぐあ！？」

門番の人間の方だろうか、何かに斬られたのだ。影の攻撃ではない。そのまま彼は倒れこんでしまう。

「！！・・・そこです！！！！」

ガキイーン！！！！

刀と拳がぶつかる音、そして刀を持っている男を私と藍は知っていた。

「妖忌・・・！」

魂魄妖忌。妖夢の祖父であり師匠だ。今は確か長き旅に出ていると聞いていたのだが・・・戻って来ていたのだろうか。いや、もしか

すれば偽者かもしれないが・・・

カツ！！！

ズバアツツ！！！！！！

「なっ！・・・がは」

あの剣技が偽者だとは考えにくい、妖怪の門番も魂魄流のカウンターで倒されてしまったから。だとすれば、妖忌も同じように操られてしまっているのだろう。

クパア

私はスキマを開いて二人を安全な所に移動させた。忘れないように言っておくが今は幽々子の弾幕が放たれているのだ。しかも徐々に密度が高くなっている。

「・・・仕方ないわ。藍と・・・信太。ここをなんとか死守して頂戴。私と霊夢は西行妖を止める」

正直藍と信太だけじゃきつい相手だけど、頑張ってもらっしかない。そう決断した時だった。

『藍様！紫様！返事をしてくださいー！』

藍の式神・・・橙の声だ。どうやら式の力で念話してきているようだ。今回橙にはこの異変には協力はそれほどさせていない。巻き込まないためだ。

「どうしたんだ橙？・・・というかこっちに近づいていないか？」

確かに藍の言う通り、まっすぐにこちらに来ている。

「橙、私達は大丈夫よ。安心して待っていなさい」

今の実力の橙でははつきり言って実力不足だ。だから来させないようになっているのだが・・・

『今ですね、そこに向かいたい人をですね、案内しているんですよ。』

・・・ここに来たがっている人？誰かしら？

「・・・橙、今は緊急事態なんだ。その人が誰だか知らないが、もう少し後に『橙、ありがとう。どうやら昔と変わってない道だったよ』・・・!?!」

藍は驚愕の表情をする。橙とは別の声が聞こえてきた事にはない。

『ここからは、急いで行くよ!』

がし!

恐らく橙を抱えた音だろう。橙の「きゃくく!?!」という声が聞こえる。

それよりも私は、呆然としていた。弾幕や斬撃は無意識で境界を操る能力を使って防いでいるだけだった。何故呆然としてたか・・・それは、

ばっ!

「はああああああああっ!!!!!!!!!!!!!!」



「ま・・・さ・よ・・・し・・・？」

幽々子も呼びかけていたのだ。闇に抗いながらだろう、身体が震えている。

「・・・本当は久しぶり、とか言いたいんだけど・・・まだそれは言えない」

その人の声は悲しそうな声、でも少し嬉しそうな感じだ。

「けどま、久しぶりなのは同じだから・・・言っておくか」

その人は私と藍、そして幽々子の方へ顔を向けた。

「・・・久しぶり、藍、幽々子・・・そして紫。少しだけだけど戻ってきたよ」

正由 side

やっぱり驚いてる表情だな・・・無理もないけど。でも今は時間が惜しい。正直ここにいられる時間は少ない。

「皆、今は幽々子を助けるために協力して。時間が無い」

「・・・まあいいけど、何するのよ」

・・・この子は博麗の巫女か？なんか昔見た巫女とはなんか雰囲気違うような・・・まいいか。俺は幽々子の近くに移動する。

「・・・幽々子。会って早速悪いけど、君を助けるために一斉攻撃する・・・ごめんね」

「・・・う・・・ん。大・・・丈・・・ぶ・・・おね・・・が・・・い」

今幽々子が闇を止めていてくれる今がチャンスだ。心苦しいけど、幽々子の為にも、ここで決める！

「巫女は幽々子に「待つて。幽々子は私がやるわ」・・・そう。じやあ頼む紫。俺は西行妖だ」

紫が自ら名乗り上げていた。あまり無茶はしてほしくないんだけどね。

「紫・・・俺は・・・言わなくても・・・大丈夫よ」・・・紫？」

横を向けば紫が微笑していた。







「ああ……」

どうやらもう時間のようだ。俺の魂は身体のある場所へ戻る。紫たちはそのことを知らないけど……知っていても混乱させるだけだから、今は教えてはいない……。でも

「……誓い……」

「え？」

紫と初めて出会った時、幻想郷に入る前の時、幽々子が死んだ時、桜の前で俺は誓った。そして今回も……

「必ずここに……俺は戻ってくる。俺の言葉を信じてくれ、なんてことは言えないけど……俺は絶対に戻ってくる……だから」

桜がきれいに舞う。

「笑顔で待ってて欲しい。紫は笑顔の方が、綺麗だから」

「……っ！」

その言葉に耐えられなくなったのか、紫は涙を流し始めた。

「……わかったわ……待ってるわよ……絶対に、帰って、きなさいよ」

「ああ……わかった」

「いってらっしゃい、また会える日を、正由」  
「いってきます、また会える日を、紫」

その言葉を最後に、俺は桜の舞う風と共に、消えた。

Stage 6 - 3 誓いの桜（後書き）

紫

「次回、妖々夢END、題名は未定よ」

幽々子

「今回はギャグ中心かしら？」

## END 桜咲く

### 藍Side

異変から数週間程度経過した。

今回、幽々子様と紫様が起こした異変は【春雪異変】と名付けられた。紫様は幽々子様が集めていた力を使おうとしていたが、これは未遂で終わった。

さて、ここで重要な事がいくつかある。

まずは異変を解決した者だが・・・これは博麗の巫女とその守護者が解決したことにした。もちろんそれは違う。解決したのは正由が主にだ。

出来れば正由が一時的にでも戻って来た事は伝えたいが、混乱に招きただけだろうと紫様はおっしゃり、巫女達にも他言は無用と伝えている。

その際、あの時幽々子様にとりついてた闇の事を聞いてきたが、今はまだ教えられないと言ったら引き下がってくれた。

それと妖忌、妖夢の祖父であり剣の師匠だ。何故ここに戻って来ているのか、それは本人が言うには、

『そろそろ孫がどれほど成長したか見に来たのじゃが・・・まだまだわしが未熟のようじゃ』

だそうだ。

・・・話は戻るが、正由が来た事を秘密にしている紫様だが、あれ

は絶対正由との秘密を持ちたいか」「藍・・・?」

「なんででしょうか?紫様?」

「今の全部声に出ているのだけれど・・・?」

「そりゃあ出してますから」

「・・・」

この従者とは思えない私の態度をするのは自分でも久しぶりな気がする。思えばこの態度をやめたのはあの時・・・正由がこの世界から消えた日・・・死んだことを知った日からだ。あの時から私は無意識で幻想郷に尽くしていった。それが私にできる罪滅ぼしなように。だがそれは正由は望んでない気がするが。

「紫様も元気になりましたね」

「まあ・・・ね。本人が必ず戻るって言うんだもの。いつまでもいじけてなんていられないわ」

今思えば紫様はあれから滅多なことでは部屋に閉じこもっていたから、私の仕事は相当増えていたのだよなあ・・・。

「しかし紫様?幽々子様と妖夢には黙っていても、妖忌殿が教えるのではないのですか?」

まあ妖忌殿に記憶が残っていればの話だが・・・

「・・・あ」

単純に忘れてただけかい。ずっと閉じこもっていたから鈍ってるのか？

ガラッ！！！！

「ゆ〜か〜り〜」

おや噂をすれば幽々子様と妖夢と橙と妖忌じゃないか。・・幽々子様はどうやら怒っているようだ。・・いや妖夢も怒っているな。私と同じで表に出していないだけだ。

「な、なにかしら、幽々子？」

「なにかしら？・・じゃないわよ。正由が一時的にも来たことな  
んで言わないのかしら？」

笑顔だが恐ろしい笑顔だな。・・私は少し離れていよう。・・。

「それに〜藍ちゃんもよ〜？」

！？矛盾変えられた！？

「どうして二人して何も言わないのかしら〜？？？」

「場合によつては。・・斬ります」

妖夢は無表情か！？・・逃げ場がないな。・・。

「二人とも、おちつくのじゃ。気持ちはわからんでもないが今は正由よりも調べなければならぬ事があるじゃろっ」

よし妖忌殿空気よんだな！ナイスだ！！

「……………そうね。アレがまだこの幻想郷に残っているのか・  
それとも新たに現れたのか・…どちらなしろ、これから先警戒する  
事ね」

「アレは最悪世界を滅ぼせるから厄介なのよね」

だからこそ、もっと嚴重にしていかなければ、いけなくなるのだが・  
…………。

「でもあれですよね」

「ん？どうしたのだ妖夢」

妖夢が声を上げた。

「正由さんは生きていた、ということですよね？」

……………せつかく回避できた爆弾を投下してしまった。

「しかも正由さんのことですから、私達に隠して行動しているの  
はないでしょうか？」

…………あ、紫様と幽々子様からどす黒いオーラが。これはやばいな。  
私も妖夢が言ったように、正由が何かしていることは予想できる。  
だからあえて言わなかったのだが…………、この半霊半人少女はやっ  
てくれました。

「（これから先の事を考えるともっとまずいんじゃないか…………ま

あ私も庇うことなどしないが」

ここにいるもので恐らくだが、妖忌殿と橙以外はこう考えているだろう。

「「「「（次会ったらボコボコにしてやる！！！！）」」」」

これも私達を怒らせた罰だ！！

「・・・みなさん、こわいです・・・」

「（正由よ・・・強く生きるんじゃぞ）」

そう思いながら、私達は知らぬ間に失っていた元気を取り戻していた。

【現実世界】

渚side



「・・・・・・・・急に寒気が」

「風邪か？」

「いや・・・大丈夫だ」

そんなことより俺は聞きたいことが・・・いや、疑問に思う事がいく  
らでもある・・・が今は全部聞かなくてもいいか。

「正由・・・お前はいつたい何を見たんだ？」

「・・・・・・・・」

親友と名乗らせてもらっている分、俺の問いが何のことを言っているか正由もわかっている・・・からこそ、苦笑した表情だ。

「答えられないのか？」

「・・・・・・・・ああ」

「・・・・・・・・そうか」

「ああ・・・まだな」

・・・こいつはこいつで変化しているんだな。でないとアラスを幻想郷に戻す、なんて言わなかっただろうし。

「（しかも・・・本当は自分が解決したい事を・・・正由はアラスに頼んだからな・・・）」

萃香の八つ当たりになってくれと、普通の声で正由は言ったが、念話ではこう言っていた。

【夜が明けない日・・・月の姫たちと・・・不老不死の少女を止めてやってくれ】

月の姫達はアラスが一番親しいのでこれは問題ない。だが後者は間違いなく正由に縁のあるもの。それをアラスに頼んだのだ。自分が行きたいはずなのに。

「・・・俺も行くことになるか？」

「・・・ああ、行くことになる日が来る」

「力は失ってるが・・・」

「大丈夫、渚の力は幻想郷に行けば戻る」

俺の力・・・か。この場合俺は無期限無許可休暇になるのか？・・・  
・・・説教ものだな。説教ですめばいいが。

「・・・そういえば、アラスを送った際明らかに妨害が入っていたが、目的の幻想郷に送れたのか？」

「・・・え？」

・・・え？じゃないだろう。今更になって考えても遅いだろう。

「・・・もしかしたら」

「・・・心当たりがあるのか？」

苦笑してそれでいて困った表情をしてこう言った。

「魔界に連れてかれたかもしれない」

「・・・ああ、ありえるかもしれない。奴ならありえる。」

「ま、アラスなら大丈夫でしょ」

「そうだな。アラスなら平気だろう」

そう言っただけは・・・

「ようやく終わったのかしら？妬ましい」

「？」

不機嫌にしている水橋パルスと、話をいまいち理解していないメ  
デイスン・メランコリーだった・・・

「・・・どうするんだ正由」

「とりあえず事情を説明してくれないかしらね妬ましい正由」

「わかったよ・・・」

現実入りも多いものだな・・・これも影響を受けてのことなのだろうか。どちらにしろ、大変なことになりそうだな・・・。

END 桜咲く(後書き)

幽々子(生前)

「咎重き 桜の花の 黄泉の国 生きては見えず 死しても見れず」

マッサー

「今回合間の話はなし。細かくすればこれが合間の話？」

アラス

「そんなわけでスタートだ!!!」

霊夢 side

おかしい・・・と、私には今の状況をそう思った。

「はっはっはっはー！！早食いはパワーダゼ！」

「あら？私に勝てると思っているの？」

「やってみなくちゃわかりません！！」

「にやめろん！貴方たちにはわからないのですか・・・幽々子様は伝説の超大食いなんですよ!？」

・・・まあ酔っ払いが多いのをおかしいといっているわけじゃないわ。あと言うておくけど、妖怪神社でもないわよ？全く、誰がそんなことを広めたのかしら・・・。

話が逸れたから戻すけど、変と言ったのはこの宴会のする回数よ。少し前までは楽しくやってたけど・・・今見れば全員の表情が少し疲れたような顔をしている。それもその筈だ。

だって宴会を三日に一回は行っているのだから。

ここ幻想郷でも多すぎる回数だ。いくらお酒に強い（自称だけどね）私、それにほかの人物でも辛くはなるでしょうね。しかもそれだけじゃない。

私達は今、互いが互いを疑っている。つまり探りを入れているのだ。まさに自分しか信じる者がいない、というのが今の状況だ。信太も何か考えがあるのか、私とあまり関わることをしない。

「（どうしたもんかしら・・・）」

どうもこの神社・・・かしらね、なにかしらの妖気があるのはわかるんだけど・・・どうも判断ができない。

「・・・・・・・・」

考えても仕方ない、今回の宴会の参加者が誰がいるか見てみましょうか。もしかしたら何か手がかりでもあるかもしれないし・・・。

「（まず信太。魔理沙に俊一。紅魔館の住民に、スキマ一家と亡霊と半人半霊・・・）」

因みにおじいさんの半人半霊はいない。なにかまた旅に出たようだ。どうでもいいけど。

・・・あら？アリスがいないわ？さっきまでいたわよね？まさかアリスが犯人？

「（あと・・・角の生えた・・・少女・・・？）」

・・・・・・・・あれ？私の知り合いにそんなやついたっけ？・・・  
・・・・・・・・いない筈だ。

「（怪しい・・・）」

アリス以上に怪しいので今からでも問い詰める・・・としたいところだけど、せっかくの宴会、無駄にするのは面倒ね。明日といつめましよ。そのほうが、いい気がするし・・・ね。

角の生えた幼・少女side

・・・何か無性に殴りたくなってきたよ。わかんないけど。

さて、妖気で私の事をわからないようにしてたけど、さすがに限界かな？紫やその式はもちろん、亡霊や半霊剣士にも気づかれかけてる。まあ、昔からの知り合いだし、仕方ないか。

そのほかも疑問に思われ始めてるね。特に博麗の巫女は私の事をもう見抜きかけてる。

「これは楽しみだね」

久々に、本当に久々に酒が上手く感じるよ。酒が上手く感じなくなつたのはあの時からか・・・

「（あのバカ、何処にいったんだか・・・）」

生きていることだけは知ってる。でもどこにいるのかわからない。  
・ま、暗いことだけ考えても仕方ないかな。

「（さてさて・・・明日はどこから行くこうかな？）」



久々に思いつきり戦えることを期待しながら私は酒を再び飲み始めたのだった。  
うっん、上手い!!

あのバカside

「……は!？」

ここはどこだ……と言っても知ってる場所だが。今俺がいるのは幻想郷ではない。ここは……

「魔界エ……」

確実に奴の仕業だな。おおかた乱入して俺をここに招き入れたんだろっ。

「はあ……じゃあねえな」

正直この手で幻想郷で戻りたくない。最悪、力を他の奴に感づかれてしまうからだ。

「！・・・悩んでも仕方ねえか」

恐らく魔界からのお出迎え、だろうか。何か近づいてくる。が、それを待つことはできない。

「はあああああああああああああああ！！！！！！」

力を身体からあふれ出し、ある人物を呼ぶ。たのむから早く気付いてくれ！！！！魔界の一番が来ちまうよ！！！！

グオンツ！！！！

「！！おっしやあああ！！！！」

どうやらなんとか間に合ったそうだ。裂け目が現れた。

「おっと、その前に・・・メガネメガネ」

現代にいるときに正由から渡されたメガネをつける。どうやらこれは認知障害の力を持っており、紫とかの目を欺けるんだと。因みに正由や渚もつけていた。だから一番に探し当てそうな紫も正由を見つけられなかったんだろうな・・・

「・・・はっ！！」

裂け目が小さくなってきている！しかもなんか猛スピードでなんか来る！？

「待ってk」あばよまた会える日まで！！」「ちよっ」

俺はこれにて魔界から去った。あゝ怖かった。

「・・・で、あなた誰よ」

そして俺は今どこかの家の人・・・いや妖怪と話している。ということはいつがあいつの娘？うん・・・似てる・・・のか？そんなことより自己紹介しよう。

「ああごめん。俺はアラス。アラス・クロフィードだ」

名を名乗ったらなぜか驚愕な表情をされた・・・。え、なんで？しかもなんか急に顔を赤くされましたよ？え、なに、何かした？俺？

「・・・お、お父様？」

ズサアアアアアアアアアア！！！！！！

俺は盛大にこけることになった・・・



アラス

「それよりも・・・新たに追加したタグはなんだ？」

マッサー

「・・・なんかさあ、別世界の人をだしたくなっちゃったんだよ」

アラス

「・・・どこの人？」

マッサー

「・・・真の恋で姫の無双してる人達？」

アラス

「・・・うわあ・・・」

Stage 1 鬼は何処に？（前書き）

この異変はそんなに長くない・・・と思います

アラス

「え、そうなのか？」

本当はバトルもなしで一話で終わらせようかなあと考えていたんだけど、少しバトルをいれる・・・という風にしたのです。

アラス

「・・・そんな感じのこの小説をこれからもよろしく！」

## Stage 1 鬼は何処に？

霊夢Side

「ふーん・・・」

神社にある古い書物を読んでいた私は昨日の宴会にいた見知らぬ角の生えた少女の正体がわかる。

恐らく彼女は鬼だと思われる。

鬼・・・大昔にここ幻想郷でも現れていた種族。その力は一人一人がとてつもなく、人間の敵だったようだ。

しかし数百年前から姿は減っていつているそうだ。確かに私も本物は見た事がない。

「ま、悩んでも仕方ない、か」

朝ご飯を食べた後すぐに信太は出掛けて行ったし、私も早く調査しに行きますか。

【博麗神社】

「・・・何処にいるのかしら」

そもそも何処にいるのかわからないのに探し回るのは得策なのかもわからない。というか、ここにいた方がいい気がする・・・





「（接近戦に持ち込めば勝てる？いや・・・）」

そう簡単にいかないだろう。亡霊姫が起こした異変の後、魔理沙は俊一と共に魔法の研究を多くするようになったと聞く。

あの時あそこで脱落したのが悔しかった・・・のかもしれない。遠距離だけでなく、近距離にも対応できるスペルカードを新たに習得してるかもしれない。

・・・・・・・・・・・・・・・・

違いに睨み合っている。

「・・・霊夢に出し惜しみは出来ないぜ！！！！ 魔符『スターダストレヴアリエ』！！！！」

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！！！！！！！

いきなりのスペカ宣言。最初は様子見、と言ったところかしら。さて・・・いつもの私なら余裕に避けながらチクチク攻撃するのだけれど・・・

「いつとくけど魔理沙」

今日は戦法を・・・変える。

スペルカードルールを生み出したのは私だがそれでも正直、決めた意味があるのか？と思う人もいたらしい。なぜなら、

「・・・はっ！！！！」

「げ！？」

ただの物理攻撃も、一応ありにしているからだ。そもそもスペルカ  
ードルは……えっと、美しさ……?とか、だったかしら。  
ほかにもあったと思うけど、今はいいわ。それを競うもの。でもね  
本音を言つと……

「(面倒なのよ)」

そんな事を考えているからかしら?スペカを考える時余計に多く作  
る気がするのよね。その事を紫に言ってみただけど……

『……貴方はどうやら博麗の巫女として特別な存在かもしれない  
わね……』

なんて言ってたしね。全然褒められた気がしないけど。

「とりえー!!!!」

ブン!!

「くそー!!痛いですまなそうなお払い棒だなそりゃ!!!!」

当然。これは私の持つてる力……霊力?を含めているもの。下級  
妖怪ならこれで簡単にポッコポッコよ。

「こんな早い段階で使いたくなつたが……やるしかないぜ!!!!」

ん?魔理沙の力が集まって来てるわね。なにかするつもりね。

「星符『ドラゴンメテオ』!!!!!!!!」

バツ!!!

突如大きく上に飛び上がる魔理沙。すぐに私も追いかけてようと空を飛ぶ。

ゴオオオオオオオ!!!

「っ!!!」

上空からマスタースパークと思われる光線を撃ってきている。しかも大量にだ。

「ムダムダムダムダムダダゼー!!!」

ゴオオオオオオオオオオオオオ!!!

無差別攻撃かしら・・・どちらにしろ、あまりこっちが攻撃ばっか受けているわけにもいかないわね。

スタツ

「ふう・・・は!!!」

バツ!!!

一度下に戻ったかと思えばどうやら再び上に飛んで行ってしまった。ふむ・・・

「（今の魔理沙の攻撃は一度溜める行為をする。それならその隙を・・・）」

ドオオオオオオオオオオオオオ!!!

「・・・・・・・・」

魔理沙もバカじゃない。恐らく私の考えをよんでいるはずだ。どちらにしろ、これが決め手となるはず！

ドラゴンメテオを避けながら魔理沙が降りてくるのを待つ。

スタッ

・・・今だ！！！！

私は魔理沙が降りる直前に既に駆け出していた。だがやはり魔理沙も、私が向かってきているのを予測していた。

「恋符『マスターパーク』！！！！！！！！」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

真っ直ぐわたしのいる方向に向かって放ってきている。

「夢符『封魔陣』！」

ガガガガガガガガガガガガガガ！！！！！！！！

私もスペカ宣言をして相殺しようとする。でも何かしら・・・

「霊夢！！！！知ってるか！！！！」

「なにをよ！」

マスターパークを撃っている最中だというのに私に話しかけてく



「・・・さて、お茶でも飲もうかしら」

私はお茶を飲むべく移動し始めた。

## 【紅魔館の門】

美鈴 side

「・・・」

私は今、強敵と睨みあっている。

「・・・名を聞いてもいいでしょうか。鬼さん？」

「・・・そうだねえ。いつまでもこうしているのはつまらないし」

見た目は少女にしか見えないが、相手は鬼だ。油断なんて出来るわけがない。

「あんと戦うのは面白くなりそうだからねえ・・・」

お酒・・・だろうか。口に含んで威圧感を高めてきた。

「私は伊吹萃香。鬼だ」

「紅美鈴、この紅魔館を守る門番です」

互いに名乗った私達は・・・

ゴオン!!!!!!!!!!

互いの拳をぶつけていた。

S t a g e 1 鬼は何処に？（後書き）

次回、某バトル漫画的な戦闘に！？



Stage 2 気砲(前書き)

???

「あたいの名前が遂に出た!!!」

レテイ

「ふふふ」

## Stage 2 気砲

### 【アリスの家】

アリス s i d e

「……なにやら私のお母様に体に乗っ取られていたような……そんなことよりも私の目の前にはある人……いや人なのかしら？とにかく強大な人物であることには違いはないわ。」

「それで、かの有名なアラス・クロフィードさんがなぜ私の家にいるのかしら？」

「うん……説明すると長いんだがなあ……」

そう言っアラスさんは私に説明し始めた。

### 【アラス説明中……】

「……ま、お母様ならあなたを襲おうとするのも無理ないかもね」

「……理解早くて助かります」

メガネ……恐らく認識障害の効果を持っているメガネをつけているアラスさん……。私は子供の頃に、一度会っている……。というよりも見たのほうがいいのかしら。そんな会話をしたわけでもな

いし。

そんなことよりも、この人が幻想郷に来たのはわからない。事情があるから詳しく教えられないようだ。

「これからどうする気？」

「……とりあえず最初の野暮用を片付ける。鬼を鎮めなきゃな」

鬼？……ああ、神社の宴会にいた時の、今回のちよつとした異変の黒幕ね。そろそろどうにかしたいと思っていたのよね。

「止められるの？」

「……まあどうにでもなるだろ」

……大雑把な人ね。

「じゃ、今度また来てもいいわよ」

「……え？」

外に向かおうとしていたアラスさんの動きが止まる。……あ、今の言い方だと確実に勘違いされる。

「勘違いしないようにね。気絶してた私を看病したお礼をまだしてないからよ」

「別にいいんだがな……」

私の気が済まないのよ。

「じゃあその内来るよ」

「ええ、またね」

そう言っただけでアラスさんは外に出て行った。

### 【紅魔館】

レミリア side

「ふふふ・・・流石美鈴と言ったところかしら」

紅魔館の門の前で鬼と互角に戦っている。今の美鈴はいつもの美鈴ではなく、昔の、スペルカードルールなんてなかった時代の美鈴に戻りつつある。

「（とは言っても、美鈴の実力なんて私も完璧に知らないんだけどね）」

だがこれだけは言える。

「（美鈴は簡単には負けないわ）」

私はそう思いつつ、窓から戦いを再び見始めた。

「……お姉さま」

「?何かしらフラン?」

「いくらなんでも、プリンを立てて食べながら見る?」

……

あ、美鈴が押されてきちゃたわ!

「お姉さま?」うっ!?!うるさ~~~~い!賢太の所へ行つてなさい!」「はい」

全く、細かい事を気にする妹なんだから……ん〜プリンおいしい〜うっ。

【その後のフラン】

「お姉さまいらないって」

「ん、そうか……残念だ。新作のチーズケーキ作ったんだが……しょうがない、フラン食べるか?」

「うん!?!?!」

【紅魔館の門】

美鈴 side

ドオン！！ガッ！ゴオオン！！

互いの拳、蹴りが何回ぶつかっただろうか。徐々に私が押されてきているのがわかる。

「そろそろどうしたー！！！！」

「まだまだです・・・！！」

純粹に身体能力の差、それが響いて来たのだ。

「はああ！！萃符『戸陰山投げ』！！！！」

ガッ！！！！

「うわ！？？」

スペカ宣言と同時に私は鬼に捕まれる。

「どっしゃあああああ！！！！！！！！！！」

大きな声と同時に下へと投げられた。・・・て、

「わあああああ！？受け身！！」

バゴツ！！

「つう・・・」

完全に受け身は取れなかった・・・くつ、右腕が・・・。

「ふふんー。私の勝ちが見えて来たみたいだね」

鬼は私を見てほぼ勝ちを確信したようだ・・・いや、私はまだ終わらない。

「（せめて大技の一つを・・・見せてやりますか！）」

片手でしか出来ないのは残念ですが・・・

サツ・・・

自由に動く左腕を何かの構えのように後ろへやる。

「ん・・・」

鬼も私の行動に不思議に思ったのか、警戒し始めた。恐らく、私が動くまで動かないと思うが、この場合その行動は外れた。

今の私は【溜め】に入っている状態だ。つまりは全くの無防備・・・

とは言っても【スペルカードルル】としてのだから静かに溜めをしてられるんだけどね。

西行妖の時は本気で消そうと考えたからなあ・・・

「これで決めます!!!!

気砲『かめはめ波』!!!!」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!!

元々これに名前はなかった。でも外にいたときある漫画?とその・あにめ?だったかを読んで名前は頂きました。青色の閃光ではなく、朱色の閃光に!

「(さあどうですか!!)」

かめはめ波は真っ直ぐに鬼へと向かっていく。鬼は全く避けようとせずに。

「・・・波あああああ!!!!!!!」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオン!!!!!!!

瞬間私の朱色の閃光は茶色のような閃光に飲み込まれてしまった。

「あんたとは本当に一回殺し合いたいね。今回は私の用事があるから無理だけど、機会があれば、やりあおう」



そんな言葉を聞いて私は閃光に飲み込まれて意識を手放した。

【???】

A S i d e

「いや、もうアラスSideでいいだろ・・・」

などと一人で突っ込んでみるが、虚しくなるだけだった。

「・・・迷ったか？」

神社に行く道をアリスから聞いておけばよかったかもなあ・・・な  
んか湖があるよ。

「飛ばばいいじゃないか、と思った奴！それはNGだ！！」

何故ならこの眼鏡、確かに認識障害の力を持っているが・・・それは、力を感じがわからなくなるだけで、実際に姿を見られると本人だと認識されてしまうのだ。

つまり空を飛ばばかなり目立つ。そうなると目撃されて俺オワタ・・・になりかけない。現に・・・、

「・・・・・・・・」

今現在進行形で俺の後ろを黙ってついてくる人物がいるのだ。・・・正直空気が重い。

「・・・俺に何か用なのか？」

決して後ろは振り返らない。目と目があってしまったら、俺の事を認識されてしまうかもしれないからだ。

ビクッ

「え・・・・・・・・」

？なんか驚かれたな・・・一体誰なんだ？

「あ、あれ？なんであたい、こんなところに？」

「俺が知るか・・・それより用がないんだっいたら着いてこないでくれ」

出来れば今は一人行動の方がいい。身軽に動けるからな。

「む！！さてはあんた！何かしたわね！だからあたいは無意識であんなの後を着いていつてしまったのよ！！」

・子供なのか？それにしてもなんつー理不尽な言葉なんだ・・・  
ああもう、うっとうしい。

「とにかく用がないなら帰ってくれ。悪いけどお前に構ってる暇はないんだ・・・」「・・・あたいを・・・忘れた・・・の？」「・・・!？」

この声とこの口調は・・・まさか！

「あれ、さっきの・・・あたいが、言ったの？」

間違いない・・・さっきから俺に話し掛けてるのは間違いなくあいつだ。

「あ、あれ、な、なんで、目から、水が流れ、てくる、んだろ？」

「・・・」

妖精は自然の力があれば蘇る。その時に記憶は一部ずつ消えていく筈だ。

「アラ、ス・・・これ、て、なんなの、かな・・・」

今俺は名乗ってもいないのに後ろにいるあいつは名前で聞いてきた。

全く、あれからどれほどの年月だと思ってるんだ。

「・・・そうだなー。それは、涙、だな」

「ナミダ？」

「そ。嬉しい時、悲しい時、怒ってる時、他にも様々にあるけど、  
気持ちが抑えられなくなった時、溢れ出てくる・・・そんなものか  
？わかったか？チルノ？」

俺はくるりと後ろへ振り返る。そこにいたのは、紛れも無くチルノ  
だった。

「あ・・・アラ「お久しぶりね」まほーけんさん？」・・・あ、レ  
テイ」

・・・出来れば会いたくない奴もいた。

ガキイイン！！！！

レテイ・ホワイトロック。冬の妖怪であるレテイは槍で攻撃してき  
たので剣で防ぐ。

「お、おいレテイ！！お前冬以外姿は見せないだろ！？」

「あら？？別に冬以外姿を隠さなくてもいいようにしてくれたの  
は何処の人？？？」

デスヨネー！！ああそつだよ！俺がレティをそついう身体にしたよ！！

「あの時の一晩は・・・本当に激しかったわ・・・ネ？」

「や、やっぱり二人は・・・」

「誤解を招く言い方はやめろおお！！！！というかこのツッコミ久しぶり過ぎるだろ！！！！」

思わず肩で息しちまつたぜ・・・。二人もこのやり取りをやりたかっただけなのか、すぐに何も言わなくなった。

「で、その発言をしたチルノは俺の事は覚えてたのか？」

チルノは腕を組んで考える仕草をした後、自信なさ気に答えた。

「うーん・・・よくわかんないけど、アラスに会って思い出した、てところかな」

つまり俺は鍵みたいなものだったのか？

「それで？私達に何か言う事は？」

へ？言う事・・・？

「・・・何を？何を言えば・・・あ」

・・・NGワードだったze。

「ふーん・・・私達から姿を消してながーーーーーく経過したのに何も無いのねー？」

レティ・・・笑顔が怖いぞ。・・・あれ目の幻覚かな、レティは槍を構えてるのはわかるんだが、チルノは剣を構えてる・・・？

「アラス・・・風の噂なんだけど、他の女に手を出してた？」

・・・はいっ?!?!?

「いやなんだそれ!? そんなことあるわけないだろ！」

嫌な予感しかしないので必死に否定をする。

「「ふーん・・・じゃあこれなに？」」

そう言ってレティが一枚の写真を見せてきた。そこに写っていたのは・・・

「ぶっ!!! ちょ!?! おまつそれは!?!?!?」

ある人物（巫女の格好をした人）に倒れ込んでしまっている俺の姿が写っている写真だった・・・

「・・・もはや問答は無し・・・」

「・・・殺してもアラスを正気に戻す！」

「二人とも黒い!!! 黒いよ!!!! それにその写真は誤解だああああああああ!!!」



萃香 Side

「さて、と」

紅い館の門番と戦った私は再び宴会が行われる神社へと来ていた。

「宴会の準備はしてるけど、なんか楽しそうだったのかな？」

「ようやく来たわね」

博麗の巫女が私を出迎える。巫女は私と戦う気満々のようだ。

観客はそれなりにいるね。ふふん、今の巫女は変わり者と聞くからね。楽しみだよ。

「鬼の伊吹萃香だ・・・さあ祭を楽しもうか!!!」



Stage 2 気砲（後書き）

アラス

「フラグ？ははは・・・はあ」

マッサー

「この小説の男は全員家事スキルは高いです」

Last Stage 小さな百鬼夜行VS博麗の巫女(前書き)

正由

「あ！」

渚

「どうした？」

正由

「アラスに渡した認識障害眼鏡、あれ失敗作のだ!？」

渚

「……アラスの運を信じるしかないな」

【アリスの家】

アリスside

「アラス・・・か」

私はアラスの事を考えていた。当時まだ小さかった頃、お母様から聞いた話だとかかなりの、いや最強クラスの存在だと聞いていた。しかも異名まであるという。

「確か・・・。「アリスー、邪魔するでー」・・・」

思い出そうとしてる時にこれだわ・・・

「何の様よ俊一。それと盗んだ本返しなさい」

「盗んでないぜ借りてるだけやで。ただちょっと借りてる期間が長いだけや」

「・・・このところは魔理沙と同じと言っても過言ではない。違つと言えば・・・」

「・・・で、何の様よ」

「ああ、そうやった。魔理沙知らへん？」

魔理沙？今日はまだ見てないわね・・・多分勝手に暴走してるんじ

やないかしら。

「知らないわ」

「ん？そうかいな・・・ん・・・」

俊一が腕を組んで何か考え始めた・・・何かしら？

「・・・何？どうかしたの？」

「ん？・・・まあ魔理沙がいないならしょうがない、か。悪いんだがアリス、ちょっと頼まれてくれないか？」

これが魔理沙だったら却下するんだけど、俊一の場合は内容によるのよね。

「・・・何をするのよ」

「新作の茸料理の味見」

どうやら大丈夫そうね。俊一の料理はおいしい、魔理沙もショックを受けてたし。男でも上手い人はいるのねえ、と思ったわ。え、私？私は・・・それなり？別に食べなくてもいい身体だし。

「今回は軽めに茸クッキーだ」

「あら、ちょうど紅茶も飲みたいと思ってたから、淹れてくるわね」  
これがあるかの違いかしらね。俊一は。さっきまで思い出しかけてたけど、まあまた今度考えればいいわね。そう思いつつ、人形を操

作して紅茶を入れ始めた。

【博麗神社】

紫side

ドオオオオオオオオオオオン！！！！！！

「荒れてるわね〜」

今現在、神社は巫女である霊夢と昔からの私の友人である伊吹萃香が戦っている。

「萃香ちゃんも随分久しぶりよね〜」

幽々子は顔を知っているぐらいね。・・・まあそれでもかなり昔の話なのだけれど。因みに今この場には私達の他に、藍に妖夢、信太というところね。紅い吸血鬼の者たちと魔法使いの者達はいないわ。

因みに三人は宴会の準備中だ。本当は信太が鬼と戦う筈だったが霊夢と勝負して負けたらしい。それで霊夢が戦う事になったようだ。

「ん〜・・・巫女もやるわね〜」

やっぱり博麗の巫女は侮れないわね。スペルカードルールというルールでありながら萃香と互角、いや押してきているのかしら。でもこれで萃香が終わるとは思えないのよね。

「鬼符『ミツシングパワー!!!』」

ドオオオン!!!

あ、萃香が巨大化したわ。密度を高めた、ということかしら。

「っ!!!でかくなつたからって・・・!」

ドオオオオオン!!!

萃香が一動作するたびに大きく揺れるわね。中々に面白い攻撃をするわ。

「おりゃー!!!」

ブウン!!!

ドオオオオオオン!!!

萃香は巨大化したことによって生半可な攻撃じゃよろける事がなくなっている状態。しかも素早さは少々下がっているにしろ、攻撃の範囲がそれを補っている。厄介だけど・・・

「弱点がないわけじゃない・・・でしょ〜?」

「・・・心読まないで頂戴。というかなんでわかったの？」

「なんとなくよ」

納得がいかないけどまあいいわ。まあ弱点は画面端に追い込めば・

・画面端つてなにかしら？

「宝具『陰陽鬼神玉』！！」

ブウウウウウン！！！！

「このっ・・・程度じゃ！？」

「霊符『夢想妙珠』！！！！」

ドオオオオオオン！！！！

「ぐっ・・・っ、の！？」

「夢符『封魔陣』！！！！」

ドオオオオオオン！！！！

「ちょ・・・ま・・・！？」

・・・なんとというか酷い光景ね。流石巫女はやることが違った。スベカ連続発動のゴリ押し戦法、そこに憧れないし痺れもしない。

「神霊『夢想封印』！！！！」

ドオオオオオオオ!!

「・・・いいかげんにしろー！ー！！！」

あ、萃香が涙目になって突撃し始めたわ。無理もないわね、このまま攻撃を受けてたら負けるもの。だったら多少の危険を侵して特攻する判断はいいだろう。

「・・・・・・・・」

だがそれを待つてましたといわんばかりに霊夢は笑っていた。一つのスペルカードを手にしていて。

「！まさかあのスペルカードは・・・」

「知っているのですか？」

宴会の準備に区切りをつけて勝負を見始めていた信太達だったが、信太があこのスペルカードについてなにか知ってそうね。

・・・あ、因みに橙は買い出しに行っているわ。・・・え？藍が心配してないかですって？残念、ここの藍はそこまで過保護にしないわよ。

「あのスペルカードはまだ試作段階の筈。使うのは少しまずいかもしれない」

どんなスペルカードなのかしら。気になるわね。

「どんな攻撃か知らないけど・・・受けてたつー！」



萃香は引かずにそのまま突撃していく。さあ・・決着の時ね。

あああ・・・・

「ん？何か聞こえなかったかしら？」

「特に何も・・・あれ？」

何か叫び声・・いや悲鳴だろうか。

あああああ・・・

「あらあら？なんか来るわよ？」

「あれは・・人？」

幽々子の言った方向を見れば、何かこちらに向かって来る、いや落ちてくるといえばいいかしら。墜落でも間違っていないわね。

あああああああ！！！！！！！

「へ？」

それは真っ直ぐに・・・・

「あああああああああああ！！！！！！！」  
「のわーーーー！！！！！！？」



えず最初の目的を探していたんだが・・・飛んでるからだろうか、ある奴に目をつけられたんだよ。

うん、聞かないでくれ。きつとあいつも怒ってるだけだろうし。流石にあいつの相手まではしたくないので逃げ出した。

【アラスは逃げ出した！】

【しかしゆうかりん【ドスッ！】・・・フラワーマスターからは逃げられない！..!】

ていうモノローグが流れたぜ・・・それでまあ、その、とりあえず怒りをぶつけるべき相手は俺じゃないと説明したね。うん。もうわかるだろう？

『いずれ戻って来る正由にぶつけてくださいお願いします』

最低？ふはは、俺だって苦しんでる苦しみをあじあわせてあげたいだけだ。

乙女の嫉妬や怒りは凄まじいんだよ!？

まあその後いくらか質問されて見逃して貰えるようになった。あれは絶対に喜んでるぜ。本人に言ったら絶対否定するだろうけど。

で再び空を飛んで神社を探していたんだけど・・・

『D Z D Z D Z . . . . .! ?』

どこかの人間の少女、かな。それと、

ドゴオオオオオオ!!..!!

大・激・突！したわけさ。普通の人間なら死ぬる。それほどの衝撃だ。

で・・・そのまま神社に落ちていったのだ。

今思えば、ちょうど神社が近かったのが幸運だったな。と思っていた時期が俺にもありました。回想終わり。

「いつつ・・・何処だよここ・・・」

俺は頭を押さえつつ、辺りを見回す。お、もしかしてここが神社か！・・・てえ、

「（紫達がいるのか・・・眼鏡の意味が・・・ないじゃないか・・・）  
て、あれ？その眼鏡がない・・・！？まさかさっきの白黒に激突した時に落ちた！？ぬわー！！

「（しょうがない、萃香の居場所を紫にでも・・・）」

手段を選んでいる場合じゃない。先手を取られたら絶対ぐだぐだになる。ここはやはりシリアスに決めなければ！（キリッ

ポフッ

「ふにゃ！？！？」





Last Stage 小さな百鬼夜行VS博麗の巫女(後書き)

アラス

「結局こんなオチかよ！」

まあまあ、次の異変はギャグは自重する方だから。それに、アラスは超シリアスの予定だよ。

アラス

「・・・いきなり変更、なんてことはないだろうな」

滅多な事がない限り、絶対にアラスは重要な存在になってる。だから大丈夫。問題は上手く俺がアラスを執筆出来るかどうか・・・

アラス

「そこは頑張ってくれ。さて次回はエピソードだ」

次回もお楽しみに

END 鬼の喜びし宴（前書き）

今回の異変でのそれぞれの役割は・・

霊夢・・・今回の異変解決に向けて頑張った人。

信太・・・霊夢に負けて鬼と戦えず観戦。

魔理沙・・・霊夢に負けて飛んで飛んで〜。

俊一・・・特に異変に関与せず。新作料理を作っていた。

アリス・・・アラスを幻想郷に呼び起こすことに成功。その後は関与せず。

レミリア・・・新作お菓子を食べれず拗ねていた。

咲夜・・・美鈴の治療をする。

美鈴・・・萃香に負けて休んでいた。

パチュリー、フラン、小悪魔・・・特に異変に関与せず。

賢太・・・新作お菓子を作る。

妖夢、幽々子・・・観戦する。

紫、藍・・・観戦する。

橙・・・買い物。



## END 鬼の喜びし宴

アラスside

「世界は核の炎に包まれた!!!」

幻想郷は滅びる!!!

「何言ってるんだアラス」

……言ってみただけだこんちくしょー。

現在俺は再び幻想郷の地にいる。宴会が行われている。準備していたのは藍と妖夢と知らない猫妖怪、外では死んだとされている信太だ。とは言っても、俺は外の時に信太とは面識はないのだが。余談だが先ほどアリスと……俺にぶつかった魔法使いと一緒にやってきた俊一とも面識はない。あるとすれば賢太だけだろう。あいつもここにもうすぐくるらしい。うーん、なんて説明しようか。

そして萃香の近くに座って酒を飲まされている。何年ぶりになるのだろうか……、勇儀や萃香に限った事ではないが、彼女達にとって長い年月だったであろう。俺や渚、そして正由がいなくなっただきから……。

「……それよりも萃香さん？もう何もしないんですか？」

べ、別に怖いってわけじゃないんだからねっ！ただ痛いだけなんだからっ!!!



「・・・似たようなこと、勇儀に言われたぞそれ」

「・・・なぬ！？もう勇儀に会ったの！？・・・あつ！もしかして勇儀、外に言ってたの！？」

あれ、知らなかったのか？・・・勇儀がきちんと説明しないなんて珍しいな。

「あまあ少しの間な。いやーあん時は死ぬかと思っただぜ」

「ぐぬぬ・・・勇儀の奴、今日誘っても来なかった理由はこれか・・・」

ん？萃香なんて言ったんだ？よく聞こえなかったが・・・まあいいか。

「アラス。ちよつといいかしら？」

「ん。おお紫か。あんたも久しぶりだな」

紫と幽々子が近くまできていた。

「少し聞きたいのだけれ、まだ言えない」・・・まだ何も言っていないのだけれど」

半目になって見てくるゆかりん。まあこれは本当のことだ。

「言わなくてもだいたいわかる。あの後俺たち三人がどうなったか。そしてその後はどう過ごしたか。アレはどうして復活した。正体は・

・・・とこだろ」

「・・・正解ね」

紫はため息をついてお酒を少し飲んで息をついた。

「・・・いつごろかしらね。説明してくれるのは」

「そうだな・・・」

正直な所、まだ話すなとしか言われてないが・・・

「まあそんな遠くないさ」

「そ」

そう言っただけゆかりんは元の所へ戻ろうとした・・・あれ。

「・・・正由のことは聞かないのか？」

そう言っただけ紫は立ち止まって振り向いて言った。

「今聞いたのは幻想郷の管理しているものとして、よ。正由はあの時言っただけ。待ってて。だから信じるのよ」

それだけ言っただけ紫は戻って行った。へえ。

「正由がねえ」

正由自身も変わり始めてる、そういう事か。

「(このまま、いい方向にいけばいいんだがな)」

人生、何が起こるかわからない。だから【世界】は複数存在する・  
か。

「うう……なんか仲間外れに……」

あ、萃香が拗ねた。

「まあまあ機嫌直せ。今日一晩は酒飲み付き合ってやるからな」  
そう言っつて萃香の頭を撫でる。

「……うん、ありがと……で、子供扱いすなっ!!!!!!」

ばいっ!!!!!!

「いっぶっ!?!」

……やっぱ俺はこんなオチなのね!

【現代】

正由 side

「……………」

夜の風を感じながら空を見上げる。メディスンは渚の家に行き泊まるそうだ。パルスィは俺の家に泊まるようなので現在休んでいる。

「と思っているのかしら妬ましい」

「……訂正。ついてきてました。」

「何やってんのよ」

「……………なんと言うか……………その、ね」

あの時紫に誓った。その言葉に嘘はない。だけど……………

「このままで……………やっぱりいいのになってね……………」

「……………」

本当に、俺は新たに思ってる道を選択していいものなのか。やっぱりダメなんじゃないかな……。

「……………あんたは……………」

「パルス」「ネガネガしすぎなのよ!!!」【バキッ!!!】「げふ!?!」

グーで殴られた…………。

「あんだねえ…………迷いすぎなのよ、今のあんた」

「迷い……………」

確かにそうだよ。うん。でも本当にわからないんだよ。

「…………私から言えるのは一つだけ。【あんたが本当に思ってることは、なに?】」

「……………」

俺が…………本当に思ってること…………? 幻想郷を護る…………事…………? ……  
・なんでかな。それが思ってることのはずなのに、頭がそうだと  
つていない。

「……………あとは、自分で考えなさい」

そう言つて家に戻つて行くパルスイの背中を、俺は黙つて見ている  
ことしか出来なつた。





あああああ！！！！！！」

「信太！？」

「これはいいたい・・・どういことだ！」

あるものは全てを託す

「お願い、します・・・師匠と姫様を・・・」

「ああ。わかってるさ」

あるものは助けを求めながらも素直になれない

「・・・私達は月には帰らない！！！！だから、あなたとはいられない  
！！！！！！」

「月にとってあなたは英雄な存在。・・・だから、無理なのよ！！！！」

「バカ野郎・・・泣いて言うセリフじゃねえだろうが！！！！！！」

あるものは虚しい心のまま、闇に吞まれる。

「……………」

「妹紅！？お前……まさか!？」

「全員下がれ」

そしてあるものは

「……………正解」

友の頼みと、そして守りたいものの為に

「……………大氷刃鳳凰剣」

氷の鳳凰となるのだった

END 鬼の喜びし宴（後書き）

アラス

「・・・何やら大変になりそうだな」

マッサー

「まあ次は多分ギャグ的なものを書くけどね・・・それとね」

アラス

「なんだよ」

マッサー

「この作品のオリ異変のラスボスがね・・・まとまってきたんだ・・・これ」

アラス（渡された紙を見る）

「・・・おいおい。正気か？」

マッサー

「・・・多分。それにする」

アラス

「・・・影響は？」

マッサー

「・・・クローン」はい禁止ーネタバレ禁止ー」

??・暗躍せし存在と夢見る者

??side

「(やっぱり・・・こうなる・・・のね)」

私は今、とある場面を誰にも見られることなく気付かれる事無く、ただ何もせず、見ていた。

「いつてらっしやい、また会える日を。 正由」

「いつてきます、また会える日を。 紫」

幻想郷の賢者と、幻想郷を護りし剣。その二人が一時の再開をして、別れる。もう何度、これを見てきただろうか。

世界は複数存在する。それが交わることなど普通はない。でも、それが普通ではなかったら？

世界は何度も滅ぶ。それが別世界からの存在が原因だとしたら？そしてその存在が、何度も世界を行き来するならば？

星の生命は吸い取られ、莫大な力となってしまう。もうアレは何度繰り返していっただろうか。

生物の負までを取り込んでしまったアレはもう誰にも止められない。そう私は確信してしまった。

だから、だろう。私はアレの人形になってしまった。私の行きついた一つの世界は滅んだ。そして人形となり、様々な世界を同じように滅ぼした。

その中には、私の元いた世界と類似した世界もあった。  
・・・でも滅びた。

もう希望なんて持てない。いや、持てるわけがなかった。希望を持てば持つほど、私は怖くなってしまふ。そして、絶望してしまふ。だから希望を持つのをやめた。

「（・・・）」

だから私は感情も・・・捨てた。

「（また・・・同じ）」

アラス・クロフィードがこの異変の時に来る事も、既に知った事だった。そして近い時に起こる長き夜の異変で力を出すことも・・・

「（繰り返し）……」

何もかも、同じ。決して運命からは逃げられない。滅びの運命からは。

ああ、今日もまた、私は世界を滅ぼす運命をだそうと行動している。

「（誰か）……この運命を止めて見せて……」

??side

夢……なのだろうか。この映像は。白黒に写って見えるこの映像は、いつたいなんなんだろうか。

「……！」

自分の知っている誰かなのか。それとも知らない人なのか。それす



『・・・まだ君は、この世界の真実、そして世界の秘密を知るには  
早いよ』

・・・誰？

『・・・世界を救おうとしてる存在かな・・・ま、救う人がいるのさ』

・・・世界がどうか。

『それはまだ言えないんだ。だが戦う時が来てしまう』

・・・。

『繰り返されていく歴史で、ようやく全てが揃った世界だ。この世界で奴を倒さなければ、もうチャンスはない。いくら時間を繰り返していても、奴は力を増すばかり。いずれ時が繰り返しているだけだと気付かれてしまう』

・・・。



『そうなれば奴と、そして【世界】はこの世界を消滅させるだろう』

・・・そんな・・・

『・・・僕と話したことはまだ記憶はされない。目覚めた時には忘れていただろう』

・・・そう。

『それじゃ、時が流れた時にまた会おう』

・・・はい。

『今流れてるこの時は、何か、僕にも予測できない事が起きようとしている。それは一体誰なのか・・・僕にもわからない』

正由 s i d e

「俺が本当に思っていること・・・か」

自分はいったい何のために戦っていたのだろうか。あの時渚やアラスをだましてまで、俺は一人で戦う道を選んだ。それは正しい？

・・・違ってもいいきれないし、良いともいえない。

じゃあ護るために戦ってた？

・・・しっくりこない。何か・・・たりない。

ドクン

『  
』

「ぐっ!？」

突然の心臓の高鳴り。そして頭痛。そして……何かを感じた。

「……………」

何か……何かが……。

「世界が……鳴いている」

星の……光が、そう言っているような。星が導いてくれているよ  
うな、そんな気がした。

「俺は……………」

このまま……ここで黙って、いられない……。確かに、【世界】  
に対抗する手は考えてた。でもそれだけをしていることなんて……  
俺には、できない!!!

「何か……ある、この世界には」

まだ答えは出せていないけど、俺は、選んだ道を進む。自分が知ら  
ない、この世界の真実を求めて……。

??・暗躍せし存在と夢見る者（後書き）

今回の話の登場人物は四人でした。

- 1?? ? ?（オリキャラ漢字四文字）
- 2?? ? ?（オリキャラ漢字四文字）
- 3?? ? ? ?（東方キャラ漢字五文字）
- 4 宮藤正由
- 5?? ? ? ? ? ? ? ?（東方キャラカタカナ八文字）

2と3は既に出ています。

1は誰かの回想ででした。

5は初登場です。

というかシリアスでした。次回はギャグ話かな？

東方永夜抄〜Imperishable Night・(前書き)

ギャグの話かと思った？

本編だよ！

予告の台詞をそのまま使う訳では無いので「注意」下さい。

東方永夜抄 Imperishable Night .

賢太 Side

中秋の名月を迎えようとしていた秋ぐらいの日だろうか、明らかに異変は起きていた。

「・・・この長い夜と月をどう思う？美鈴」

「そうですね・・・やはり異変な事が起きているのでは？」

あまりにも長すぎる夜。そして月の進行が止まっているのだ。しかも満月。

「・・・あまり良い気分になれないな。特にあの月は・・・嫌な感じがする」

「賢太さんもそう思いますか？」

美鈴も俺と同じ事を気にかけていたのだろう。あの月は月でないように感じるのだ。

「・・・他の皆さんは動き出したでしょうか」

ここで美鈴が言っているのは信太や俊一達の事だろう。まあ少なくとも霊夢は何かするだろうが。

「・・・私達はいつ動くのでしょうか？」

「・・・少なくとも俺と美鈴と咲夜さんは留守番じゃないか？」

一瞬後ろを振り向いて俺は疲れた風に溜息を吐く。

「だーからー！！異変を解決しに行くのは私よ！フランは黙ってお留守番してなさい！」

「抜け駆けはズルイよお姉様！！私も外で遊びたいの！！」

主である二人の吸血鬼姉妹が言い争っているのだ。かれこれ三十分経過したな。因みに咲夜さんは静観しており、パチユリーも小悪魔も全然気にしていない様子で静観していた。

「・・・ですよねー」

このまま夜が明けてしまっんじゃないだろうか？そんな事も考え始めていた。

「こうなったら・・・全員、恨みっこ無しのジャンケンよ！！！！」

「えっ」

おいおい、それはレミリアが負けたら確実に、拗ねる姿を余裕に予想出来たんだが？

「言つとくけど、この場にいる全員が参加よ。参加しないなんて、許さないわよ?」

「……逃げられないか。まあでもきつと何か考えがあつての事なんだろう、いくらなんでもきつとそつだ。考え無しに言ったんじゃないだろう。」

「しかしお嬢様、私と美鈴と賢太君は前回の異変の時に出ましたので、今回は見送りでも「ダメよ」「……はあ……」

咲夜さんが一応言ってくれたが無駄のようだ。

「よし……最初はグー!!ジャンケン……」

しょうがねえ……とりあえず、運に任せるぜ!

「……どつしてこつなつた」

「……どつしてなんでしょうね」



最初のジャンケンはこの結果で終わった。

俺・・グー

美鈴・・チヨキ

咲夜さん・・グー

パチュリー・・チヨキ

小悪魔・・チヨキ

レミリア・・グー

フラン・・グー

「・・・おい？不戦敗はできない」「駄目」「・・・姉妹二人にそろって言われてしまった・・・」

しかしどうする？今の所ベストなのは確かだ。一番にレミリアとフランに行かせたいのは確かなんだが（心配はいらなと思うが）主である以上、そのまま行かせるのはなあ・・・。すると少し考え込んでいたパチュリーが何かを思い付いたようだ。

「・・・そうね。だったら主と従者ペアで行けばいいんじゃないかしら」

簡単に言えば俺とフランのペア、咲夜さんとレミリアのペアだ。わざわざ一緒に行動しないのは姉妹いわく、競争らしい。

「負けないわよフラン！」

「私も負けないもん！」

はあ・・・これは従者の差が勝負の分かれ目だな・・・。

「フラン様は任せるわよ？賢太君」

「はい、咲夜さんも気をつけて」

こうして紅魔館からは吸血鬼二人とその従者が出撃する事になった。

### 霊夢Side

「・・・で、俊一がなくて魔理沙は真っ先にアリスの所へ行っただけどそこにもいないから可能性のある所へ来て見た、と。これであつてるかしら？」

「おう、説明口調ありがとっだぜ」

というわけで現在神社に魔理沙とアリスがやってきていた。

それよりも、誰が好き好んで長い説明しないわよ。まあそれはさておき、

「俊一ならいないわよ。というか信太をしらないかしら？」

またいないのよね。まあ買い出しに行つてたから何か見つけて独断で動いてるのかもしれないわ・・・

「私もアリスも見えてないわね」

あらそう・・・ま、そろそろ私も動こうと思つてた所だから、ちようどいい、か。

「さて、と。行きますか」

「お、巫女が動き出すか」

いい加減月は見飽きたし、それにあの月はさつきから止まつたまま。おまけに変な感じだし。

「まあね。このままだと不便になってくるし、なにより信太を探さないかね」

「それが一番大事なのか・・・」

だって信太の作るご飯、私がつつたよりもおいしいのよ!?!?・・・まあ私も負けてられないから最近自分で作る機会を増やしてるけど。そんなことはどうでもよかつたわね。

「まずはどこに行こうかしらね」

クパア

「あら、ちょうどよかったかしら？」

げえ。スキマバ「何か変な事考えたかしら？」お約束よ。

「何の用？素敵なおさい銭箱はあっちよ」

「じゃあ木の葉でも入れとくわね」

こいつ夢想封印でボコルわ……。まあそれよりも、本気で何の用かしら。紫に幽々子に妖夢までいる。

「今回の異変、私達も協力するわ」

……ふうん。

「何か企んでる？」

「酷いですわ。私が年中何か企んでるみたいな言い方ですわよ？」

原作じゃそうよねー。この小説じゃそれほどじゃないけど。

「……そうね。理由としては、結界まで及ぼしかねない異変になっているからね」

「……！その情報は確かなの？」

だとすれば時間はかけてられない。最速でこなさないと。

「恐らくね。結界に一瞬反応したから」

「・・・それで、協力しにきたと？」

私の言葉に紫は頷く。

「ちょうどよくこの場には六人だから、二人ずつで各地に散りましよう」

「それが無難ね」

従って私は紫と組むのね。結界組って所かしら。

「これで私達が一番に解決出来れば有名になれるだろうな！」

「はあ・・・そう簡単に行くわけないでしょうが」

魔理沙とアリスは魔法使い組。魔理沙も色々研究してるみたいだから、大丈夫でしょうね。

「妖夢、頑張りましょうね」

「幽々子様、あまりはしゃぎすぎて怪我をしないでくださいね」

幽々子と妖夢は冥界組かしら。亡霊って怪我するのかしら。

「じゃあ各自、頑張りましょう」

「さあ・・・行くわよー！」

こうして博麗神社から三つの組が出撃されたのだった。

アラスSide

「・・・来たか」

ついに始まった。長き夜。止まった月の異変。

正由が言っていた通りの異変だ。これを、あいつらが起こしている。なんで正由が異変の事を知っているかはわからない。が、時が来れば話してくれるだろう。変な言い方だが、殺し合った仲だ。強制中断だが。

「まああん時はお互い知らなかったし、仕方なかったからな」

ま、そんな昔話とはかく大事なのは今だ。とにかく時間が惜しい。

「・・・もしかしたら、月から使者が来ているかもしれない、か」

あくまでも予想と、正由は言っていたが俺はこの予想が現実になる  
と思っていた。となるとやる事が増える。

「まずはあそこだな」

目指す先は迷いの竹林と言われている場所。そこにあいつらは住ん  
でいる筈。

「久々に・・・本気を出すかもな」

そう思いながら、俺は竹林へと足を進めて行った。

東方永夜抄 Imperishable Night・(後書き)

【結界組】

博麗霊夢

八雲紫

【魔法使い組】

霧雨魔理沙

アリス・マーガトロイド

【冥界組】

西行寺幽々子

魂魄妖夢

【紅魔館組】

レミリア・スカーレット&十六夜咲夜

フランドールスカーレット&海崎賢太

【氷の魔剣士】

アラス・クロフィード

【?????】

?????

フラン

「来た！自機化来た！これで勝つる！！」



賢太

「えー・・・また俺自機持ち？いいのか・・・？」

次回はStageに表と裏を一部つけます。

アラス

「言ってしまったえば裏が俺でそれ以外の組が表だ・・・それよりも、最後のは誰だ？」

ふふふ・・・お楽しみに！

Stage 1 - 表 銀のペンダント (前書き)

マッサー

「久々の更新！！申し訳ありませんっ！！！！」

咲夜

「でも今回本編である必要が無い気が・・・」

マッサー

「それではどうぞっ！！！！」

レミリア

「無視したわね」

## Stage 1 - 表 銀のペンダント

咲夜 side

終わらぬ夜の原因を探るべく、私とお嬢様は空を駆け回る。何の当てもなしに飛んでいる、わけではないと思うのだけれど。

「ふっふっふ・・・久々に満足のいく夜の風を浴びた気がするわ」

「・・・やみくもに飛んでただけかも。ただ外に出たかっただけなのかしらね。フラン様もきつと同じ理由でしょうね。異変解決はあくまでおまけでしょう。」

「・・・初めて出会った頃はもう少しかっこよかったよな・・・まあこれはこれでありね。(ロリク・・・子供好き)」

「(そういえば・・・お嬢様と初めて出会った日も、こんな夜だったわね・・・)」

この世界に来た時、お嬢様は私に話し掛けて来た。

『じんばんは。今日はいいい夜よ・・・』

彼女は突然現れ、一つの事を頼んで来た。

『一緒に・・・踊りましょう?』

そして私にダンス（戦い）を申し込んで来た。

殺し屋としての実力がある私が勝てると思っていた。しかし彼女は・

・

『ふふ・・・フフフ・・・ハハハハハハハッ！!!』

吸血鬼だったのだ。吸血鬼の殺し方なんて、私は知らない。というか吸血鬼自体初めて見たのだから当然なのだけれど。

『人間の癖にやるわね！だけど・・・チエックメイトよ』

結果は私の負け。私はこのまま死ぬのか、もしくは血を吸われて吸血鬼になってしまうのだろうか、と思っていた。

死ぬなんて絶対に嫌だった。雅美さんが言っていた真実も探さなくてはならないし、正由の事も知りたい。とにかく、吸血鬼になるのも死ぬのも、絶対に嫌だった。

でも負けた身体は思うように動かない。

だから私は吸血鬼を睨めつけることしか出来なかった。

『ふふん・・・中々面白い人間だな・・・』

私を見てどう思ったのか、彼女は驚くべき事を言ってきた。

『お前は今運命の分かれ道に立っている。このまま私に見捨てられるか、私の僕として来るか。一応言うけど、吸血鬼にはしないわよ?』

一瞬自分の耳を疑ったぐらいだ。正直何か企んでいるようにしか考えられない。だから私は口を開こうとした。

『・・・その選ぼうとしている道に、お前は信念を突き通せるかしら』

それを聞いて、私はお嬢様の従う者となった。お嬢様が何故、あいつの口癖に似ている事を言ったのかはわからない。

偶然なのかもしれない。だけど私は偶然だとは思えなかった。まさしく運命。そう思った。

「咲夜ー？どうしたのよいったい？」

「なんでもありませんよ。お嬢様」

ちよつと思ひ出に浸り過ぎたかしら。お嬢様に心配の声をかけられてしまったわ。

「んー。ならいいわ」

そう言つて私に意識を向けるのはやめて再び夜風を気持ち良さそうに浴びながら跳び続ける。

そつえばあの日も、夜で風が気持ち良かった日だった。

私が殺し屋の家系だと知り、皆から黙っていないなくなるうとした日。それは私の誕生日の日であり、同時にある事に気付いた日だった。

『【ドゴッ！！】あぐっ！？』

殺し屋の存在を知り私がこの町から去り、孤独になろうとした夜。私の両親に殺された者の関係者が私を殺して復讐しようとしていたの。

当時の私は護身術程度しか習っていない。殺される、としか考えられなかった。

・・・あいつが来るまでは。

『・・・大丈夫？咲夜？』

殺される直前に正由は私を抱き抱えて復讐者と距離をとっていた。

『・・・何者』

『幼なじみだよ』

私を降ろして庇うように前に立つ。当時の私は酷く混乱していた。なにせ、正由と渚君は暴走した車にひかれて意識不明の重体で一ヶ月以上も目を醒まさなかつたのだから。

生きていた事に喜びを感じつつも、私のせいで傷ついて欲しくないと、思っていた。

だから私は正由の前に立って逃げてって、言おうとした。

『正由、私が『咲夜、下がってて』え……？』

私の事を予測していたのか、正由は手で静止して復讐者と対峙した。

『……正気か貴様？』

『当たり前だよ。咲夜を置いて逃げる事なんて……できないから』

考えれば予想出来た事である。正由は優し過ぎるうえに、相当なお人よしだ。私が殺される所を見て、逃げるわけない。

『……そいつは殺し屋の十六夜だ』

『殺し屋……？』

『……っ！！馬鹿っ！！さっさと逃げなさい！！あなたには関係無い事なの！これは私の問題だからあんたは余計なのよ！！』

全身が震えそうになっているのを必死に抑えながら、私は正由を拒絶する。私のせいで正由が死ぬなんて考えたくない、そう思ってい

るからこそその拒絶。

『だから・・・早く・・・逃げて・・・』

必死に涙が出るのを抑えているけど、はたして抑えられていたかどうか、わからない。

正由に拒絶されたくないから、自分が殺し屋だと知って正由が私をさけるんじゃないかと。そんなことを恐れていたから涙が出てくるのだと思う。

『・・・お前が何を考えて何処に行こうとしているのはわからないけど・・・孤独になる事は・・・きっと後悔するよ』

その時の正由の表情は一瞬だけど、何か思い詰めた表情だった。でも一瞬にして笑顔に戻った。

『咲夜がどんな人だろうと、俺は受け止めるよ』

『あ・・・』

私は彼に抱きしめられていた。十歳にしては少し高い身体で、優しく抱きしめられていた。

『だから安心して・・・泣きたい時は、泣いてもいいんだよ・・・？』

『う・・・うっ・・・うっっ』

気付けば私は涙をポロポロ流していた。



バツ!!

ザツ!!

『……………!?!?』

何の音かと驚いて見ると、正由の右手の指と指の間にナイフが挟まっている。向いている方向は正由の頭。

『…復讐は何も生み出さないよ』

復讐者が投げて来たナイフだ。私を庇うようにして前を向く正由。

『……………問答はなし。自分は復讐するためにここにいるのだから』

『そう…か。なら、かかってこい』

『正由!?!?本気なの!?!?』

正由は運動神経は良い方だけれど、そんなのこんな所で役に立つわけない。そんな私を見て小さく笑ってこう言った。

『大丈夫。心配しないで』

そう言って駆け出して行った。

そんな事よりも私は、さっきの正由の表情を見て、正由がどこか遠くにいるような感じがした。

結果としては正由が勝った。とても十歳の動きとは思えない動きで、武器も己の身体だけで勝ったのだ。

『何故・・・生かす?』

『俺は貴女を殺す為に戦ったんじゃないです。復讐を果たしたとしても、虚しいだけですから・・・だから復讐するのをやめて頂けないでしょうか?それが一番良いと思うんです』

『・・・わかったよ・・・ありがとうな』

正由は彼女を救ったのだ。復讐は彼女自身も本当は望んではいない事だったのだ。

『大丈夫?咲夜?』

『・・・大丈夫よ』

彼女が去ってから正由は私に話し掛けてくる。それは私の台詞よ、全く・・・。

『そっか・・・じゃ、はい』

『えっ?』

正由から小包を差し出されて困惑する。

『誕生日・・・でしょ?』

『・・・あ』

すっかり忘れてた・・・。衝撃的な事が多過ぎて飛んでたわ。

『開けて・・・いい?』

『うんいいよ』

ガサゴソ・・・

『これ・・・ペンダント?』

中に入っていたのは銀色のペンダントだった。

『うん。咲夜に似合うかなあ・・・とと思って』

『・・・高くなかったの?』

『それほどでもないから大丈夫・・・咲夜?』

気がついたら私は再び正由に抱き着いていた。

昔の記憶を思い出しながら私は首から下げている銀のペンダントを見た。

「（あの時私はすっかりと正由の事が好きだと、一人の女性として正由の事が好きだと自覚した）」

あのあと私は殺し屋を継いだ。とは言っても、殺さないで依頼をこなしていった。おかげで【殺さない殺し屋】なんて言われたけど、それで良いと思った。

私を信じてくれている人達がいる。それだけで、私は進む事が出来るから。

だから正由、あなたが隠している真実を教えてね？

きつとよ？

「咲夜、そろそろ人里よ。何か情報があるかもしれないわ」

「わかりました、行きましょっお嬢様」

N e x t S t a g e . . . S t a g e 1 - 裏へ . . .

Stage 1 - 表 銀のペンダント（後書き）

アラス

「今回は俺だな」

マッサー

「蛭は犠牲になるのか・・・な？」

因みに今回の一話限り（多分）の十五歳の復讐者さんのモデルは【空の境界】の【両儀式】さんです。容姿だけですよ？」

アラス

「これから先一話限り、もしくはサブオリキャラはどこかのキャラの容姿を使う場合がある。あくまでも容姿だけだ。能力まではない・・・筈だ」

マッサー

「次回からはなるべく更新を早くしていきたい・・・頑張ります」

マッサー

「……そういえば今日俺の誕生日だなそういえば」

アラス

「なん……だと!？」

番外・妖々夢エフルート 新たな巫女？その名は……（前書き）

ギャグ……的なお話です



番外・妖々夢IFルート 新たな巫女？その名は……

妖夢Side

「終わりよ。ここで散りなさい」

私は自分が敗北するの悟った。このままいけば私は彼女の攻撃を喰らって意識を手放すだろう。主の期待にも答えられず、いやそれだったら既に私は期待に応えていなかったかもしれない。

既に何人か、幽々子様の所に行ってしまったている。私達の目的を阻止するために。

申し訳ありません……。幽々子様……。

「そこまでだ！！！」

ドオオオオオオン！！！！

「あああつ？！！！！」

………は？一体何が起こった？見れば十六夜さんは何かによつて吹き飛ばされている。一体誰が？何故このタイミングで？

「ふふふ……さあ道は作ったぞ？覚悟を決めるべきではないのか？選ばれし巫女よ」

声のした方向を見ればそこにいたのは三名だった。一人は私も知っている。藍さんの式の橙の箒だ。何か凄い呆然とした表情をしている。

もう一人は黒と白の巫女服を着て青のリボンを付けた少女がいた。少女にしては大きい方だろう。何か疲れきった表情だ。どこかで見ただ気がする……？

最後の一人は全く知らない方だ。女性だ。

緑色の背中まで届く髪、エメラルド色の瞳、2m越えているだろう

長身。動きやすそうな浴衣を着ている。

そして・・・ありなくらいの大きさ。幽々子様や紫様よりも大きい。・・・私は・・・小さいなあ・・・

・・・コホン。そんなことよりも、一体何しに来たのだろうか。

「さあいつまで怖じけついているのだ！さっさと行かんか！我を楽しませよ！」

「・・・最後のが本音なのね・・・はあ・・・」

巫女さんがこれでもかというくらい暗い闇を作り出している。・・・あれ・・・どこかで見た記憶がある？

「全くウジウジしておって！初めてではないのだろうか？ならいいではないか。増えようが問題はない」

「問題大有りよ！！・・・はあ・・・」

「お主も嫌ではないのだろうか？無理矢理着せたとはいえ、しっかりなりきつとるし」

「・・・はあ・・・」

な、なんだろう・・・こ、この感じ、あの巫女さんの反応がどこかで見た事がある！？でもどこで・・・

「ん、どうやらその半霊はお主を見た事があるようじゃな。しかし混乱している所を見ると記憶封印でもさせたか？」

「・・・あんたまさか」

記憶封印？私にそんな大層な記憶なんて無い筈なのだが・・・。

「我が解き放つてもいいが、それでは面白くない・・・そのメイ  
ド」

「何かしらね」

十六夜さんはかなり警戒して殺気の籠った目を向けていた。

「まあそうカツカツするな。それよりも・・・こいつを見てくれ。こ  
いつをどう見る」

と言った彼女は隣にいる巫女（よく見れば脇に穴が空いている）を  
見るように促す。

「そんな手に私は・・・っ!？」

途端に十六夜さんの表情は驚愕に染まる。一体誰なんだ・・・。

「凄く・・・綺麗・・・です・・・」

「・・・・・・・・（泣）」

顔を赤くして見つめていますね、十六夜さん。そして巫女さんが泣  
いています。

でも確かに、女性の私から見てもその・・・大変綺麗といいますが、  
凄いです。

胸は・・・まあそれもステータスでしょう。

「なんでこんなことに・・・このクソ竜が・・・」

「これこれ、女子がそのような言葉を使うでないぞ？」

「あんたのせいよ！あんたの！」

・・・なんだろう。本当に、その、あの巫女さんはどこかで・・・  
ハッ！？

「その半霊半人に電流走る！！！」

「人の心を読むな！ギャグだからって許されるわけじゃないのよ！」

この激しい言葉の突っ込み、そして・・・ああともう少しなのに  
！？

「よ、妖夢！無理して思い出さなくても、というか思い出さないで  
！お願いします！」

何か、何か喉まで来てる！！思い出せ魂魄妖夢！

「だめえええええ！！人の話聞いてえええええ！！！」

「第一ヒント。主達の企み」



・・・なんだろう。なんだか正由さんがふっきれそんな感じがするのは気のせいかな。

「こいつの言葉を信じたくなかったけど、まさか本当に、成功するなんて・・・」

シユウウウ・・・

正由さんから何か力が溢れて来ている!?

「もう・・・いいや」

「ふっきれた」

カツ!!!

光が大きく輝き一瞬目をつぶってしまった。そして変化していたのは・・・。

「え?」

「は？」  
「にゃ？」

私と十六夜さんと橙も呆然とした。・・・というか橙は空気になりかけてた。

「・・・・・・・・」

正由さんがいる。それは変わらない。顔立ちも髪も瞳も服装も変わらない。でも・・・背が低くなった？

「ほほー・・・・・・・・(モミュモミュ)」  
「！？さわるなあ！！」

緑髪の人が正由さんの胸を・・・胸！？確かに胸がある！？なんでどうして！？

「ちょ、ちょっと待ちなさい正「正由じゃないわよ咲夜・・・」え・・・・・・・・？」

・・・あの表情はマズイ。

「・・・宮藤正由には能力があつた・・・正直なんでそんな能力なのかわからない・・・」

正由さんが怒っている時に見せた表情だ。そして今も・・・・・・・・

「【女になる程度の能力】・・・・・・・・冗談にも程があるわよ」

逃げなげや・・・「逃げようなんて思わない事よ？」ヒィ！？



「ああ、そうそう。私の名前教えとくわね？」

・・・もう駄目だ、おしまいだあ・・・

「宮藤富美・・・【怒りを能力に変える程度の能力】・・・さあ、覚悟は出来たかしら？」

幽々子様・・・私は貴方を見捨てます・・・どうかおゆるしを・・・ガクッ

【???】

「その後春が来ない異変は、主犯の者や解決に来た者達は半殺しさ  
れたようだ・・・」

だがこれは・・・ハズレかもしれないな。可能性を出す為に生み出し  
たが・・・時期を早めればよかったか？それとももつと遅くに？

・・・む？・・・ほう・・・これ以上時空に亀裂を生み出すの  
はやめておくか。今進んでいる道が・・・どちらにしる最後の道なの

だからな。

歪みにより世界も限界に近い。その証拠に本来ならば存在しないものも存在している。それは我もだがな……。

……さて、我も行くか。

最高の大団円を迎える為に！」

番外・妖々夢EFLルート 新たな巫女？その名は……（後書き）

マッサー

「ギャグかと思った？最後の最後でシリアスだよ！」

????

「ついに我の登場だ」

マッサー

「彼女は重要なオリキャラです……最強に近い存在ですけど」

????

「この話では我の正体は明かさんのか？」

マッサー

「まだ明かせません……それと正由は……」

????

「一見ふざけているようだが……」

マッサー

「……そういう事です」

????

「伏線だらけであるな」

マッサー

「想像力（妄想力）は止められない。では皆さん次回で！」

## Stage 1 - 裏 虫の知らせ(前書き)

またまた遅れて申し訳ない……。とにかく、どうぞ。

それとIFの話は本編と全く関係ないので、IFの設定は本編ではないのでご注意ください。

## Stage 1 - 裏 虫の知らせ

アラスside

さて、あいつらのいる竹林にまずは向かわなければならぬが・・・  
中々そう簡単に行けそうにねえな。

数多くの人数が漂っていやがる。この夜が原因だろう。どうしたもんか・・・

「その人間！！止まれー！！」

「止まれと言われて止まる俺。何のようかな？」

虫・・・？ゴキ、いや流石に失礼だな。女の子だしな。蛭か？

「せつかくの夜だからね。私も暴れさせてもらおうと思って」

「何がせつかくの夜で暴れる理由か理解したくないが、それに俺が付き合えと？」

面倒なんだが？急いでいるわけじゃないが、さっさと行って解決した方がいいだろうし。

「そうよ。いいじゃない。今日はこんなにも素敵な夜よ？私と踊ろっよっ。」

「め・ん・ど・う」

俺はどこぞのバトル馬鹿達とは違って戦うのは面倒だ。

それにこう言ってはなんだが、彼女はそれほど妖怪としては力が強くない。恐らくまだ年月が少ないからで……ん？

「……お前、何年生きた妖怪だ？」

「む、馬鹿にしないでよね！まだ百年未満しか生きてないけど、貴方を相手にするのはわけないわ！」

「……違う。いや確かに彼女の言っていることは本当だ。だがそれは彼女の記憶にある中での話。」

「（間違いなくこいつはチルノとレティと同じ、あの時を生きた妖怪……）」

だが違うのはチルノとは違って記憶がばらばらになりすぎていること。ルーミアと違って封印されているわけではないこと。

「（よくわからんが転生というやつか？）」

その可能性が大、か。まあそんなことは俺にとってはどうでもいい。

「急に黙ってどうしたのよ？今更怖じけついたのでかな？」

「じゃあそういうことにして、俺はとんずらしていいか」言葉の意味がわからないけど逃げるのは駄目「……チッ」

「……はあ、しょうがない。さっさと終わらせよう。」

「俺に弾幕ごっこをしろと？」

「話がわかってるじゃない。じゃあ早速やるわよ！私はリグル・ナイトバグ、蛭の妖怪！」

「アラス・クロフィード・一応人間だ」

やれやれ・・・面倒だ。

「まずは様子見、えいっ！」

ドドドドドド！！！！

・・・又ル過ぎる。剣を使うまでもないな。魔力だけで・・・充分。

「行け！」

氷の弾幕を生み出し、リグルの生み出した弾幕に向かわせる。

ズババババババツ！！

当然相殺ではなく、俺の弾幕が押し勝ってリグルの弾幕を消滅させる。

「えっ！？」

リグルは驚いた表情をしているが、そんな暇はないぞ？

「そらっ、弾は迫ってるぜー！！」



「なめないで頂戴！蚩符『地上の流星』！」

スペルカード宣言か。俺の弾幕は消されて今度はリグルの弾幕が迫って来たが……

チチチチチ！！！

「チヨン避け〜」

またの名をグレイズ〜だったか？

「嘘っ！？」

さて、さっさと片付けるとしますか。

【青年？ボッコボッコ中……】

「ちよつと！そんな近くで……うわああああ！？」

「いや・スペルカード宣言してればいいんじゃないかねえの？（まあよくわからんが）」

「覚えてなさいよおおお！……！！！」

墜落墜落〜。ま、今の生活を楽しみにな。

【ボッコボッコ完了！】

「さて、先に行かせて貰うとするか」

こんな所で余計な時間はかけられねえ。急ぐぜ！

【現代・現実世界・正由の家】

正由Side

「何か・何か・何か」

何かがこの【世界】にある・でもそれは何？

「……………」

疑問が出て止まらなくなる……。

「・・・ねえ」

そもそも俺がさつきから考えてる【世界】はこの世界なのか？・・・ん？

「ちよつと・・・正由」

なんで世界を言い直すんだ俺？だって世界は・・・んん？

「聞いているのかしら？」

【世界】は・・・【世界】は・・・？

「ああもうなんだってんだよー！」「それは私の言葉よ妬ましい」  
ドゴッ！」「ぐはっ！」

背中にクリティカルヒット……。痛いですが、パルスイさん……。

「さつきから何を考えてるの？しかもウロウロしながら・・・鬱陶  
し過ぎて妬ましいわよ」

そう言われても……。

「何か、頭がはつきりしないんだ」

「・・・まだ迷ってるのかしら・・・？」

ああそうじゃなくて！

「それとは全く別の事なんだ。言葉では・・・なんというか・・・説明出来ないんだけど・・・」

「はあ？」

うーん・・・どう言えばいいんだ？頭が混乱し過ぎて訳がわからなくなってきたぞ・・・？

「妬ましい・・・あんた疲れてるんじゃないの？」

疲れ・・・そうなのかな。

「今のあんたはただの人間。多少何かの力はあるかもしれないけど、それでも人間よ。わかつたらとつと寝たら？妬ましい」

今日疲れた事は特にしてないけどな・・・。だけど・・・。

「わかつたよ、今日はもう休む・・・!？」

キイイイイイン・・・

・・・なんだ、今の感じは・・・。

何かに・・・引き止められた？

「・・・？どうかしたのかしら妬ましい」

「・・・」

パルスィが心配してくれてる・・・けど今は頭に入らない。

今ここで今の感じた事を意識から外してしまえば、とてつもなく後になって後悔する・・・そんな感じた。

キイイイイイン・・・

「・・・ッ！」

「あ、ちよつと！？」

呼んでる！間違いなく俺を呼んでいる！！

頭に響いている何かが鳴りながら俺は家を飛び出した。

【移動中・・・】

【古びた洋館前】

「はあ、はあ、はあ・・・」

全速力でずっと走ったから、流石にきついな・・・。

「・・・・・・・・ここは」

あの時、信太君がいなくなった原因の事件があつた洋館・・・。

「ここで何が「何があるのよ妬ましい」「うわあ！」

ついてきてたのかよ!!

「追跡余裕よ妬ましい」

そうですか・・・。

「で、こんな所に何があるのよ？」

「正直わからない・・・けど何かある」

キイイイイン・・・

頭に響いてる音・・・確実に呼んでる。それに、

「この館・・・何か怪しげな力も感じるんだ」

「・・・・・・・・」

今の俺に出来る事なんて限られてる・・・けど。

「このまま黙ってられないから、ね」

「・・・そう、なら私も行くわ」

「わかった・・・え？」

今なんて言いましたかパルスィさん？

「だから・・・私も行くって言ってるのよ・・・ああ勘違いしないで頂戴ね。今貴方を一人で行かせて死なれでもしたら私が死なせたようにも感じるし、なによりここじゃどう生活していけばいいかわからないから死なせる訳にはいかないの。さあわかったならさっさと行くわよ」

そう言っつて俺の片腕を引っ張って歩かせるパルスィ・・・。

多分だけど・・・パルスィは冷静に今の言葉が言えた、て思ってる・・・けど言わせてねパルスィ。

途中から早口でそれに顔を赤くしてたら、恥ずかしがってる事、隠せてないよ。

でも・・・。

「ありがとう、パルスィ」

「・・・ふん」

こうして俺とパルスィは館の中に入っていった。



**S t a g g e 1 - 裏 虫の知らせ（後書き）**

一ヶ月・・・早いですね。

もっと更新早くしていきます・・・。

番外・聖なる夜のメイドさん（前書き）

間に合わなかったーーーーー!?

正由

「あーあ・・・」

咲夜

「いつの間にか意識が消えていたのが原因ね」

チクシヨーーーー!!とりあえずどうぞーーーー!!本編進まなくてごめんなさい  
!!

## 番外・聖なる夜のメイドさん

### 十六夜咲夜Side

今日は12月25日。世間ではクリスマスという賑やかな日。皆が皆、クリスマスを楽しもうとしている。

クラスメイト達も楽しもうと色々計画してるけど私は今年遠慮した。去年の事を考えるととてもじゃないが参加したくない。

最近の高校生はあれほどに暴走するのだろうか？

まあ恐らくお酒が入ったからあれほどの暴走がおきるのだろうか・・・。

どこの【赤い悪魔】みたく挑発にもるわけないしね。さっさと帰るわ。

(注。以前咲夜に対して禁句を言って挑発したクラスメイトは次の日学校を休みました)

と思ったら下校途中、正由も参加しない事を聞かされた。(ついでに渚もだけ)

そしてこの時私は咄嗟に思いついた。

どうせ今日は仕事はない。家に帰っても暇なだけ。だったらミニパーティーでもすればいいのでは？と思ったのだ。

正由は二つ返事でOKしてくれた。じゃあ私の家だと約束して別れてパーティーの材料を買って行って・・・そして最後にどんなケーキ

を作ろうか知り合いのケーキ屋に下見に来た。その時こう言われた。

『咲夜さん？それってデートじゃないですか。頑張って下さいね。』

・・・・・・・・・・・・・・・・頭が真っ白になつた。

回想終了・・・

「咲夜さん？どうしました？」

「・・・え、あ、な、なんでもないわ」

平然、平然を保つのは咲夜。これはデートじゃない。ただの・・・

「・・・もしかして・・・デートだと意識してなかったり？」

ただのデート・・・あれ？

「そ、そんなわけないじゃない！誰が正由「私まだその人の名前言ってませんよ？」ぐっ、そもそも二人とは「下見してるケーキのサイズを見ている限り二人分かと」ぬぐぐ・・・」

言い返せない……。

「なるように頑張るしかないですね」

「……貴方も招待しましょうか？【パッフェル】？」

パッフェル。それが彼女の名前。私と同じ元暗殺者……。かなり性格が変わったわ。

「いえいえ。お二人の邪魔は致しません。ごゆっくりしてくださいね」

・・もうそのかけらもないわね。

「さあさあ、早く帰って準備をしたらどうですか？恐らくその人、約束の時間に来るような人ではないような気がします」

ん？正由が遅刻するわけないと思うけど……は！

「そうね、帰らせてもらうわ。またね」

「はいはい。またのご利用をお待ちしてま〜す」

【咲夜の家】

正由の事だから手伝いに来ると思うよね……。流石にお客様に用意を手伝って貰うわけにもいかない。

「仕方ないわね……」

パツフェルの店で長居してしまったのは事実。私は急いで、自分自身、作業がはかどるように感じる服装に着替えた。

「よいつしよ……」

それはメイド服だ。何故だかわからないが、これを着ると家事はとてつもなくやる気が出てくる。なんでなのかしら？

「……」

……（鏡を見て今更ながらヒラヒラな服を着ている事を改めて思う）

「（似合ってる……のかしら？）」

……（クルクルターンして決めポーズ【キラッ】）

「……」

……（自分のしている事に恥ずかしくなって赤面）

「……何やってるのかしらね、私は……」

だいたい早くしないと。この姿はまだ誰にも見せた事ない。いくらなんでも恥ずかしい。

「さて……やるわよ!」

そう言っつて私はパーティーの準備を始めた。

【少女調理中……】

ふう……なんとか正由が来る前に終わりそうかしら?後はケーキを焼いて……【ピーンポーン】……。  
……流石早いわね正由。まあこのまま出る訳にはいかない。時を止めて着替えるしか……。

ん?でもちよつと待って?これはある意味チャンス?正由との二人だけの秘密を持つ……

「っつて何を考えてるのよ私!」

うー、パツフェルが言ったデートという言葉が今になって響いて来たわ……。

「(だいたい正由はメイド服を着ていた私を見て喜ぶ?それや正由は一応男だけど……こういうのは好きかどうか)」

でももしかしたらこういうのが趣味なのかも……。

「……私がプレゼント……よ……(赤面中)」

……にゃああああああ?!?!?何を言ってるのよ私!?!?思考が完全におかしくなってるわ!

「咲夜ー?」

うー……こんなじゃこれから正由に顔をまともに見れるかどうか……。

「咲夜ー!」

でもそれくらい期待していいのかしら?でも正由の事だからあまり反応しなさそう……。

「咲夜ー……」

……逆に着せてみようかしら?正由にメイド服。絶対似合う……?  
?

「さ……く……やー!」



「さっきからなによ、正由・・・!？」

あれ、私雇開けたっけ？

「玄関開けっ放しだったよ。気をつけてね。悪いとは思っただけど・・・返事も何もないから入らせて貰ったよ」

・・・。

「早く来て手伝いに来ただけど・・・もう手伝う事ないかな？・・・あれ、咲夜ー？」

・・・はっ!？っ、ついみとれてしまったわ。

みとれてしまったのには今の正由の服だ。いわゆる執事服を着ている。

「正由、その恰好は・・・？」

「ん？ああこれ？まあ小さくてもパーティーはパーティーだから・・・似合ってるかな？」

そう言っつて正由は軽いポーズを決めて私に見せた。

「こちらでございます。お嬢様・・・て感じかな？」

・・・か、かつこいい・・・。妙に似合い過ぎてみとれてしまっわ・・・。

しかも今の言葉、ノックアウト寸前よ・・・ふー・・・ふー・・・落ち  
着いて私。慌てる時間じゃないわ。(赤面中)

「でも咲夜もさ・・・その恰好、可愛くて似合ってるよ」

・・・あ。そういえば私まだメイド服のまま・・・。

「・・・・・・・・」

「ん？咲夜どうかし」【ボシユウ・・・】きゅ・・・「咲夜ー！  
？」

(赤面 オーバーヒート ばたんきゅー)

こうして私は正由の言葉で気絶した為か、人前でもメイド服を着ら  
れるようになっていた。

え？その後の事はどうなったか？

それはまあ・・・ご想像にお任せしますわ。

なんてたって私と正由の二人だけの秘密、ですから。

番外・聖なる夜のメイドさん（後書き）

特別ではなく番外なので、本編に関係が少しあります。

正由

「今回でできた人・何処の人かわかる人はいるかな？」

咲夜

「因みに正由の作者の独断と偏見で決めているイメージＣＶは某週刊誌の不運執事の中の人よ」

他のオリキャラも考えたいな！。

紫

「ねえ・・・ちよっと、正由のヒロインは私じゃ・・・」

最近咲夜がお気に入りになってきたんだよね。一位の紫といい勝負。

紫

「ちよ！？」

咲夜

「ふふふ」

正由

「ありゃりゃ・・・」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0388u/>

---

東方思幻想

2011年12月26日00時46分発行